

特22
212

本居鈴屋翁著述
山崎美成入頭書



和歌集遠鏡

東京書林

魁直樓井口藏版



Handwritten text in a cursive script, likely a historical or religious document. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines within a rectangular border. The characters are highly stylized and difficult to decipher without specialized knowledge of the script.

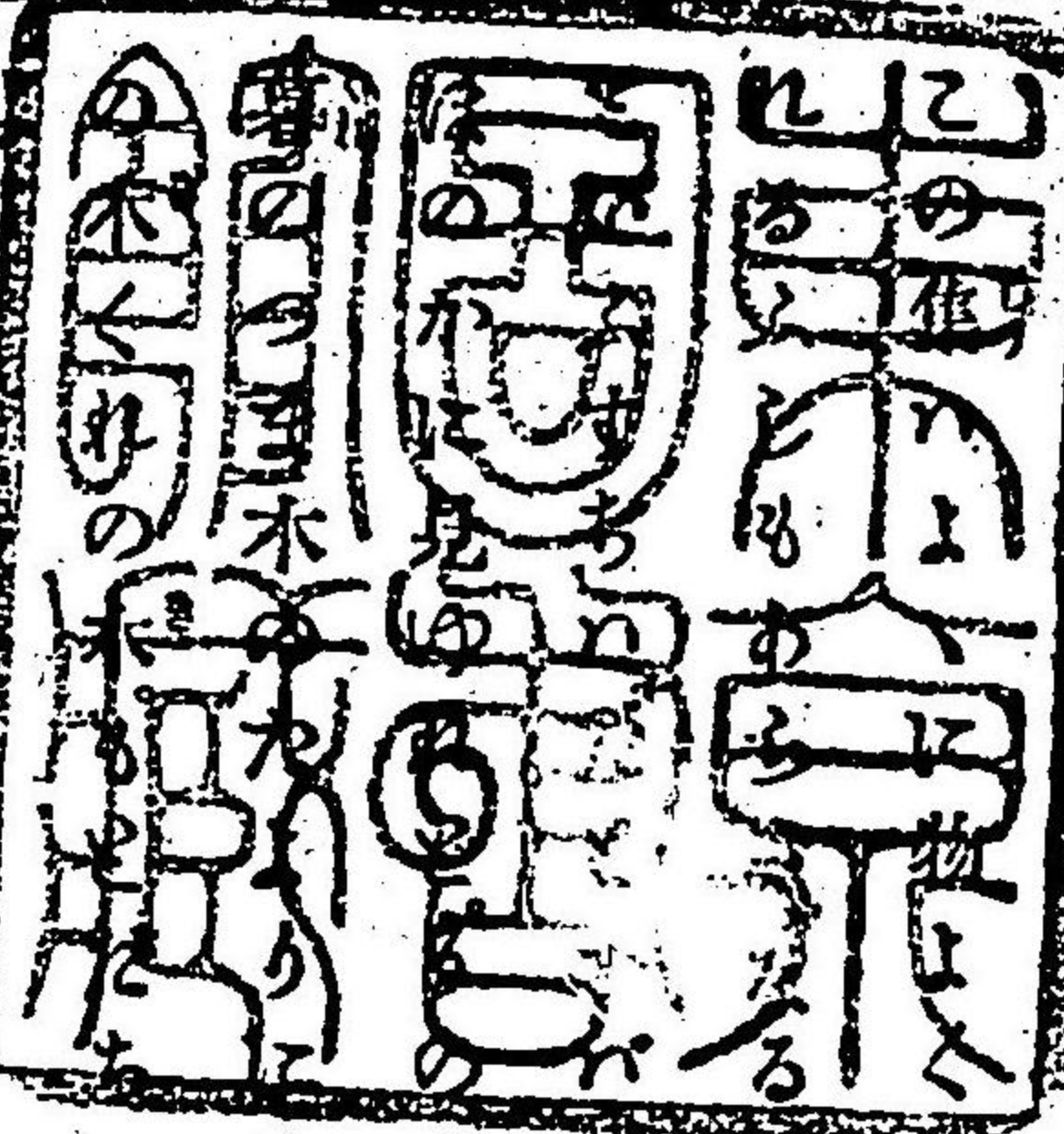
Handwritten text in a cursive script, likely a historical or religious document. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines within a rectangular border. The characters are highly stylized and difficult to decipher without specialized knowledge of the script.

ほくろくや山崎美波

漆園義書

頭書古今和歌集遠鏡端書

雲のゐる遠き梢とは鏡うつせばこよみぬのもみぢ葉



此の誓ひ古今集の歌をもをこくく今の世の俗語に譯せるなり。うもくしれりし人とのちうさくともあまたありて。この今さらさるわざはいかなればといふに。かの注釋いとほるかなる高き山の梢こすまものありとばかりの木とだにあやめもわかぬをその山ちかき里人の明もよく見されるに。さしてかれいとどひたらむに。何のまかしく梢のあるやうにかくなむとやうに語り聞せたらむか。こくくさるのいかによくきりて。いかにつぶさに物したらむにも。人づての耳のかざりしあれば。ちかくて見るめのまさしきに。猶なほにるべくもあらざめるを。世に遠目とほめがねどかいふなる物のあるして。うつし見る

には、いかにとほきもあさましきまでたどるとうつりきて、枝さしの長き
みじかき下葉の色のこさうすきまでのこるくまなく見ゆ分れて、軒近き庭
のうゑ木にこよなきけぢめもあらざるばかりに見ゆるにわらずや、今この
遠き代の言の葉のくれなる深き心ばへを、やすくちかく手染の色ようつし
て見するももはらこのめがねのたどひよかなへらむ物をや、かくて此事の
まも尾張の横井の千秋ぬしのはやくよりこひもどめられたるすぢよては
じめよりうけひきてありける物からなにくれといとまなく事まげさに
うちまぎれて、ぬしもはたさすあまたの年へぬるを、いかにくどまばく
おぼろかざるゝに、あながちに思ひおこして、こたみかく物しつるを、さきよ
神代のまさことも、此同じぬしのねぎことにこそありしが、さのみ聞けむと
やうに、まううこつともがらもあるべかめれを、例のいとふかやまめなるこ
ゝろざしのみ、なしやまの、神といなしにきてすすべくもあらずてな
じ。

○うひまなびなせのためには、ちうさくいかにくはしくどきたるも、物の
あぢはひを甘しからしと、人のかたるを聞たらむやうにて、詞のいさはひて
にをはのはたらきなど、こまかなる趣にいたりて、猶たしかにぬあられ
ば、その事を今おのが心に思ふがごとし、さとりぬがたき物なるを、さどびを
どに譯したるいたゞにみづからさおもふにひとしくて、物の味をみづから
なめて、まれるごとく、いにしへの雅言みなおのがはらの内の物としなれ、
バ、一うたのこまかなる心はへのこよなくたしかにぬらるゝことおほきぞ
かし
○俗言の、かの國このさどことなることおほきが中に、みやびことにち
かきもあれども、かたよれるなかのことば、あまねくよもにわたしが
たければ、かゝることにとりもちひがたし、大かたの京わたりの詞して、うい
すべきわさなりたゝし京のにも、ぬりすつべきありてなべて、いとりがた
じ。

○俗言にも、まなとゝのある中に、あまりいやしき、又たわれすぎたる。又時々のいまめき詞など、はぶくべし。又うるのしくもてつけていふと、うちとけたるものたがひあるを、歌のことに思ふ情のあるやうのまゝに、ながめいでたる物なれり。そのうちとけたる詞して、譯すべきなり。うちとけたるの、心のまゝにいひ出たる物にて、みやびことのいきほひに、今すこしよくあたらば、予かし、又男のより、をうなの詞のことにうちとけたることの多くて、心に思ふすぢのふとあらはなるものなれば、歌のいきほひよくうなつること多かれば、をうなめきたるをもつかふべきなり。又いはゆるかたことをも用ふべし。たとへばおのむことをうるのしく、わたくしといふを、はぶきてつねにワタシともワシともいひワシといふべきをワシヤ、それのをソレヤ、すればをスレヤといふたぐひまたそのやうなこのやうなをソナコソナといひ、ならびをばき省てナラ、マラ、さうしてをソヤテよからうをヨカロ、どやうにいふたぐひ、ことにうちとけたることなるを、これはたいきほひにまた

がひていなか／＼にうるのしくいふよりのちかくあたりて聞ゆるふしおほければなり

○すべて人の語の、同じくいふともいひさまいきはひにまたがひて、深くも浅くも、をかしくもうれたくも聞ゆるわざにて、歌のことに心のあるやうを、たゞにうち出たる趣なる物なるに、その詞の口のいひさまいきはひのしも、たゞに耳にきゝとらで、わきがたければ、詞のやうをよくあぢりひて、よく人の心をおしはかりぬて、そのいきほひを譯すべきなり。たとへば「春されば野べにまづさく云ふ」といへるは、どうかの譯のはては、／＼／＼／＼と、笑ふ聲をそへたるなど、さらにおのが今のたはふれに、あらず。此、下の句の、たはふれていへる詞あることを、さささひとて予かし、かゝることをたにそへされば、たはふれの答へなるよしのあらはれがたければなり。かゝるたぐひ、いろ／＼おほし、あすらへてさささるべし

○みやびこと、二つよも三つよも分れたることを、さささび言に合せて一

いふあり。又雅言は一つなるが、さびごとよては二つ三つにわかれたる
もあるゆゑに、ひとつ俗言をこれにもかれもあつることあり。又一つ言の
譯語のこゝどかしこと異なることもあるなり。

○まさしくあつべき俗言のなき詞より、一つは二つ三つをつらねてうつすこと
あり。又の上下の語の譯の中よその意をこむることもあり。あるの二句三句
を合せて、そのすべの意をもて譯すもあり。そのたとへば「ことならばさかづ
やのあらぬ櫻花などのことあらばといふ詞など、一つはなちていかにも
うつすべき俗言なければ、二句を合せて、トヲモ此ヤウニ早ウ散クラ非ナラ
ハ一向ニ初メカラサカヌガヨイニナゼサカズニハ非ヌツ」と譯せるがごと
し。

○歌よりてもどの語のつゞきまてよをはなせよもかゝはらですべて
の意をわて譯すべきあり。もとの詞のつゞきまてよをはなせよもかたくまもりて
の、かへりて一うたの意よりとくなることもあればなり。たとへば「こぞや

いはひことしとやいはひなせ詞をまもらば。去年ト云ハウカ今年トイハウカ。
と譯すべけれども、さて俗言の例よりとし。去年ト云タモノデアラウカ今
年ト云タモノデアラウカ。どうつすぞよくわたれる。又春くることをたれか
まらましなせ。春ノキタヲ云」と譯さればあたりがたし。來ると來タと
い。たがひあれいも。此歌などの來るは來ぬるとあるべきことなるを、さのい
ひがたき故に、くるるといへるなれば、そのこゝろをわて、キタと譯すべきな
り。かゝるたぐひいとおほしなすらへてささるべし。

○詞をかへてうつすべきあり。花と見てなせの見ての俗言に、見えてといひ
はざれば、花ヤト思フテと譯すべし。わぶとこたへよなせの類のこたふる
の俗言より、こたふるといひはす。たゞいフといへば、難儀チマテ居ルトイへ
と譯すべし。又てにをいをかへて譯すべきもあり。春の來にけりなせのはも
じは、春ガキタツイとガにかふ。此類多し。又てにをはを添へべきもあり。花咲に
けりなせは、花ガ咲タツイとをそふ。この類のどにおほし。すべて俗言にはか

といふとの多きなり。雅言のぞをも多くのガと云り。花なき里なほ花ノナ
イ里と。ノをそふ。又はふきて譯すべきもあり。人しなれば。ぬれてをゆかむ
なほのまもじをもじなほ。譯言をめてい。なかくにわろし。

○詞のどころをふさかへてうつすべきことおはし。わかずとやなく山郭公
などは郭公を上へうつして。郭公の残りオホウ思フテアノヤウニ鳴クカと
譯し。よるさへ見よとてらす月影のヨルヲ見ヨトテ月ノ影ガテラスとら
つし。ちぐさに物を思ふころ哉のたぐひは。ころを上にうつして。コノゴロハ
イロくト物思ヒノシゲイコトカナと譯し。うらさびしくも見ゆるわたるかな
は。わたるを上へうつして。見ツタシタトコロガキツウマア物サビシウ見ユ
ルコカナと譯すたぐひにて。これ雅言と俗言といふやうのたがひなり。又て
にをはもところをかへて譯すべきあり。ものうかる音に驚ぞなくな。どの
うかるねにぞと。すもじは上にあるべき意なれども。さばいひがたき故に。驚
の下におけるなれば。その心をぬて譯すべきなり。此例多し。皆なすらふべし。

○てにをはの事。どもし。譯すべき詞なし。たとへば。花ぞ昔の香にほひけ
るのとき。殊に力を入たるすなるを。俗言に花がといひて。その所にちか
らをいれていさほひにて。雅語のすの意に聞ッすることなるを。まか口にいふ
いさはひの物に。書とるべくもあらざれば。今はサといふ辭を添へて。すに
あて。花ガ昔ノ云と譯す。どもじの例みな然り。こそいつかひさま大かた
二つある中に。花こそちらめ根さへかれめやなとやうに。むかへていふこと
のあるは。さどびごととも同じく。こそといへり。今一つ。嵐にこそみだるべうな
れ。雪とのみこそ花のちるらめ。なほのたぐひのこそ。うつすべき詞なし。こ
れ。すよいとちかければ。すの例によれり。嵐にす云。雪とのみす云。とい
ひたらむに。いくばくのたがひもあらざれば。なりさるをまひていさ。かの
けぢめをもわかむとすれば。なかくにうとくなることなり。たが袖ふれし
や。この梅ぞも戀もするかな。なほのたぐひのももじの。マアと譯す。マアのや
がて。このもの轉れるに。ぞあらむ疑ひのやもじの俗語に。いみな。といふ語の

つゝきたるなからにあるの。そのはてへうつしていふ「春やとき花やおそき
とき」春が早イノカ花がオツイノカと譯すがごとし。

○んは、俗言よのすべて皆ウといふ。來んゆかを、コウイヌウといふ類なり。
けんなんなどのんも同じ「花やちりけん」花ガチツマデアラウカ「花やちり
なん」花ガナルデアラウカと譯すさて此ナツタデといふと、ナルデといふ
どのかひりをもてけんなどとのけぢめをもささるべし。さて又語のつゝ
きたるなからにあるん。多くいいうつしがたし。たとへば見ん人は見よち
りなん後ぞちるらん小野のなごのたぐひ。人へつゞき。後へつゞき。小野へつゞ
きてんは皆なからよあり。此類は、俗語よはたゞよ見ル人ハチツタ後コナル
小野ノとやうまいひて見ヤウ人ハナルデアラノ後コナルデアラウ小野ノ
なごのいはさればなり。まがるよ此類をも。まひてんならんの意を。こまか
よ譯さむとならば散なん後予は、オツ、ケナルデアラウガソノ散タ後ニサ
と譯し。ちるらん小野のハサマメテ此ゴロハ萩ノ花ガナルデアラウガ共野

ノとやうよ譯すべし。然れども、俗語よさはいはさればなかなかにうとし。同
じことながら「春霞たちかくすらん山の櫻をなごは山ノサクラハ霞ガカク
シテアルデアラウ」コト譯してよろし。又かの見ん人は見よなごも。見ヤウト
思フ人ハどうつせは、俗語にもかなへり。歌のさまによりては、かうやうよも
うつすべし。

○らんの譯のくさくあり「春たつけふの風やとくらんなどは、風カカステア
ラウカトと譯す。アラウらんよあたり。カ上のやよあたり」いつの人まよら
つろひぬしんなごの。イツノヒマニ散テシマウタコトヤラと譯す。ヤラらん
よあたり「人よまらぬ花やさくらんなどの人ニシラサヌ花ガ咲タカシ
ラヌと譯す。カシラヌヤとらんよあたり。又上よや何なをいふ。うたがひ
ことばなくてらんと結びたるよの。ドウイフイフといふ詞をそへてうつす
も多し。又相坂のゆふつけ鳥もわがごとく人や戀しき音のみ鳴らんなど。
人ハ戀シイヤラ聲ヲアゲテヒメストラナクどうつす。これのとちめらん

疑うたがひを上へたつしてやと合せてヤラといふなり。ヤラハすなはちやらんといふことなり。又玉かつら今はたゆとや吹風の音も人のきこぬざるらんなどのたぐひも同じく上へうつしてやと合せてヤラと譯して下句をバ一向ニオトツレモセヌと落しつけてどぢひぬれらんどうたがへるまとい上かみありて下よりあらざればなり

○らしはサウナと譯す。サウナはさまならどいふことなるを音便おんべんムサウといひるをはふけるなり。然れば言の本の意もらしおなじおもひきよわたる辭ことばなり。たどへバ物思ふらしを物チ思フサウナと譯すが如き。らしもサウナも其も人ひとの物思ふさまなるを見ておしはかりたる言ことばなればなり。さてついでよいはむは世よまらんとらしとをたゞ疑うたがひの重おもきと輕かろきとのたがひとのみ心得てみづからの歌にもそのこゝろもてよひなるはひがとなり。たどへバ時雨しんげふるらんは時雨ガフルデアラウなり。時雨ふるらしは時雨ガフルサウナの意なり。此俗言のアラウとサウナとの意を思ひて。そのたがひある

とどわかさまふべし

○かなはさとびごとよもカナといへと語のつゞきさまは雅言のまゝよてい。うどきが多ければつゞける詞をば下上よおきかへもしあるい言をくはへなどもして譯すべし。すべて此辭は歎息の詞よて心をふくめたるとおほければ譯うらしはそのふくめたる意の詞をもくはふべきわざなり。

○つゝの譯うらい。くさくあり又雪ゆきのふりつゝなどいひすてとぢめて上へかへらざる。テと譯して下にふくめたる意の詞をくはふいひすてたるつゝの必下にふくめたる意あればなりそのふくめたる意ハ一首の趣おもよてえらる○けりけるけれハワイと譯す。春は來きけりを春ガキマワイといへるがどしまたこそ結むすびよもワイをそへてうつすことあり語ことばのきれざるなからよあるけるけれハとよ譯さそ
○なりなるなれハヤと譯す。ヤハデアルのつゞまりてルのはぶかりたるなり。さる故よ東の國くによてはマといへりなりももどよありのつゞまりた

るなれば俗言のギヤダもと一つ言なり。又一つ「春くれ雁かへるなり」人
まつ虫の聲すなりなどの類のなり。あなたなるとをこなたより見聞てい
ふ詞なればこれハレ雁ガカヘルツアレ松虫ノ聲ガスルツなを譯すべし。
此なりはギヤと譯すなりとの別にて。語のつゞけさまもかはれり。ギヤと
つす方のつゞく詞よりうけ。此なりハ切るゝ詞よりうくるさだまりなり
○ぬぬるつづるたりたる。さまなど。既に然るうへをいふ辭は俗言にハ皆お
しなべてタといふなりぬなりぬるをバナツタ來つ來つるをバキタ見たり見
たるをバ見タ。ありさありしをバアツタといふが如し。タハタルのハをば
けるなり

あつれをアハレと譯せる所多したとへバ「あれにけりあはれいくよの
やどなれやを何年ニナル家チヤツヤアハレキツウ荒タツイと譯せる類
なり。かく譯す故ハあはれハもと嘆息とあてすなはち今世の人の嘆息
ア、ヨイ月チヤア、ツライフチヤ。又ハレ見事ナ花チヤハレヨイチヤナ

といふこのアハレとをつらねていふ辭なればなり「あつれてふことを
あまたにやらじとや云ふハ花を見る人のアハレ見事ナといふその詞を
あまたの櫻へやらじとなり。あはれてふことこそうたて世の中を云ふハ
ハレオイーシャト人ノ云テクレル詞コソ云ふなり。大かたこれらにて心
得べし。さてそれより轉りては何事にまれアハレと嘆息かるゝとの名と
もなりてあはれなりとも。あれをさるしらぬなともさまゝひろくつかふ
そのたぐひのあはれハアハレと思はるゝとをさしていへるなれば俗言
にはたゞにアハレといはず。今は又その思へるすぢもまたかひて別
譯言あるなり

○すべて何事よまれあなたなるとよハアレ或はアノヤウニ又ソノヤウニ
なといひ。こなたなるとよハコレ或は此ノヤウニなどいふ詞を添て譯せると
おはさハその事のおもひさをさだかませんとてなり
○物よよせてその詞をふしたる。又物の縁の詞のよしなどすべて詞のうへ

を思ひねたらむしもめちづくはもはふさもあちたりもしてよかし

本居宣長

よ
やまどくハ本ト大和
國のとなり代久し
久皇都となしませし
皇國ゆゑに、やまど
く云てをべて日本の
とさなりぬよりて
こゝの日本の歌てふ
意なり

歌ハ古ハかならず
たひじもの故に人の
みならせ鳥けた物も
虫も音たて、鳴き
つるハ皆かたがら心

頭書 古今和歌集遠鏡卷之第一

やまとうたえ人の心せたねとしてよろづのとはとぞ
なれりける

○哥ト云物ハ人ノ心ガタチニナツテイロクノ詞トナツタモノヤワイ
世の中にある人ことわざとけきものなれば心よあもふ
とを見るものきく物あつけていひいだせるあり

○世中ニカウシテ居ル人ト云フモノハ。イロクト事ノ多イモノヤニ
ヨツテ。ソノナニヤカヤノ事ニツケテ心。ニ思フコトヲソノ時。見ル物
ヤ聞クモノニツケテ。云ヒ。マシタノチヤ

花よなくうぐひす水よすむかひづのことゑさまけいひき
としいけるものいづれか歌とよまざりける

○花ノ枝ヘキテ鳴ク鶯ヤ水ニスンテアル蛙ヤナドノ聲チキケハツレク

よりうたひ出すなれ
人の歌にかはらぬ
まなり哥として必
まみかたふべきもの
ぞ

此事のむかしも今も
常あるとなり雄略天
皇の御ことろたけ
くしくませるに歌
もて和奉りしと日本
紀に見へし類ひこれ
らハ歌の總をいへる
なり

おもふに此注は凡天
皇の未開繪花山の御
ことろなむに古のこ

くも意得ぬ人のしわ
さなりよもて注ご
に難ありこゝも女神
男神となり給へる
さる夫婦の契始たま
へるといしらるれ
と右のこどくにいひ
ていはじめて女神男
神と成たまへると云
に開なされて文のつ
たなきなり女體男體
もどよりわかちませ
るをや
えびす歌とハ日本紀
にこの歌を夷曲と書
ていなぶりと訓むそ
れしらぬ人の夷はえ
びすたもよむもて心
ひあやまれるなり

ニ面白イトコロハ昔歌ハナチヤスレヤ生テアルホドノモノハ何カ歌ヲ
ヨマヌツ鳥類畜ルキマデ皆メンクニツレノ歌ヲヨムヤワイノ
ちからをもいれきてあめつちをうごかために見へぬ
おは神とあわれと思はせ男女のなかきをもやはらげたけ
きものくふのこころをもなごさむるの歌なり

○チカラモ入レズニ天地ヲウゴカシタリ。目ニ見エヌ鬼ヤ神ヲ感マシ
タリ。男ト女トノアヒダラ。ムツマシウナルヤウニシタリ。アラクマ
シイ武士ノ心ヲヤハラゲタリナドスルモノハ哥キヤ
この歌あめつちのひらけはむまりける時よりいできに
けり

○サテ此哥ト云モノハ。天地ノハジマツタ時カラ。デケタワイ
あまのうきはしのしたにてめ神を神とをり給へ
ることさへる歌なり

○ソレハカノ伊弉諾伊弉册ノ尊ガ天ノ浮橋ノ下デ。御夫婦、神ニオナリ
ナサレタコトヲ。オヨミナサレタ哥ノコトヤ
しかあれとも世よつたはることのひさかたのあめにし
ていしたてるひめよはじまり

○サウヤケレレ。ソツカリト哥ト云テ世中ニツタハツテキタノハ
天デハ下照姫ト云神カラハヨマレ
またてるひめどのあめわかみこのめなりせうどの神のかたちせり
谷ようつりてかやくをよめるねびすうたなるべし。これらのも
じのかずもさだまらず。歌のやうもあらぬとなり

○下照姫ト云神ハ天若彦ト云々神ノ御内ヤウデアツタ。ソノ奇ト云ハ
下照姫ノ兄ゴガ。殊ノ外ウツクシイ神デ。ソノ身ノ光リガ。ソコラノ岡
ヤウ谷ヘツトテ照リカワイイタヲナヨンダエビス歌ト云ガアルガ。其事
デアラウ。コレヲハ文字ノ數ナドモ定マツタコトナウテ。歌ノヤウデモ

あらかねのつちよていすこのをの尊よりぞおこりける

○ あらかね 此ノ國士アハ素盞鳴尊カラサハツマツタワイ

ちばやふる神代にハ歌のもじもさだまらずすなほにし
てことこのころわきがたかりけらし

○ あらかね 神代ノ時分コハ歌ノ文字ノ數モマダ定マツタフモノシヨコトノ

ホカ古風ナフデ。ドウ云フヲヨシマモノヤラソノ歌ノ心ガ今見テハツ
カリニクイリデアツタサウナ

人の代となりてすこのをのみことよりぞみそもじあま
りひともしのよみける

○ サテ人ノ代ニナツテカラ。カノ素盞鳴尊カラ始マツタ歌ノトホリニ
卅一字ニヨムフニハナツタワイ

すさのをのみとはあまてるおはん神のこのかみかり女とすみ給ハ

五七五の定めもなし
心のゆくまゝにうつら
ねたるまことの心辨
まへがたしきやこは
いぶかしき尊さまな
りにしへまなぶ人
は大かたにあきらむ
るをいかでわきがた
まじはひふ

こは素盞鳴尊のほ下
めて三十一言によみ
ませしよて人の世
となりてぞそれにな
らひてよむと云をか

く詞を響きていひか
つ句を上下におきか
へてかけるは文の一
體なりうたにもこの
體を隔句とて専らよ
むな

八色の雲云は八の
字假りてかけるより
思ひあやまりて云も
のぞやくもハ雲の彌
立つをいふなり八重
がきも彌重めぐらす
垣なりさて稻田ひめ
まこめまらすると
て作りませる宮なり

めでいほめいたすと
云詞なりあはれびハ

むどていづもの國ニ宮づくりし給ふ時よそのことろよやいろの雲
のたつを見てよみ給へるなり

○ スサノヲノ尊ハ天照大神ノ御兄ゴ様ヤ。ニヲソノ御歌ト云ハ。女ト
一所ニ御住ナサレツトテ。出雲國へ御殿ヲオタテナサル。時ニソノア

タリへ八色ノ雲ガ立ツタヲ御覽ナサレテ。オヨミナサレタ御歌ノフチ
ヤ

入雲たついづも八重垣つよこめハ八重垣つくる
その八重がきを

○ アレイクヘモ雲ガムツタ。アノ出ル雲ノ八重垣ワイノ。吾妻ヲ入レル
宮ノタメニ。アレ雲ガ八重垣ヲ作ツタ。アノ八重垣ワイノ

スつもの。ちでくもなりでくつをまりて。つとある。こハ國名より
あらず。

かくてぞ花をめで鳥をうらやみ霞をあそれひ露とかさ

あさなげくに言はそへて稱るにも惑ふるにもいへりかなしびの身にしむこと云

千里の道も一歩に出で山も御座よりあると云漢文によりてか

あさなげくに言はそへて稱るにも惑ふるにもいへりかなしびの身にしむこと云

とほきどころもいでたつあともとよりはじまりて年月をわたり高き山もふもとのちかひぢよりなりてあま雲たを引までおひのほれるごとくよこの歌もかくのごとくあるべし

○キツウ遠イ所デモ。タツタ一足フミマス。足モトカラ始マツテ。イク月モ何年モカ、ルホドノ所マデモユキ。又キツウ高イ山デモフモトノナリホコリホドノ土カラ段々ツモツテ。雲ノタナビクホド高ウナルヤウナ物デ。此歌モソノトホリナ物デアラウ

難波津のうたのみかどのおぼんばぢめなり

○サテ難波津ノ歌ハ天子ノ御事ヲヨシメ歌ノハヨメザヤ

大さゝきのみかどのなみのづみてみこと聞さける時東宮をたがひよゆづりてくらむにつき給ひて三年よなりよけれハ王仁といふ人のいふかり思ひてよみてたてまつりける歌なりこの花ハ梅の花をいふなるべし

○難波津ノ歌ト云ハ。仁徳天皇ノ難波津ニ御座ナサレテ。皇子ト申シタ時ニ東宮宇治ノ若郎子ト御タガヒニユツリアフテ。御位ニ御ツキナサレイデ三年ニナツタニヨツテ。王仁ト云タ人ガマチカネテシンキニ思フテ仁徳天皇ヘヨシメ上タ哥ヂヤ。其歌ニコノ花トヨシメハ。梅ノ花ヲ云マデアラン

わがをしへ子須賀直見がいひける。東宮をハ東宮とを。寫しあやまれるなり。ととをを似たり。

あさか山のとははうねへのたはふれよりよみて

○アサカ山ノ歌ハ奥州采女ノマハムレカラヨシメ歌デ

この注もあやまれりすてに御父天皇宇治のみこそ皇太子に立おかせ玉ハ東宮を夫れに譲給ふとは云ま下きことなり天皇の御位をこそゆづりあひたまへれまた王仁がいぶからめること國史に見へず此歌はすてに御位につりせ給ふて後にいはいて奉りし意なりこの花を梅なりといふも後の説なりいしへハ木の花とは諸木の花をいへり

山の井のあまきもの
なればみせせせなるな
り種香山は種具にあ
りてて、ウヤウに下に
て仁きよみさなるを
後世は必上へかへる
言せせりいにしへは
た、いひおさふる意
なりさてこの葛城王
は祝田使きて田をわ
かちて作らしむるこ
とのあるがその任な
どにてくだらせ給ひ
けん

さて二歌とも世に
めでたき功ある歌な
る故にいにしへ書な
らふは下めにまづ書
てあたへおつぎなへ
もならはしぬとなり

かつらまのふはまみとみらのおんへつかりたりける時に國のつかさ
ことおろそかなりとてまうけなせしたりけれをすまじがりけれはう
ねへなりける女のかひらけとりてよめるなりこれよぞおほきみの心を
けよける

○コレハ高城王ト云チ。御用ヲ興州ヘツカハサレタ時ニ國ノ守ナドガ御
馳走トシタケレド。アツラヒガ鹿末ナトテ高城王ガ。キツウツケウニ思
ハレタ時ニ。其國ノ采女ヲアツメ女ガ。盃ヲ持テ出テヨシメ歌チヤ。
トコロガ此歌デ、高城王ノキゲンガナホツメツイ

此ふた歌ハ歌の父母のやうよてぞ手ならふ人のはなめ
よもしける

○此ナニハツトアサカ山ト二首ノ歌ハ歌ノチ、親ハノ親ノヤウデ。子
供ノ手習ノ始メニモマツ是ヲナラフウエトチヤツイ
そもそも歌のよまむつかりからのうたにもかくぞある

詩の六條もていへれ
どそれをしらぬよそ
どさにいへるは上手
の筆つきなりされど
こゝにあげたるは漢
の六條と意義異なる
ぞ

おほささきのみかど
といふこの歌までこ
れ又誰ぞ一人の注な
るべしそれ以後に本
文に書まざらばせし
ものよこれも大字に
かくはわめし

へき

○サチマツ歌ニ六ツノワケガアレチヤ。唐ノ詩ニモ大カメ此六ツノワケガ
サアレチアラウ
そのむくさのひとつにけそへうたおほささきのかさを
そへ奉れる歌

○ソノ六イロト云一ツニハッハ歌。カノ仁徳天皇ヲオヨソハ申メタ歌
かひいつよ咲やこの花冬ごもり今をはるべとさくやこ
のばな

○難波津ニサクコノ花ガサアモウハ春サキヤト云テサクコノ花ガ
といへるなるべし
○ト云ヤウチガサウデアアラウ
ふたつにわかをへうた

咲花に思ひつく身のあぢきなき身よいたつきのいるも

宇高伎みなにはづの歌はそののみ只今渡來たるから人のはやくこの詞を得てかくまでうるはしびたる歌をよみ出んこといふかきなり猶しひていは日本紀素戔の歌にて大ざきの天皇の御うへを題になぶり得たる人のよみけるにやあらん

朝霜になすうへておきてといふなり

しらべて

○咲テアル花ニ。ウツカリト思ヒ入テ居ル者ノサテモイラザルコワイノ。身ニ必勢ナコトノデケテ。クルモシラズニサといへるなるべし

これのたといひて物よたどへなせぬものなり此の歌いかよいへるよかあらむそのころながたくいつよたどと歌といへるなりこれよのかなふべき

○此カヅへ歌ト云ハ。ソノ事ヲタメコトニ云テ。物ニタトヘナドモセヌモノチヤ。ソレニ此ノ咲花ニト云歌チカヅへ歌ニ出シタハドウ云心チヤヤラ。ガテンガイカヌ。五番メノタイコトウタト云所へ出シタ歌が。此ノカヅへ歌ニハ叶フデアラウ

みつよのあすらへうた
君よけさわたの霜のおきていなむ戀こまごといよきえ

やわたらむ

○オマヘガ。別レテ起テイナヤツメナラ。ソレハ今カラ。戀シウ思フタビゴトニ。消ルヤウニ思フテタメタルデガナアラウ。君よの。一本君がどあるよろし。といへるなるべし

これの物よもなすらへてそれがやうよなむあるとやうにいふなり
この歌よくかなへりとも見へず

○此ナメラへ歌ト云ハ。物ニナツラヘテ。ソノ物ノヤウナド云ヤウニヨソダラ云ヤガ。此君ニケサト云歌ハ。ヨウ叶ウタトモ見エヌ

たらちめのおやのかふこのまゆごもりふせく
もわるか妹よあをきて

○養蚕ノマエニコモツテアルヤウニ親ノヒザモトニ居テ外へ出ヌ娘ナレハ。ドウモエアハイデ。サテモノモシキナカナ

物にもなすらへてと云の詩の比の體を云にてこゝになすらへ歌とあるに右の歌かなふべしなすらへ歌と云を物にも進らへてと云ふゆひがとこなり
たらちめといふは後のあやまりなり萬葉集垂乳根之母我養蠶さかけり萬葉による

に野宮歌の下に入
くこゝにハ叶ハサ

ありて海は遊磯海を
つめていふよむの
算ふるなり
思おもふこのかた
もしられずさまぐ
に思ひみだるゝをい
はんとて濱のまこと
にたとへていへり
かくれたるまごころな
きハ時の奥の體もて
いふにてあかし須摩
の延せの歌はよくか
きへり

かやかなるやこれよのかなふべからむ

○此ヤウナ歌ガ。此ナスラへ歌ト云ニハ叶ウデアラウカ
よつよのたどへうた

わが戀のよむともつまじありう海の濱のまごころよみ
つくとすとも

○タトヒ海ノ濱ノ砂ノ數ハヨミツクスト云テモ。オノレガ戀ノヤゲイ數
ハヨミツクサレマイ

これのよるづの草木鳥けだものよつげて心を見するなり。此歌
のかくれたるまごころなむなきされどはじめのそへ歌をななじやう
なればすこしさまをかへたるなるべし

○此タトへ歌ト云ハ。イロくノ草木ヤ鳥ケダモノナドニヨセテ思フ心
ヲ見セタモノチヤ。ソレニ此ウガ戀ハト云歌ハ。カクレテ所ガチナイ。
タトへ歌ハ物ニタトヘテ云テ。アラハニハ云ハヌチヤニヨツテ。カク

たゞこゝの物にも
よせずこの意をあ
りのまゝにいへるな
り
この歌は少のかぎり
なく直にいひつけ
しなり

すまのあまの鹽やく煙風をいたみ思はぬかたに
たかびきけり

○スマノ浦ノ海士ガ鹽ヲヤク煙ガ風ノハゲヲサニ。思ヒモヲラヌ方ヘナ
ビイテイタライ

此歌ナトガ。タトへ歌ニハ叶ウデアラウカ
いつはりのなまよありせいにかわがり人の言のまうれ
とからまじ

○偽リト云フ一ガナイ世ノ中デアラウナラ。ドレホド人ノ云テクレル詞
ガウレシカラウツ

この注も詩の雅の體を云にてこの言辭にかなはず正の字をたゞさもよめこのハその意にあらず直の字をたゞさもなほさもよむその義なり山さくらの歌はかくれたると生なけれど詞はたゞこのにあらでかざりしころあればかなはせいはひいむを延て云詞なり神につかふるに物ごをいみつしみてする時は非常を忌もて神をいはひ君をいはふなり

とらへるなるべし

これいどのとりのほりたゞしさをいふなり

この哥のこゝろさらよかならずとめうたをやいふべからむ

○此、タムコト歌ト云ハコトノト、ノウチ。タミヨイノヲ云ギヤ。コノイツハリノト云フ歌ノ心ハチカラ叶ハヌ。此、歌ハトメ歌ト云フ物デアラウカ

山櫻あくまで色を見つるかな花ちるべくも風ふかぬまに

○山櫻チ腹一ハイ十分ニ見タサチモアリガタイコカナ。花ノナルクラ井ノアライ風モフカヌ。ケツカウナ御代デサ此、歌ナドガ。タムコト歌ト云ニハ叶ウデアラウカ

むつにいはひうた

此どのうらぐもとみけりなまきくこのみつがよつば

殿づくりせり

○此、御屋形ハゲニモ御簀宮ナチヤライ。御殿ノツマトガ段々ト三ツモ四ツモツグイテサテノケツカウナ御普請ギヤ

とらへるなるべし

これい世とほめて神よつぐるなり。此、哥いはひうたをい見へすなむある

○此、イハヒ哥ト云ハ。御代ヲホメテ。其ノ事ヲ神ヘ申スノチヤ。ソレニ此、コノ殿ハト云哥ハドウモ。イハヒ哥トハ。見エヌテイギヤ

春日野にわかなつみつ、萬代をいはふ心の神ぞあるらん

これやすこしかなふべがらむおほよとむくさよわかれむとはあゐるまじきとよなむ

○コレラナドノ哥ガ。イハヒ哥ト云コハ。メコシ叶ウデアアラウカ。マ

云那リそれよりうつして祝ひの事にもいはふといへりさき神をいさゆり花ならんこの百合は並あかく未に三ツ枝にわかれて花咲葉を葉と相むかひたるに似たればなりされどその始りから國の福草よりしていはひ物にする故にのみしと云べけれ此の歌も定めてさきくこの三ツといはん冠りにおきたるなるべし

世をほめて神に告るさいふは漢の漢の義にてこの詞にかなはすこゝには世をほ

めて詩につくるさい
はでもないはふこのみ
にと足れるなり
春は野の歌はいはひ
歌なれど注にいふ意
はこもらず凡そく
くまにわかれんこ
はあるま下云とば
ろし

今の世の中は今の
京となりて延喜の
るまでを云

これは歌の徳をしひ
でかされるものなり
御國のいにしへ人は
こころにくらべてお
わすつて心のま
さのみを打いづれば
戀の歌多きなりこ
もから人のこころも

アタイテイ。哥ノシナイ。六イロニ分レウハドウモサウハワケラレ
ヌイデナゴザル

今のよのなかいろよつき。人の心花よなりよけるよりあ
だなる歌はかなきとのみいでくれバ

○サテ今ノ世中ハ人ノ心ガ花トシイコニツイテ。ウハキニナツタカラ
シテ。アマナキツトセヌ哥ハツカリテケルニヨツテ

いろこのみの家ようもれ木の人とれぬとよなりてまめ
なるどころよの花すまきはよいたすまきことよもあら
ずなりよたり

○大切ノ歌ガ。色事シノ家ノ。ナイシヨウゴトニナツテ。カタイト
コロハハ。アラハシチマキレヌヤウコナツテシマウタ
ろのはじめをおへバかへおべくなむあらぬ

○ホンヌイノトコロナ思フテ見レバカウアラウコトデハナナイ

てかけり
むかし御身近くつ
かふまつる人々に歌
をよませて御あそび
ありしなり

御國のいにしへの朝
に歌をもて人の賢愚
をこみ給ひ及第の
列國史に見わたるこ
となむ下に僧正通昭
の歌のまことすくな
しといひ業平の情あ
まりてなごいへり運
昭ハ先帝の御ために
出家してつひに僧正
位ニのぼるまでめで
たき終をなしその人

古のよのよのかき春の花のあした秋の月の夜とどけさ
ふらふ人よとめしてとよつつけつゝ歌とたてまつらしめ
給ふ

○昔ハ御代々ノ天子様ガ。春ノ花ノ時分ヤ。秋ノ月夜ナド云キニハ。イ
ツデモ。ツメテ居サツシヤル衆ヲ御前ヘメシテ。ナンツレカツレノ事
ニツケテハ。哥ヲ上ルヤウニ仰付ラレタ

あるハ花とこふとてたよりなきところにはまどひあるハ
月と思ふとてあるべなきやとよたどれる心を見給ひて
さかとおろかなりとあるとめとけむ

○サウシテ。或ハ花ヲ見タウ思テ。ヨリツキモナイ。所ナドマデ尋チマ
ハツテアルイタリ。或ハ月ニ執心シテ見ニ行テハ。マダ出ヌサキヤ
入テマウケアヤナド聞イノニ。案内モシラス所ヲアナラヘコナラ
ヘトシテアルイタリ。スルヤウナ風流ナ心々チ。ソノロンダ哥デ考ヘ

の歌はまことすくなく
 心楽平のいかにもみ
 たりにおはするが實
 情もあまれるものに
 いへるこの人々の
 心む歌とこころさま
 のうかうへなきをい
 ひながら賢愚の歌も
 てわかち給はんこと
 おぼつかなきことな
 り前にも云御國に詩
 歌もて科場を立られ
 しこそ是よりいなし
 へたしかなる書辭に
 は見ぬぬことなり

テ御覽ナサレテ。ソノ歌ニヨツテ。アレハカヤコイモノチヤ。アレハ
 オロカナ者チヤト云フサ。御存知ナサレテモヤウチヤ昔ハサ
 花をこふといふより。やみよたをれるといふまですべ。風流たる人
 のさまをいへるなり。さかるは諸説。これを愚なかとよとれるなり。ひが
 となり。さかしおろかなるをさろしめすなりとてよめる歌のさまをもて
 こそ考へ給へるなれ。もしこれらおろかなるかたのまわごとせ。今ひ
 とつかしき方をいはてり。ととのはすたも愚なる方のみをいひ
 て。やむべきまよひあらざるや
 とかあるのよにあらす。これ石にたとへつくは山よか
 けて君とぬびひ
 ○サテ又サウハカヲテナシニ。サマ石ニマトヘタリ。筑波山ニツクネリ
 シテ君ヲ御祈リ申マ
 よろこび身にすぎたのしみとくろよあまり

のにもかけのあれど
 君がみかけにますか
 げもなし

かしくつ、世をやつ
 くさん高砂のまのへ
 にたてるまつならな
 くに
 墨の江のきしの姫松
 人ならびいく代かへ
 しとこはましものを
 われこても久しくな
 りぬ住よしのきしの
 ひめ松いく代へら
 ん

○又ハ身ニ過タヨロコビノアルキヤ。心ニアマルホドオモシロイコトノ
 アルキヤナド
 ふじのけふりによそへて人とこひ松虫の音友をしの
 び

○アルヒハ又富士ノケムリニヨツヘテ。人ヲ戀シウ思フコト云タリ。松
 虫ノ聲チキイテ友ダチヲナツカシウ思タリ

高砂住の江の松もあひおひのやうよて

○キツウ年ガヨツテハ。高砂ヤ住ノ江ノアノ久シイ相追ナヤウニ思ハレ
 タリ。スルキニモヨミ

あひおひの。今の俗語もいふとよて。相追なり。そのもとだがひよ
 追み追れみする意より出たる言よて。いくばくの前後もなく。大かた
 同じはどあるとよらへり。

をこと山のむかひを思ひいで。をとなへこの一とまを

今もこそあれわれも
 ちかしの男山さゆゆ
 く時もありこしもの
 な
 秋の野になまめきた
 てるきみなへしあな
 かしがまし花もひこ
 き
 残りなくちるぞめた
 きさくら花ありてよ
 の中はてのうけれバ
 秋風にあへすちりぬ
 るもみぢバの行へさ
 ためぬわれぞかなし
 き
 あら玉の年の終りに
 なることば雪もわが
 身もふりまさりつゝ
 行年のせしへもある
 歳ますかみ身るか

くねるにも。歌をいひてぞなぐとめける。

○又年ヨツテハ。男ハ。ヲトコザカリテアツタ昔ノ事ヲ思ヒマシ。女ハ
 ソカザカリノ早ウスギタヨトヲ愚癡ニクヨクト思ウヤウナ時モ
 ミナ歌ヲヨンデヤ心チハラシタチヤヤワイ
 又春のあじたゝ花のちるを秋の夕くれよこの葉の落
 るをきよ
 ○又春ノコロ朝花ノナルノチ見タリ秋ノユフガタ木ノ葉ノオナル音ヲキ
 イタリ
 あるひととてとよかゞとの影よ見ゆる雪と浪ととなけ
 き
 ○或ハ鏡ノ影ニ見エルワガ白髪ヤ面ノシワノ毎年多ウナルノチ見テ歎イ
 メリ
 草の露水のあわと見てわが身をおどろさ

げさへにくれぬとお
 もへん
 長歌ニ難波のうらに
 立なみのなみのしは
 にやおぼれなん
 露をなとあだなるも
 のと思ひけんわが身
 も筆におおぬばかり
 ぞ
 水の沫のきえてうき
 身といひあがらな
 れてもなほたのまる
 一語
 いにしへの睡のなだ
 めいやくきもよきも
 さかりありしもの
 なり
 わくらはにさふ人あ
 ちバ頂のうらにも
 むほたれつゝわぶこ

○草ノツユヤ水ノ沫ノキユルヲ見テ。我身モアノトホリヂヤト云フチ知
 テ驚イタリ

あるひのきのふのさかえおこりて時をうらなひよよわ
 びしたしかりとゆうとくなり

○アルヒハ昨日マデハ繁昌シテ。何ノ思ヒゴトモナカツタ者ガ。ニハカニ
 不仕合せニナツテナンギチシタリ。又モトシタシカツタ中ガ。ソエン
 ニナツタリシタトキ

あるの松山の浪をかけ野中の水をくも秋萩の下葉をな
 がめあかつきのしぎのはねがまきとかぞへ

○或ハ末ノ松山ノ波ヤ野中ノ清水ヲタトヘニシタリ。萩ノ下葉ヲナガメ
 タリ曉ノ鳴ノ羽根ガキスル數ヲカツヘタリ
 あるのくれ竹のうきふしを人よひよこの川をひきて
 世の中をうらとまづるよ

こたへよ
君をおきてあたし心
をわれもたは末のま
つ山なみもこえなん
いにしへの野中の清
水ぬるけれどもとの
心をしら人ぞくむ
秋萩の下葉色つく今
よりやひさりある人
のいねかてにする
曉の鳴の羽がきもも
はがき君がこぬよの
われぞ敷かくよにふ
ればこどのほしげき
くれ竹のうきふしど
きにうぐひすぞ啼
ながれていもせの
山の中におつるよし
の、川の上しやよの

○或ハ **神** 身ノウイ事チ人ニハナヤ。吉野川ヲタトヘニ引テ世ノ中ヲ恨
ンダリ
きつるをいへる詞次の文とあひかなはず。いかゞ
今いふこの山もけふりたゞすなりながらの橋も造るな
りとまきく人の歌あのとぞ心をあぐさめける
○又今テハモウ富士山モ烟ノヌ、ヌヤウニナリ。長柄ノ橋モ又アタラシ
ク出来タルト聞ク人ナドハ別ニテ歌ヨムハツカリテ心ヲハラシメテ
ヂヤソイ
つくるを。盡なりと見たる脱の。ひがとなり。もし盡なれば。つきぬ
ありとこそいへ。つくるなりといはす。これ雅言の必ず定れる格なり
いよこへよりかくつたのるうちにもならの御時よりぞ
ひろまりにけるかのおほんよや歌の心をしろしめしけ
む

中
上に富士のけふりに
よそへて人を戀とい
ひてこゝにその烟
も立すなりにたるこ
いへりこれは延暦十
九年にこの山大にや
けその後も貞観のこ
る又大やけしがその
後はけふりの絶たる
なり
いにしへ今の歌よむ
人をいへり
ならの御時よりとい
ふよりみつのくらふ
さいふまでい後人の
昔そへたるものさか
ゆ
この草も後に書そへ
たるものぞまづ右に

○ズツト遣ッカラ右ノ通り。傳ハツテキタウナニモ奈良ノ御時カラ別
テヒロマツタソイ。其ノ御時代ニハ定メテ歌ノワケヲヨウ。御存知デア
ツタモノデガナアラウ
かのおほん時よおほきとつものくらあかきのもとの人ま
ろかん歌のひじりなりける
○其御世ニ正三位柿ノ本ノ人麿ハ哥ノ聖人デアツタソイ
これハ君も人も身とあはせたりといふなるべし
○コレハマコトニ君臣合舞ト云モノデアラウ
秋のゆふべ立田川よあがる、紅葉をばとかどの御目よ
錦と見給ひ春のあした吉野山の櫻ハ人まろが心よハ雲
かどのとかんおほえける
○秋ノ夕ダレニ立田川ニ流レル紅葉ヲハツノ奈良ノ帝ノ御目ニハ錦ノヤ
ウニ御覽ナサレ。春ノ朝吉野山ノ櫻ヲハ。人麿ノ心ニハ雲カトハツカリ

云々奈良の書に
いたりて歌に君臣合
體云べき君ましま
すまして人丸の時
代もたがへれば云に
たらぬことなり

ある人これは世説新
語補といふ書に陳元
方季方といふ兄弟の
人あり元方が子の
長父季方が子の孝先
さおのくその父の
才を祖父太丘にとひ
しゆ太丘かこたへ
に元方は兄さなしが
たく季方ハ弟さなし
がたし云しをもて
かきしものぞといへ
り

思ハレヌワイ

又山のべのあか人といふ人ありけり歌はあやしく九へ
なりけり

○又山ノベノ赤人ト云人ガアツヌワイ。コレモ哥ニ妙ナ名人デアツヌワ
イ

人まろいあか人がかよにたゝむとかたかくあか人の人ま
ろが志もにたゝむとかたくなむありける

○人マロハ赤人ノ上ニヌツコハナリニクカラウ。赤人ハ人マロノ下ヘ
オキコクイクラナコトデアツヌワイ

ならのとかさの御うた

立田川ももちとだれて流るめりわたらば錦なか
やたえなむ

人まろ

奈良の帝の御歌は右
にいへるとどくなり
又梅の花ほのく等
の歌のみなよみ人し
らずと表にしるされ
たるを正しとすべし
左の注は探ま下きこ
さその所々にいはん

梅の花それとも見へずひさかたのあまぎる雪の
なべてふれゝバ

ほのくくとあかしの浦の朝ぎりよ島かくれゆく
船をしぞ思ふ

赤人

春の野にすくれつとにことと我ぞ野となりか
み一よねにける

○春ノ野ヘスミレヲツマツト思ウテ。オレハ來メガ。アマリノドカテ面
白サニ。此ノ野デサ一夜寐ヌワイ

わかぬ浦よしほとちくれは。かたをなとあしづき
さしてたづ鳴わたる

○若ノ浦ヘソホガミチテクレバ。干瀉ガ無サニ。蘆原ノ方チ指テ鶴ガ鳴
テツタルアレ

歌のままを得たるを
は體のよろしきとい
ふなりまことすくな
しきは此僧正の口が
ろくをかきききまに
よまれたれの深くし
づまりたる歌なきを
云なり

こゝに注せる歌ども
の下にならみ出たれ
ばその所にいふべし
下みなこれにならふ
ぞ

○ツノ官位ノ高イ衆ヲハナヤニ。其ノ外ニ近イ代ニ哥ノ名ノ聞エヌ衆ハ
をなひち僧正遍昭ノ歌のさまのえたれともまとすくな
したとへへるにかけるとうなを見ていたづらよ心をこ
がすがごとし

○マツ僧正遍昭ハ哥ノテイハ。得テアツタケレドモ。マコトガスクナイ物
ニヤトヘテイハウナヲ。繪ニカイテアルオヤマヲ見テ。センノナイコ
ニ必ラウゴカスヤウナモノチヤ

淺とどり糸よりかけて白露を玉にぬけるはる
のやなきか
そちす葉のよどりよまぬ心もて何かの露を玉
とあざむく

嵯峨野よて馬よりおちてよめる
名にめでゝおれるばかりぞ。女郎花われおちにき

と人にかたるを

ありはらのなりひらひそのころあまりてことばたら
きまほめる花の色あくてよはひのこれるがごとし

○在原ノ業平ノ哥ハコノロガアツテ。詞タラズテウトシボンダ花ノ色ハ
ナウナツテ。ニホヒノ残ッテアルヤサナ

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわがみひとつ
のもとの身にして

大かたの月をもめでしこれぞこのつもれば人の
おいとあるもの

ねぬる夜の夢さやかなまほろめはいやはかな
にもありまごころ哉

清
ふんやのやすひでいといたくにてそのさまにやは
きいはゝあき人のよきぬきたらんがごとし

いたりて心るかよく
まれたれは調ひかす
かにめづらせて聞
させたり調のたらの
と云にあらを且し
ほめる花にたごへた
るはいかにぞや業平
の歌は曲にして心に
はなやきたることをか
きりなきを

こゝに巧なりといふ
下の歌にも見え

て賢にしかりそのま
ま身におほす言葉の
巧のうるはしきに歌
の風體はいやしとい
へり

詞のかすがすめなる
さは後又幽文體さて
はなやかならずまぐ
らき云なり

始終たしかならずと
いこのころを始終
たしかに云はてぬ
なりこれも詞體に
ていほむるなりたし

かならぬは得ぬ所を
云たさへの意あきら
かなり

喜樂の歌多く見へす
よりてかく書るもの
と思へど此六人の詞
ども各對の詞もてか
きたるをこれらのこ
とありては文のつく
き見がれてきこも是
をも注し除きみれ
ばよくつゞきてめで
たし
あはれなるやうにて
とはほむる詞つよか
らぬはまこし得ぬと
ころを云ふ歌はもと
よりつよきをよしと
すればかこみあはれ
の詞こはうるはし
きに用ひたり

○文室康秀ハ詞ハタクミデ。哥ノ體ガツノ詞ト相應セヌ。イハハアキン
ドノエイキル物ヲ着タヤウナモノヂヤ

吹からに野への草木の志とるれはうべ山風をあ
らしといふらむ

深草のとかさの御國忌に

草ふかき霞の谷にかけかくしてう日のくれしけ
ふにやのあらぬ

宇治山の僧させんいとほかすかにしてはじめをはりた
しかならずいはゞ秋の月と見るに曉の雲よあへるがで
とこし

○宇治山ノ僧喜撰ハ。詞ガオクフカウチ。ハシテ。始メトハテトノツリア
ヒガシツカリトセヌ。イハハ秋ノ月ヲ見ルノニ曉ノ雲ノデ、キタヤウ
ナモノヂヤ

わが庵いとやこのたつとむかぞすむ世をうぢ山
と人のいふなり

よめるうたおほく聞えぬはかれこれをかよひしてよく
しらぬ

○此ノ人ハヨシマコガ多ウハ傳ハラヌニヨツテ。アレヤコレヤチ見合スコ
トガナラネバ。トクトハシレヌ

きのこまちのいにしへのそとほりひめの流なりわの
れあるやうにてつよからぬいはゞよき女のなやめると
ころあるに似たりつよからぬいおまの歌なればなる
べし

○小野小町ハ昔ノ衣通姫ノ流ナ哥ヂヤ。アハレナヤウデ。ツヨウナイ。イ
ハハエイメノナヤム所ノアルニ似テ物ヂヤ。ツヨウナイノハ女ノ哥ニ
エデアラウ

このかのこまの
評に「いにしへの衣
通姫の流なりさいへ
るも後のしわざなり

そのさまいやしの上
に何さかほめたる詞
の落たるならんどあ
る人いへりしからざ
れバこの六人おの
く得ると得ぬを
云にかなはずすべて
文は對にかくさる

は對のかたちなくて
はあらぬものなり

今は歌のよむ人の多
きをいひひろとれる
詩としげき木葉にた
さへたりされど歌を
りとは見えてそのよ
しあしを評するまで
の人はすくなむさい
へりすべてのと大か
たにてはよしあしを
きめがたくいたれる
うへにていたれる人
のきはめたる評にあ
るべきものなり

思ひつゝぬればや人の見えつらん夢とまりせば
さめざらまじを

色見えでうつらふ物の中の中の人の心の花にぞ
わりける

わびぬれば身をうき草の根と絶てさそふ水あら
はいなむとぞ思ふ

そとほり姫の歌

わがせこがくべきよひありさへがけのくものふ
るまひかねてくるとも

大とものくろぬしコトバ
オチナリうのさまいやしいはなまき
木おへる山人の花のかけやすめるがごとし

○大友黒主ハオモシロイ所ガアツテ。哥ノ體ガイヤシイ。イハハた
さい薪ヲ負テ。
井ルヤマガオヤチガ。花ノ木ノ下テ休やすテ居ルヤウナテイヤ。○千秋あ
き云

オモシロイトコロカアツテ。さあるは。真字平に類有ニ透裏一とあるに。より
て。補はれたるなるへし。此序には。これにあたる詞の有しが。落たるなり

思ひいで戀とき時はつかりの鳴ておたると
人のあらきや

鏡山いざ立よりて見てゆかんとしへぬる身にお
いやしぬると

このほかの人々その名きこゆる野べにおふるかづらの
いひひろごりはやしよまげまこの葉のごとくよおほか
れと歌とのとおもひてうのさましらぬなるべし

○此、外ニモ名ノアル人々ハ野ニハヒヒロガツテ。葛かづらヤ林はやしニシゲウハエテ
アル木ノ葉ヤナドノゴトクニ。タントアルケレドモ。ミナ自分じぶんニ哥うたヤ
ト思ウテ居ルハカリテ。實ニ哥ト云モノ。○シハシイヤウスヲ知ラ
ヌモノヤヤト見エル

かゝるよらまますべらまのあめのとたしろとめすよより

のときこゝのかへりよなむありぬる

○サテ右ノ通りデアツメトコロニ御當代上様ノ天下ヲ治メサセラルノ
モ。今年デ九年ニナルカ

うつくしみのなみは
やしまさいふによせ
て云御園を大八州と
いふこと神代紀にみ

あまねまおほんうつくしとの浪やしまのほかまであび
れひろまおほんめぐものかけつくり山清のふやとよりの
まげくおさこまして

萬機をきこしめすあ
まりにもろくの事
をもすて給はぬより
して歌の古をもわど
れぞおこしいで給ふ
となり萬葉集の撰の
後ばさることたえに
したこの度おぼしお

○ドコカラドコマデモモレタ所ノナイ御慈悲ガ。日本ノ外マデイキリタ
ツテ。イヅクノウラマデモ。ミナソノ御蔭ヲカウムヲヌ者ハナイ。難
有イ時節デ

よろづのまつりごとときこしめすいとまもろくの事
とすてたまはぬあまのりよ

○イロくノ御政事チトリ行ハセラル、御ヒマトニ其ノ外ノ一切ノ事
マデヲ。御ステアンハサレヌアマリニ

いにしへのよをもあすれじふりにことをもおこと給ふ
とて今も見そあひし後の世にもつたれとて

○古ハアツメ事チモ御忘レアンハサルマイ。年久シウナツタヲモ御取
立アンハサウト云フ思召レデ。今モ御覽アンハサレ。又後々へモ傳ハ
レト思召テ

延喜五年四月十八日に大内記きのとものり御書のとこ
ろのあづかりききのつらゆあさきのかひのさうくわんか
ふとかふちのみつね右衛門、府生とぶのたぐみねらにお
はせられて

○當年延喜五年四月十八日ニソレテ四人ノ者へ仰付ラレテ
まんえうさうよいらぬふるきうたごづからのをもたて
まつらこしめ給ひてなむ

○萬葉集ニ入ラヌフルイ。哥井ニ自分くノ歌チモ集メテ差上マヌルヤ

して仰せことあるな
り此おこし給ふの下
たいにしへ今の歌を
あつめてむらばせ給
ふこと云阿をはぶきた
るものぞ

この人々の中に友前
のみ五位にてその外
ハ賤官なるがおふせ
おふられるは時にけ
ざれたれはなり

春夏秋冬の部より鶴
龜のかえあき秋夏草
のたさへハ戀逢坂山
の手向わ歌ミ離なき
りね春秋にもはらぬ
くさんくのは雜體よ
り大歌所までの歌を
かねたり

ウニト仰せ付ラレテサ

うれがあかかよる梅をかきすよりはじめてほととぎすと
きよもとぢをくり雪を見るよいたるまで

○ソノ中ニモ春梅ノ花ヲカザス哥カラウツタツテ。郭公ヲキク哥。紅葉
ヲ折ル哥。雪ヲ見ル哥マテ四季ノ部

又つるかめにつけて君をおもひ人ともいはひ

○又鶴龜ニツケテ君ノ御壽命ヲ長カレト思フテ御祝ヒ申シタリ。其ノ外ノ
人チモ祝フタ哥

秋萩夏くさを見てつまとこひ逢坂山にいたりて手向を

いのり

○又秋ノ萩ノ花ヤ、夏ノ艸ヲ見テハ妻ヲ戀シテ思フタ戀ノ哥。逢坂山マ
テ旅立テ行テ手向ノ神ヲ祈ル歌ナド

あるハ春夏秋冬にもいらぬくさくさの歌をなむえら

ハせ給ひける

○アルヒハ四季戀ナドノ部ニモイヲヌイロノ雜ノ歌マテサ。撰ミ

マセイト仰付ラレテ其通り撰テ集メタ

すべてちうたはたまきなづけて古今和歌集といふ

○其歌數都合千首卷ノ數ハ廿卷。題號ハ古今和歌集ト名ケタ

かくこのたびあつめえらばれて山下水のたえき瀆のま

さごのかきつもりぬれば

○カヤウニ此ノ度此ノ集ガ出来テ

ヨイ歌ガ數多クアツマツタコナレバ

いまわすか川の瀨になるうらとも聞えきさぐれ石の

いはほとなるよろこびのみぞあるべき

○モウコレカラハ歌ノ風ノワルウ變ルキヅカヒモナウテ次第コノ道ノ

末長ウ繁昌スルメデタイハカリガサアラウ

この集に千二百余の
歌をむらばれしや
文のさまにて千秋
いふなり
此集一度えらば未永
くつたらんずるい
はひことをへり山下
水の絶ぬとへは瀆の
眞砂は數多きたさへ
あすか河のかはらぬ
を云さしれ石の萬代
経ておひきまらん
と云なり

にほひすなるはうる
はしき餘情もなく
むなしき名のみなが
きこせし云こころな
るを秋の夜春の花は
文のあやなり

それまくら詞の春の花にほひすくなくしてむなしき名
のみ秋の夜のながきどかこてれば

○サテ我々ドモガ儀ハヨミ歌ハ 春の オモシロイトコロモナイノニ。

實デモナイ名ハカリ 秋の 上手ナヤウニ云ヒハヤサレルコトナレバ

おのがをしへ子なる。三井、高蔭がいはいくまくら。われらを寫しあや
まれるなるべし。われどまれと似たり。同じ貫之の大井川、序もわれ
らみじかさ心の云々。後拾遺集序にも。仰せをうけ給ひれるわれら云
々。伊勢が長哥にも。涙の色なみだいろのくれなるわれら。が中の時雨もて云
いはく。それまくら。それがしらの誤なるべしおのがとを。それが
しといへるとも。中むかしの文又例ありといへり。今思ふは此ふたつ
のうちなるべしまらうの誤とするにわろしまるといふ。無禮き語よ
用ひたる例なれば此、序などよいふへまらうす

かつの人のみへにおそりかつの歌の心よは思へど

○世間ノ人ノ聞トコロモナント思ハレ又一ツニハ歌ノ思フ心モ恥カシ
ケレドモ

たおびく雲のたちる鹿のおきふしつらゆきらがこの
世におおじくうまれて此、事の時にあへるをなむよろこ
びぬる

○拙者ドモガ此、世ニ同ヲヤウニ生レアハセテ。カヤウナ仰付ラレノアル
時節ニ逢フタコトヲサ。 たおびく マツテモ居テモ あか 寐テモサメテモ

悦ビマス

ひとまろなくなりたれど歌の事とゞまれる哉

○カノ人磨ハトウ無クナツテシマウヌケレドモ。歌ノ道ハノコツテアル
サテノ難有イイカナ

たとひとまろつりつりたのしひかなしひゆきかふとも

人の聞をおそれまた
歌の心にはお思へる
となりかく歌を生あ
るものやうにいへ
るハ色の巧みなり年
のおもはんことぞや
さしきよめるたぐ
ひなりかつハその事
をすうちに又々化
の事をもなすの詞な
りたなびく雲さは立
居さいはんだめ鳴鹿
はおきふしさいはん
體なり

この詞は論語ニ文
王すでに没したれど
文王にあらすやま
云フをうつして書キ
たるならんかれハ孔
子のみづからを云な

リその意にてハ、こゝに書上人のみづからを云フに聞キまがひて上にへりくだりて云ふことすじたがへるやうなり

これよりこの集の末ひさしく傳はらんことさいふさて世のたはすうしなはず傳はりて世にさゝまらば未の世に歌の風體意旨をも知ららん人の奈良の京より今の都のはじめて集撰されしころのこゝをあるひひたふさびあるはひをねがはずらめかもしふなり松の葉あきやぎの糸正木のうづらなは冠辞

○コレカラ後タトヒ時代ガ段々カハツテ。ドノヤウニナリユクト云テモこのうたのもも若あるをやあをやぎの糸たえず松の葉のちりうせせしてまよきのかづら長くいたはり鳥のあと久しくとゞまならん

○此集がモシ世間ニ。青柳の松のタユウセモノ末長ウ鳥の久シウ傳ハツテサヘアツタナラマ。あるをやの四字ハ。次のあをやぎよりまぎれたる誤なるべし。もしハ。若よて。久しくとゞまらばといふへかゝなる詞なり

歌のさまともなりことこのころをえたらむ人の○末代ニ至哥ノヤウスラモヨク知り。物モ心得テアラウ人の大ぞらの月を見るごとくよらいよらへをあふぎて今とこひざらめかも

○此集ヲ。サテく結講ヲ集キヤト云テ。天十月ヲ見ルゴトク仰ギ。ヌツ

トシテ。今此當代ヲシクハマト云リハアルマイワサテ千秋云。いにしへふ古へにてすなはち此延喜の御代をさせりとい。後世よりい

のやうにいへり鳥のあさひから國のいにしへに鳥の足あきを見て字をつくりたるをいふことより文字をしいへりかものもは助た語にてもミハツの一言のみなり別にふりきこさわりあるにあらず

春歌の上

ふるとしに春たける日よめる 在原元方

年の内は春の来はけり一とせきこぞとやいはんとこと
やいのむ

○年内ニ春ガキタツイ。コレデハ。同マ一年ノ内ヲ。去年ト云タモノデ
アラウカ。ヤツハリ。コトミト云タモノデアラウカ

春たちける日よめる 紀貫之

袖ひちてむすびと水の氷るを春立けふの風やとくらむ

○袖ヲヌラシテスクウタ氷ノコホツテアルノヲ。春ノキタ今日ノ風ガ。
フイテトカステアラウカ

題しらすき よと人しらすき

春霞立るやいづこみよと野のよとの山に雪はふりつ

ことしの春の歌なれ
バ假りに去年ふるさ
しさいへるなり
此ノ歌むらびどりて
は置くべきところな
くまづ天の春にした
がひてこゝにのせる
なり
或人此歌は春頭のめ
いほく北類なきよし
に云ハ心を得ぬひが
ことなり
この歌は時々のうつ
り行こまをいへり二
句は夏あるハ冬その
間に秋を省けりきて
その氷をハはる立け
ふの風はとくらんと
よめりし奈良の都の
ころの人のよめるな

るべし此歌のすなは
にたけ高きを見て上
の袖びちてのこまか
なるを思ひくらべよ

春かけては冬より春
懸ていまだ雪のふり
つぐと云ことあり此
詞前へより後へかけ
るこまにも又後より
前へあくるにもいへ
り是をばやくより思
ひあやまれる歌多し

○春ガキテ。霞ノ立タハトレトコギヤツ。見レハ吉野山ニハマダ雪ガフ
ツテ。ナカク春ノケキハミエヌガ

二條後の春のはじめの御歌

雪の内に春の来にけり鶯の氷る涙いまやとくらむ

○マダ雪ノツモツテアル處へ春ガキタツイ。コレデハ鶯ノ氷ツタ涙モモ
ウトケルデアラウカ

題しらすき よと人しらすき

梅がえにきさる鶯春かけて鳴きもいまだ雪のふりつ

○梅ノ枝ヘキテ居ル鶯ハハヤ鳴ケレドモ。マダ此ヤウニ春マデカケテ雪
ガフツテ。春ノヤウニモナイ

鶯なけども。春かけて。いまだ雪のふりつとく意なり。

雪の木よふりかゝれるとよめる 素性法師

春立バ花とや見らむ白雪のかゝれる枝に鶯のなく

春歌の上

ふるとしに春たける日よめる 在原元方

年の内は春の来はけり一とせきこぞとやいはんとこと
やいひむ

○年内ニ春ガキタワイ。コレデハ。同マ一年ノ内ヲ。去年ト云タモノデ
アラウカ。ヤツハリ。コトニト云タモノデアラウカ

春たちける日よめる 紀貫之

袖ひちてむすびと水の氷るを春立けふの風やとくらむ

○袖チヌラシテスクウタ水ノコホツテアルノヲ。春ノキタ今日ノ風ガ。
フイテトカスデアラウカ

題しらす よと人しらす

春霞立るやいづこみよと野のよとの山に雪はふりつ

こましの春の歌なれ
バ假りに去年ふるま
しさいへるなり
此ノ歌はらびとりて
は置くべきところな
くまづ天の春にした
がひてこゝにのせる
なり
或人此歌は春頭のめ
いほく比類なきよし
に云ハ心を得ぬひが
ことなり
この歌は時々のうつ
り行こまかいへり二
句は夏あるハ冬その
間に秋を省けりさて
その氷をははる立け
ふの風はとくらんご
よめりし奈良の都の
ころの人のよめるな

るべし此歌のすなほ
にたけ高きを見て上
の袖びちてのこまか
なるを思ひくらべよ

二條後の春のはじめの御歌

雪の内に春の来にけり鶯の氷る涙いまやとくらむ

○マダ雪ノツモツテアル處へ春ガキタワイ。コレデハ鶯ノ氷ツタ涙モモ
ウトケルデアラウカ

題しらす よと人しらす

梅がえにきさるる鶯春かけて鳴をいまた雪のふりつ

○梅ノ枝ヘキテ居ル鶯ハハヤ鳴ケレドモ。マダ此ヤウニ春マデカケテ雪
ガフツテ。春ノヤウニモナイ

雪の木よふりかゝれるとよめる 素性法師

春立バ花とや見らむ白雪のかゝれる枝に鶯のなく

春かけては冬より春
懸ていまだ雪のふり
つぐまよこさり此
詞前へより後へかけ
るこまにも又後より
前へかくるにもいへ
り是をばやくより思
ひあやまれる歌多し

○春ニナツタレバ。花ヂヤト思フテヤラ。雪ノフリカ、ツテアル木ノ枝
ヲ驚ガナク

題とらき

よみ人あらき

心ぞし深くそめてしとりければ消あへぬ雪の花ととゆ
らん

○トウカラ花ノ事ヲ深ウ思ヒユンデ。居ルガソノユエチヤヤラシテ。春ニ
ナツタレバ。ソノマ、。雪サヘマタロクニ消ヌノニ。ソノ残ツテアル。
木ノ枝ノ雪ガ。ハヤ花ニミエル

ある人のいはくさきの
のおほきおほいまうちぎみの
ちぎみの歌を注しか
れど後人のかけるも
のなればさるにたら
すこの君のよみ給へ
るならば此集になら
みおもてにかゝざら
ん云は忠卿公の御
事あり後に明君とて
侍大路大直になし給
へは前のさはいへり
下に年ふればよはひ
は老ぬの歌に前のお
ほきおほいまうちぎ
と云とも見へたれば

此歌古く聞ゆれば。三の句。をりけれかなるべし。をりければよやの
意なり。この格萬葉多し。然るを此集のころよいたりてい。けれか
といふ詞の。耳なれぬ故よ。ければととなへ來つるか。はた後の人の。か
いはの誤と心得て。さかしらよ改めたるよもあるべし。然れども。け
ればよての結のらむとかけあひわろし。されば結を一本よ。見ゆる

ここのみよみ人しら
すさあるべきいばれ
なし

かどあるも。後よかけあひを思ひて。改めたるよやあらん。

ある人のいはくさきののおほきおほいまうちぎみの歌なり

二條后のとう宮のとやまむ所とまこえける時正月

三日おまへよめしておほせごとあるあひだ一日の

てりなら雪のかしらにふりかゝりけるをよませ

給ひける
ふんやのやまひで

春の日の光りよあたる我なれと頭の雪となるぞわびし

ま

○此節ノ春ノ日ノ光ノヤウナ難有イ御惠ミチ蒙リマヌル私テゴザリマス
レドモ。年ヨリマシテカヤウニ頭ガ雪ニナリマヌルハ難儀ニ存シマ
スル。ロマリマシタ物ゴザリマス

雪のふりけるを

きのつらゆき

霞たちこのめもはるの雪ふれば花なき里に花ぞ散ける

大のめの萌るをばる
きのつらゆき

ひかけたるおりさて
雪のいづこにもふる
ゆゑに花なき里も花
ぞちるこよめり
はるの初めのさまを
はかなくいひしうた
歌なり

この歌ひいたすらに
鶯を思ひ入てよめり
かうやうにひたすら
によむが歌のめでた
きおり

○霞ガタツテ。木ドモノコノメモ張ッ出ル春ノコロ此ヤウニ雪ガフンバ花
ノナイ里ニモヤ。花ガナルツイ。トント花トミエル

春のはじめによめる ふちのらのとあは

春やどき花や遅きと聞わかん鶯だにも鳴きも有かな

○ハヤ春ニナツタナレバ。モウ花ガ咲サウナ物ギヤニ。マダサカヌハ春
ノ来タガホドヨリ早イノカ。花ノサクノガホドヨリオソイカ鶯ナリ
トモ鳴イタラ。ソレデドナラギヤト云フコトガシレウニ。サテモマア
鶯サヘナカヌイカナ

春のはじめのうた とぶのたぐみね

春きぬと人いへども鶯のなかぬかぎりいあらじとぞ
思ふ

○春ガキタト人ハ云ケレドモ。マダ鶯ガナカヌ。ナンデモ鶯ノナカヌウ
チハ。イツマデモ。オレ。春デハアルマイト思フ

寛平御時きさの宮の歌合のうた

源、まよきみ

谷風は解る氷のひまをどようちいつる波や春のはつ花

○春ノ初メニ。谷ノ風ニ。アソココトケル氷ノヒマトカラウチジス浪
ハ。テウド花ノヤウニ見エルガ。コレガ春ノハツ花ト云モノデアラウカ
まよのともものり

花の香を風のたよりまたへてぞ鶯こそふるるべよの
やる

○風ノ吹テイク幸便コ花ノ香チコトツケテ。ヤツテ。ソレヲ鶯チサソヒ
マシテクル案内者ニハスルヤヤ

大江千里

鶯の谷より出る聲かくば春くるとを誰かまらまじ

○谷カラ鳴テ出テッル鶯ノ聲ガナクバ。春ノキタト云フマレガシラウ

あら下は春といへど
しかにあら下とい
ふなほぶきてきかせ
たり

さて上にはまたうぐ
ひすの鳴ぬほどの歌
をあけて其間に谷風
の歌をへたて、又鶯
をあけたるはこの歌
は事ヲ鳴ころをよめ
るとすべし

新撰萬葉にハ春はく
るともたれかしらま
しきありこゝにいな
ほして入られしにや
意あきらかにてめで
たき歌なり

聞く人の心にうきこ
きなごありける時う
ぐひすの聲もそのど
こくきいなさるいな
るべし

この歌は古體なり朝
なく聞えよるこへる
そのよるこぶを詞に
云に云盡さよむが
古歌なり上のみをも
かざりなくおもしろ
けれこの歌のこま
ひろきは及ばぬな
るべし

若草にはつまこいは
ん冠辭なり春のわか

在原、棟梁

春立と花もよほぬ山里のものうかる音に鶯をなく

○春ニナツテモ花モナイ。山中ノ里デハ。ナニモハリヤヒガナサニ。鳴キ

トモナサウナ聲ヲシテサ。鶯ガナク。千秋云。下ノ句。ものうかる音にぞ。鶯のなく
れるてにかはな
リこの類おほし。

題しらぬ

よと人おらぬ

野べをく家をしせれば鶯の鳴あることゑの朝なく聞

○ツレハ野邊ノ近イ所ニスマヒチヲ非レバ。鶯ガヨウ鳴テ毎日アサカ
ヲ聞マス

春日野のけふのを焼く若草のつまもこもれり我もこも

○此ノ春日野ヲ今日ハ焼テクレルナヨ。妻モ來テアソシテ居ル。我モキ
れり

テ遊デ居ルホドニ

かすが野のとぶ火の野守出て見よ今いくかありて若菜

摘てん

○此ノカスガ野ノ飛火野ノ番人ヨ。出テヤウスヲ見テクレインツチハコノ野

ニ付テ居レバ。タイガイ知レルデアラウガ。マウイクカバカリアツテカ

ヲ。若菜チツミニハ來ウツ

と山にの松の雪たよ消なくに都の野べの若菜つとけり

○山ニハアレ雪サヘマダキエズニアツテ。松ナドモ白ウシニルニ京ハ。ハ

ヤメツキリト春メイテ。野ヘン人ガデ。若菜チツムワイ

梓弓おして春雨けふふりぬ明日さへふらばわかあつみ

てん

○二オシナメテドモカモ春雨ガマツ今日フツタガ。アスマ一日フツタ

ナラバ。オホカタ若菜ガツマル。クラ井ニナルデアラウホドニ。野へ出

神のめづらしくうつ
くしまるものなれ
バ夫婦にたさへたり
いせ物がたりにむさ
しのはげふはなやき
そとあるはこの歌を
作りかへて物語にし
たるまでなり

さぶ火野は春日野の
内にあり烽のこま平
防令にくはし
あづさ号はあさつ
く冠辭なりこは語
をへたてはるどつ
いきたらん又与いお
して張ものなればさ
しいひ下しつこいふ
もあしからずされを
已におすてふこま
むかしのおみにみ

えねばしはらく階句
ならんといふなり
君さよむこいにし
へい友ごちはもさよ
りにて天皇、後の臣
下をさしてものため
へる例ありまた親王
の時にてましませば
誰人をも指給ふべし

春日野ハ奈良のみや
この時宮人たちがい
遊ぶと石高きによ
りてこの人土佐日記
にもけふなれどわか
なもつまず春日野の
とほるに思ひてさへ
よめり

テ。若菜ヲツマウツ

仁和のまかどみことにおまじくける時に人よわ
かな給ひける御歌

君がため春の野よ出てわかなつむ我ころもでよ雪のふ
りつゝ

○ソノモトへ。進しんセウト存ゾテ。野へ出テ此若菜ヲツンダガ殊ノ外寒イコ
トテ。袖へ雪ガフリカ、ツテ。サテくナンギヲ致シテ。ツンダ若菜
デゴザル

歌奉れとおほせられし時よみてたてまつれる

つらゆき

春日野の若なつみにや白妙しろたへの袖ふりはへて人の行らむ

○ソザよろはく春日野ノ若菜ヲツミニヤやちんラ。アレ白妙ノ袖ヲツツテ。ツレダ
ツテ人ガイクツ

打聞ふりはへの説いか延はとはぬあふのはぬとい。假字さへ異なるも
のをや

題しらせ

在原行平朝臣

春のさる霞の衣ぬきとうきみ山風よぞ亂あだるべうなれ

○春ノ着ル霞ノ衣ハ横ノ糸ガウスサニ。山風ニキミダレルデアラウサウ
見ユル

寛平御時きさの宮の歌合よよめる

源ひねゆきの朝臣

ときひなる松の緑も春くれば今一しほのいろまごりけ

○イツモカハラヌ松ノ青イ色モ。春ガキメレバ。マ一入染あせヌヤウ一色ガマ
シヤウイ

歌奉れとおほせられし時よみて奉れる

へらといふ詞萬葉に
なじ此類より注にも
よきすへくべきなを
云て詩の定まれるを
へらとて少しなだ
らかに開ゆるとてい
ふにや

衣をはるさいひかけ
しより緑のころもて
ふ色によせてよめる
なり

新撰和歌集に糸より
かくる時しもぞと見
むたり

つらゆき

わがせこが衣はる雨ふるごとく野へのこどりぞ色まよ
りける

○二ハル雨ノフルタビニ。野ヘンノ草ノ青イ色ガダンノ増増ワイ

わがせこが説。打聞よろし。妻が丈の衣をはるといふ詞なり。餘材あ
やまれり。

青柳のいとよりかくる春もぞとだれて花の綻はゆるみにける

○糸チコツテハホコロビモヌフコギヤニ。青イ柳ノ糸チヨリカケル春ノ

コロハケツクサ。花ガ咲ミダレテ。ホコロビルワイ
はころふる。花のひらくをいふ

西大寺のほとりの柳をよめる 僧正遍昭

淺とどり糸よりかけて白露と玉にもぬける春の柳か

○アレアノ柳ヲ見レバ。ウスモエギ色ノ糸ヲヨツテカケテ。キレイナ白

イ露ヲマア玉ニシテツナイデ。サテモト見事ナ春ノ柳カナ。餘材
わるし

題くらき よみ人くらき

も、千鳥とへづる春の物ごとくわらたまれとも我ぞふ
りゆく

○鶯ヤナニカヤ。鳥ノオモシロウサヘツル春ハ物ゴトコナニモカモ改マ
ツテアタラシウナルケレドモ。オレガ此身バカリハサ春ノクルタビニダ
ンノトフルウナツテイソ

をちこちのたづ濁清きもさらぬ山中よおほつかかくも呼子よぶこ
鳥かな

○アチモコナモ。案内モシラヌ此山中ニナンギヤカ呼子鳥ガナイテ人
ヲヨブガ。ドコチヤヤラサテノマアシツカリトシレヌーカナ

雁の聲とまゝてこゝへまかりける人を思ひてよめる

玉にもとふふにてさ
てもかく玉になして
つらぬけるもの哉と
めで入たるをいへり
この詞づかひをよく
心に入てみわ人の常
あらことのみ思ふ
なり
百千鳥にさまぐの
説あれどみないにし
へにあどなきつくり
ことなりゆめく信
すべからず
よぶこ鳥の春の暮よ
り夏かけてなく鳥な
り此聲の人をよぶが
ととく聞ゆるにより
て呼子鳥と云是をも
秘め事のやうにいへ
り

凡河内躬恒

道行ふりとの道行ふるなり物に觸るるなるをもて道行ついでのこととされり

春くれは雁かへるなり白雲の道行ふりにとやつてまし

○春ニナツタレハ。アレ雁ガカヘルヲ。雁ハアノヤウニソラチトシテ北

國ヘ方ヘユクヤガコレハヨイトコロデ。ユキアフタ。コトヅケチマ
チヤラウカヨ

伊勢

かへる雁をよめる

春霞立を見すて、行雁の花なき里に住やあらへる

○オツ、ケ花ガ咲キヤニマア。此ヤウニ春ノ霞ノタツタノヲ。ミステ、イ
スルアノ雁ハ。花ト云モ、昔カラ。ナイ里ニヌミナレタ、イカイソレ

デ花ノ面白イヲ。チラヌデガナアラウ

餘材花なき里の説わろし

よみ人しらす

題しらす

折つれば袖こそには、梅の花わりやとこゝに鶯のなく

こゝのそこのあたりに來啼かといへど

○梅ノ枝チ折タニヨツテ。ソレテ袖ガコホフノデコツアレコ、ニ梅ノ花

ハアリモセヌノニ。此袖ノニホフノヲ。梅ノ花ガコ、ニアルト思フカ
シテ鶯ガ來テ鳴ク。打聞わろし

色よりも香ころあわれとおもほゆれ誰袖ふれと宿の梅
かも

○梅ノ花ハ色モヨイガ。色ヨリ香ガナホヨイワイ。ア、ハレヨイニホ

ヒチヤ。此ヤウニヨイニホヒノスルハ。タレガ袖チフレタ此庭ノ梅ノ
花ツイマア

宿近く梅の花うゑじあちまきく待人の香よあやまたれ
ぬる

○ムヤクナチキヤニ。庭ノ近イ所ニ梅ハウエマイツ。花ガサケハアマリ
ヨウウツデ。待人ハ來モセヌニ。ソノ人ノ袖ノニホヒニトリチガヘラ
レルツイ。千秋云。梅うゑじ花の
あぢまきなくと心得へし

かく物ごとくにふかく
立入て云事いいにし
への風流なり

梅の花立よるばかり有とより人のとがむる香よぞらみける

○梅ノ花ノ下ヘチヨット立ヨツタト云ホドノコガアツタガ。ソレカラ。人ノフシンチウツヤウコト衣モノガ香ニソマツタツイ。キツイ勾ヒナモノヂヤ

梅の花をとりてよめる

東三條左のおほいもうちぎみ

鶯の笠に縫てふ梅の花折てかきらん老かくるやと

○ソウタイ笠ハツムリヤカホヲカクス物ナレハ。鶯ガ笠ニヌウト云梅ノ花ヲラツテ。吾ガ年ヨツタ形ガカクレルカドウヂヤトツムリヘサシテ見ヤウ

題しらす

素性法師

よそよのみわかれとぞ見し梅の花わかぬ色香のをりてなりけり

○オレハアハウナ今マデハ。梅ノ花ヲタゞヨソニハツカリ。サアハレ見ナカト思フテ見テ居タガ。梅ノ花ノドウモイヘヌ色ヤ香ハ折テカウ近ウミテノコヂヤウイノ。又々ヨソニ見タヤウナコデハナイ。餘材わろし

梅の花をりて人におくりける とものり

君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をもえる人ぞける

○此ノ梅ノ花ヲ貴様デナウテハ誰ニ見セウツイ。色デモ香デモ。ヨウ知テ居ル人ガサ。ヨシアヤハ。ヨウシリマス。ソレデ知ラヌ人ニ見セテハ。ナンノセンモナイコサ

くらふ山よてよめる

つらゆき

梅の花匂ふ春べのくらふ山やとよとゆれとあるいぞ有ける

館馬樂に青柳を片糸によりてうぐひすのぬふてふ笠のうめの花笠これによりてよまれしなるべしさて梅花を折てかきしにせん老たる頭髪もかくるにやといふなり

意あきらかなりそれが中によるづのものを大かたの人のえれりと云ひまたしきなり萬葉によき人のよしとよくみてよしといひしとよませしハよく長たる人のよしといはぬのまこと正よきにあらざ此歌も同意ニてそのほとくにて物のかきりたるぞかたしくらふ山といふといふくちきこといふ

らむと云詞によりて
きさなくくらまひな
にいふの歌のあやな
り

あやどハ本の^{きさ}組の文
のわりれてみゆるを
いひわかちなきを文
なしと云よりして何
にても分ちなきこと
まいふこといなり

あるじの詞はよく門^か
をもたぬへ給はでや
しらんまほ云へ入給
ふまよとあまりにう
さくしきをかすり
て聞えしなり
花こそむかしとさく
うるいしくかほれる
はとあるじが詞のく
ねくしきにこたへ
たるなりかたみにな
しき風流なりける

○梅ノ花ノニホウ。春サキノコロハ暗部山ヲクライ闇ノ夜ニコユル時デ
モ梅ガサイチアルト云フハ見エイデモ。ソノ句ヒデヲヨウシレルツイ

月夜^{ツキヨ}梅の花とよりてと人のいひければさると
てよめる

月夜^{ツキヨ}いそれとも見へき梅の花香を尋てぞあるべかり
ける

○ハチヨイトコロヲ一枝折テヤラウト思フガ此ヤウナ月夜ニハ月影ノサ
ス所ガミナオンナヲヤウニ白ウ。見エルニヨツテ。梅ノ花ガツレチヤト
ドウモ見分ラレヌコレデハ句ヒヲメツチテ行テ。知ラウヨリホカハ
ナイ

春の上梅の花をよめる

はるの夜の闇のあやなし梅の花色こそ見へね香やひか
くる

○春ノ夜ノ闇ト云モノハ。ワケノ、又物チヤ。ナセト云ニ梅ノ花ガ。
暗ウテ。色コソ見エチ。香ガカクレルカ。香ハナンボ。クラウテモ隠レ
ハセヌ。色ハカクレテ香ガカクシチハ隠レルテモナシ隠レヌデモナシ

トナラヒワケノ、又闇チヤハサテ
まへかた長谷へ、まゐる たびに
はつせよまうづるごととにやどりける人の家^{いへ}久^{くしう}
申結して 上らずめて そののち 久しぶりそのいへいたわいたればその
しくやとらで はとへて 後よいたれりければか
いへのていしゆが このやまはこれの とほりにまゐかたのまゝであひかはら
の家のあるじかくさだか れあむやどりそあると
すしつかりとあるそや口上で申してたしましてとされば、そこに書いて ある
いひ出して侍りければそこよたてりける梅の花
とよりてよめる つらゆき

人^清のいさ心もくらさふるさとの花ぞむかしの香よ句ひ
ける

○人ハドウチヤヤヲ。心モカハラヌガ。カハツカタシラヌガ。ナシミノ所
ハ梅ノ花ガツシガ来タレバコレ此ヤウニマヘカタノトホリノ句ヒニ

いせが集にこの歌の
端書に京極の院に高
子のみでおねはしま
して花の宴せさせ給
ひまぬれとおほせら
れしにまわりて池に
花なごちりたるを見
てとあれ川には
あらぬこそしらるる
れと歌には川さよめ
るを合せ見れば此池
とかけるといふかし
むべし

カハラズ。ニホウツイノ

水のはどり梅の花のさかりけるをよめる

伊勢

春ごとよ流る川と花と見てをられぬ水袖やぬれな
む

○流レテイク川へ花ノ影ノウツ、タノヲ。アノ水ノ中ニモ花ガアルトミ
テハ。イツノ春デモヤマサレテ。折ラレモセヌニ。ヲラウトシテハ
ソノ水デ袖ガヌレカガ。今年モ又ヌレルデカナアラウ

詞書よ水とあるは京極院の庭の池されば。哥よながる川とよめるは。
その池よつゞきたるやり水をいふなるべし。上句二三と句を次第し
て心得べし
年をへて花の鏡となる水のちりかゞるをやくもるとい
ふらん

この二首かしく巧
みておもしるけれど
小町のはかなくなだ
らかなるにはおとれ
り歌はおろかげによ
むこそよけれ女はま
してあり

ゆがれぬは目をばな
たすと云事にて言葉
に難の字をかき事て
いさよめる意なり

○年ヲ重子ヲ。毎年春ハ花ノ影ガウツ、テ。其ノ花ノ鏡ニナル水ハ花ノ
チリカ、ルト鏡ノクモルト云ノデアラウカ。花ノチリカ、ルト云ト。年
ヘテ鏡へ塵ガカ、ルト云ト詞ガ同シコトチヤニヨツテ。カウヨシヤノ
チヤツエ千秋云。としをへてといふ詞は、上の句にハさして用なきを。たゞ鏡の年をへてく
もることないはんためにおけるなり。さてこの歌なごちりたるは、部にいるへきさまに
せや

家よありける梅の花のちりけるをよめる

貫之

くるとわくとめかれぬものと梅、花いつのひまよかうつ
ろひぬらん

○日ガツレルト云テハ見。夜ガアケルト云テハ見イシテ。シヤヤモ目モ
ハナサズ見テ居ルノニ。此ノ梅ノ花ハイツノヒマニ。此ノヤウニチツテ
シマウタヤラ

打聞。うつろふの説。なかくよわろし。千秋云。此初句の二つのどん
どこの意なり興にはあらす

香をりきわが袖にう
つしてきつめたらは
と云をつめてさ
めてははいへりこ
のはは濁るべし

うたては古事記に須
佐之男命のさてもか
くてあもしきわざし
給ふことを轉有と
書ありしきこと
云なり
だにたにの略な
り

寛平の御時さといの宮の歌合のうた

よと人しらす

梅が香を袖ようつしてとめて^濁の春の過^すともかた^とあ
らまじ

梅ノニホヒヲ。袖ヘウツシテ。トメテオイタラバ。春ハ過テシマウタ
ト云テモ。ツレガ春ノ形見デアラウニ

索性法師

散と見てゐるべきものと梅花うたて句^はひの袖にのこれ
る

○ハアナツタワトハカリ。見テソノブンデアラフイヂヤニ。ヒヨ^うンナ
ヤ。句ガ袖ヘノユツタ。コレデドウモナツタ梅ノ花ノイガ忘^わラレヌ

題しらす

よみびとあらす

ちりぬとも香をだにのこせ梅花戀^ことき時の思ひ出^でせ

む

○梅ノ花ヨ。ナツタリト。セメテハ香ヲナリトノコシテオケ。ツレチ後ニ
戀^こシイトキノ思ヒダシクサニセウ

人の家ようあたりける櫻の花さきはじめたりけ
るぞ見てよめる

ことしより春しりろむる櫻花ちるといふとひならいぞ
らなん

○春ハサク物ヂヤト云フチ外ノ櫻ニナラウテ。今年カラ始メテ知テ。咲
イタ此ノサクラ花ヨ。ドウツナルト云フバ。外ノ櫻ニナラハヌガヨイ
ツヨ

題しらす

よと人あらす

山高と人もすさめぬ櫻花いたくなわびそ我見はやさむ
○山ガ高サニユノハ誰モ来テ見テ。賞^あズル人モナク此ノ櫻花ヨ。ハガ

是より下の巻に水な
きそうに波ぞ立ける
と云歌までは櫻の歌
なりよりてさくらさ
よみ且ツ花さのみよ
めるは端巻に櫻さこ
とわれりそれより次
にふるさといなり
し奈良のみやこにへ
と云よりひろく百花
をよめりよりて歌に
も詞にも櫻といはず

すさめぬはすいまの
なり心すさみ月すさ
みなとひさつ心なり
すべてまじこぼらす
心にまかすこまにい
へり

峯の嶺きこころをば
山の末をいふまとい
ひをかさいふ同窓な
り

染殿后は文徳天皇の
后清和天皇の御母忠
仁卿の御女なり染殿
ハ忠仁卿のおはせし
家なりこゝに住せ給
ひしより染ごのま申
幸りしなり
御むすめの后を花に
たとへてこのはなを

きへ見れば身の老て
ものうきこもわする
いこまなり
業平歌は大かたある
へきこまはいはでそ
れが上ぎのみある故
に心あまりて胸いた
らぬま云々だも岸に
いへり
今の木に石へしるこ
よめ石はいはさよ
むべし萬葉ニ例あり
瀧は岩の上を走おつ
れはしか三なり

シヤウクワンセヌトテ。アマリツラウ思フナイ。オノレ見ハヤシテヤラ
ウホドニ

又は里をほみ人もすさめぬ山ざくら
山櫻わが見にくれハ春がすと峯よも尾よも立かくしつ

○山ノ櫻ヲオレガカウ見ニクレバ。霞ガ一チメンニドコモカモ立テカク
シテ。花ヲミセヌワイ。サチモイギノワルイカスミカナ

染殿后のおまへハ花がめよこくらの花とさへせ給
へるを見てよめる 前のおほきおほいまうちぎと
年ふればよひひの老ぬまかハわれと花をこゝれば物思
ひもなく
○年數ヲ經マシタレバ。ワケクシモイカウ。年ハヨリマシタガサリナガラ
。アナタノ御家昌ナサレ。此御殿デ。カヤウニ花ヲ見マスレバ。ナン

ニモ物思モコザリマセヌ
なきこの院にてこくらを見てよめる
在原業平朝臣

世の中にたえて櫻のなかりせば春の心ハのどけからま
じ

○イツツ世ノ中ニトント櫻ト云モノガナイナラバ。ケツク春ノワブンノ
心ハ。ノドカニアラウニ。櫻ト云モノガアルヲ。此ヤウニイロくト必
ガサツツイテ。春モノドカニオモハヌ

題くらす
よと人くらき
石はとるたきなくもがな櫻花手折てもこむ見ぬ人のた
め

○岩ノウヘヲハハル此。早川ガ。ナケレバヨイニ。ソツメラ内ニ居テ。ユ
見ヌ人ノマメニ。アノ川ノアナヲナ櫻ノ枝ヲ折テキテマア。ミヤゲニ持

つぎの今も菴直なご
な字をわらづきとよ
むとく野山などに
出てそこなるめづら
しきものを何にても
つゝみもて持かへる
なり
ときまぜはかきまぜ
に同じ伊せものた
りにてけるからども
うひ今も縞のほそ
きたるどいふとせし

テイノウモノヲ。川ガアルデアドウモチリニイカレヌ
山のさくらトを見てよめる そせい法師
見てのみや人にかたらん櫻花手とに折て家づとにせ
ん

○カウシテアノ見事ナ櫻花ヲ見テ。人ニハタツ嘴スバカリテ。オカウツカ
イ。ソレデア見タカヒガナイホドニ。手ンデアニ折テ來テ。持テイソデ
内ヘミヤゲニセウ

花さかりに京を見やりてよめる

見渡せば柳さくらとときまぜて都ぞ春の錦ありける

○此山ノ上カラカウ見渡セバ。柳ノ青イ色ト。櫻ノ花ノ白イ色トヲコキ
マセテ。トント錦ト見エル。此見ワタシメトコロノ。京ノケキガ春
ノ錦ト云モノヤツイ

さくらの花のもとよて年の老ぬるとをあげきて

よめる

きのとものり

色もかも同じむかしに咲らめと年ふる人ぞあらたまり
ける

○櫻ハアノヤウニ色モ香モ。イツノ年モ同シテ昔ノトホリサニクケレ
ドモ。年ヲ經テ人ハサ。コレ此トホリニ。若イイトハ大キコカハツタツイ

此歌三、句さくらめとよめる。いひて。いさゝかかなびがたきやうなるを櫻
をたちいれむとて。まひたりとよめてゆ千秋云。さくらめとよめる。いさゝかにさげしとよめる。いさゝか
ををれるさくらとよめる つらゆき

誰しかもとめて折つる春がすゝ立かくすらん山のさく
らを

○此櫻ノアツタ山ハ。サダメテ霞ガ立テカクシテ。知レニクカラウニ。ダ
レガマア。タンダヘタイテ折テキタコトツ

歌奉れとおはせられし時よよとてたてまつれる

今の水におなじ昔に
さくらめとよめる
六帖に昔ながらに
あるをさるもなじ昔
のたのしいひたらぬ
なり

常にかすみがかくれな
る物にてなごなくよ
めるはおもしるし折
たる花もかくひろく
おもひやりてよめる
こそめでたけれ
あし引ば山さいはん

爲の冠辭なりあしび
木のしび木は紫シ
木の謂なりさて山ハ
さましくあれど木の
繁きをめづればすべ
て山の冠辭とほせし
ならん
折きたるまゝなり
されどいにしへの一
すぢによむをまねび
たる歌なりよしのこ
山の花ざかりを見て
雪かどのみぞといひ
たるいきほひありて
めでたきなりかやう
によみたらんこそ
事りねがふべきこと
なれ

櫻花さきよけらくなわし引の山のかひより見ゆるあら
雲

○櫻ノ花モサイエサウナワイマア。アノ山ノアヒダカラ白イ雲ノ見ユル
ノハ

寛平の御時きさの宮の歌合の歌友のり

とよしの、山べに咲る櫻花雪かどのとぞわやまたれけ
る

○吉野山ノアタリニ咲テアル櫻花ヲ見レバ。トントト雲ギヤナイカト。ト
リナガヘラレルワイ

やよひにうるふ月のありけるとしよとける
いせ

さくら花春くはれる年だよも人の心ああかれやいせ
ぬ

○櫻花ヨイツモノ年ハ早ウチルトモ。セメテ春ノ一月加ハツテ長イ。今年
ハカリナリ也。人ノ心ニヤンノウスルホド。ユルリト咲テアツタガヨ
イニ。ナゼニイツモト同シヤウニ。今年モ早ッチルワイ。此結句のて
にをハ一格なり。例多也。詞の玉の緒は出せるがごとく。打聞いひさま
あしつて。いかなる意ともさしとりがたし

さくらのさかりに久しくとひざりける人のきた
りける時よよみける
よみ人しらき

あだなりと名にこそたてれ梅花年にまねなる人も待け
り

○櫻花ハアダナ物ヤヤト名ニヨツタアレ。ナカクアダナモノデハコ
ザラヌ。一年ノ内ニモタマノナラデハ。尋子テクダサレヌ人ヲサヘ
キドクニ今日マデナラズニ。待テ居タワイノ。スレヤ久シウ尋子テモ
下サレヌ貴様ノアダナ御心ヨリハ櫻ガハルカマシヤヤ

あださしいにしへ他
國をあだし國といひ
他人をあだし人と云
たよそほかのとな
りあだし心をわがも
たよそいふもほかの
心のこゝなり
この二首いせ物が
たりに戀の歌として

文なせりすべてかの
物がたりハ萬葉又ハ
此集の四季の歌をも
戀にとりなしてあや
なせり此歌はただ相
おもふ人のうへにて
はおぼつかなく返し
も意ならでも人わる
く閉ゆるなり

しるしは垂仁記に何
益の二字をばなにの
しるしかあるとよめ
るこゝにあたり何
のかひがある云に
同じ

さしげハ惜きやうに
もあるかなと云なり
すべてかやうなる氣
と云はしがそれと
いなくとあらんと云
ほぞのいことなり

後世の注記をくら
これの事にて表白
素花といふはたが
ハ

かへし

なりひらの朝臣

けふこまの明日ハ雪とどふもなまじ消すのありとも花
と見まじや

○貴様ハ。櫻ハアダニハナイ。事平ヲアダナト云ハシヤルガ。ソレヤ大
キナナガイシヤ。ウシガ今日泰ツタレハコソアノ櫻ヲ花ヂヤトハ見レ
モ今日泰ラズハ。明日ハモウ雪ニナツテ隆テマウデアラウ。タトヒ
ソノ雪ニナツタノガ。消ズコアツタテモ。雪チヤトコソ見ヤウケレ
ドモ。モトノ花トハ見ヤウカヤ

題くらき

よみ人くらき

ちりぬれハこふれとあるこなき物とけふこそ櫻をらば
をりてめ

○櫻花ハナツテシマウテカラハ。ナンボ見タウ思フテモ。ソノセンハナイ
モノヲ。折ルナラ早ウ今日ノ内ニユツ折ウナレ。明日ハモウナルヲ

アラウ

折とらばをさけよもあるか櫻花いさやどかりて散まぞ
の見む

○コノ櫻ガアマリ見事サニ。一枝ヲリテミヤウカト思ヘド。折テ取ルハ。
イオニシテモマア惜イヤウナ物カナ。サイノナントセウツ。イヤノ
折ルノハ惜イノヤニ。ドレヤ。此木ノ下テ宿ヲカツテ居テ。チルマ
アハ。ソノマ、ヲ見ヤウ

よのありとも

櫻色よ衣のふかくそめてきむ花のちりなん後のかたみ

1

○花ハオツ、少散テシマウテ。アラウソノ後ノ形見ニ。キル物ヲ櫻イロニ
コウ染テ着ヤウツ。千秋云。此さくら色といへるいたゞさくらの花のいろにまじ
るなるべし。さくら色にて定れるそめ色をいへるにはあらし

櫻の花のさかりけるを見にまふできたりける人

がてらは兼ながらな
つめたる詞なりこ
れを過けて行がて
どくひきつに心得る
はわるしそれは過か
たく行がたきなり

さかましのた々咲ん
といふ間なからかや
うに云すて、はさく
へき事はと聞なま
なり

よよみておくりける

みつね

我宿の花見がてらに來る人の散なん後ぞ戀しかるべき

○コナノ花ヲ見カテラニ尋ネテクル人ハ。花見ガテラノコナノ花カチツ

メラモウ來ハヌマイチヤニヨツテ散テマウ後ニ其人ガ戀シカラ

ウ

亭子院の歌合のときよめる

伊勢

見る人もなき山里のさくら花外の散なん後ぞさりまじ

○來テ見ル人モナイ山里ノ櫻花ハ。ヨソホカノ花ガミンナ散ラシマウテ

後ニ咲ウコトヂヤニ。今ハドコニテモ澤山ニ花ハアルヂヤニヨツテ

ソレデ遠イ山里ナドヘハ。誰モ見ニクル人モナイチヤガ。ホカノ所ノ

花ガモウ無イソブンニナツテカラ。咲クライヤトモ遠イ所デモ見ニク

ルデアラウワサ

頭古今和歌集遠鏡卷之一終

頭古今和歌集遠鏡卷第二

春歌下

題しらす

よみ人しらす

春霞たな引山の櫻はさうつろいんとや色かひりゆく

○霞ガタナビイテ其カスミニ色ノウツハ見エルアノ山ノ櫻ハチカラ

ウトアヤラ霞ノ色ガカハツテキタ

まてといふよ散でてとまる物からは何を櫻よ思ひまじ

まじ

○チリカ、ツタ櫻ニ向フチシバラクナラズニ待テクレト云フノヲ聞入レテ

ソレデシバシデモチラズニ留ルモノナラバ何チ櫻ヨリマサツタモノ

チヤトハ思ハウツソレデハモウ世ノ中ニ櫻ヨリマサツタモノハアルマ

イニ惜イノニ早ウナルハツカリガアツタテ櫻ノキツヂヤ

遠山櫻を見さけよめ
るなるべしこのう
つろふはちるなにいふ
この歌ちらんとする
は心の事なればちる
さくらの始におきて
次よりちるさくらの
よめり

めではほめいづるを
いふ詞なりたさしい
たきをばぶきてその
上の詞助けてこまを
つよくする見たき聞
たきのるもみな同し

うつせみは世とい
ふ冠群なりこは願し
き身の命願の身の世
とついでるなり古今
集のころに下りてハ
即ち輝のもわけに譬

のこりなく散ぞめでたき櫻はな有てよの中はてのうけ
れば

○ソネウナツテウザくト残ツテアラウヨリサツハリト残りナシニ早ウ
散テシマウノガサアくケツカウナコトヤヤ櫻花ハ世ノ中ト云モノハ
ソウタイ何ンデモ長ウアレバカナラズシマイクナガワルイ物ナレバサ
此里にたびねとぬべしとくら花ちりのまがひに家路わ
すれて

○ヨヨヒハ此、里デトマラウイヤヤ此ヤウニオモシロイ櫻花ノナルマギ
レコ内ヘイヌルコトハ思ヒダサズニサ

うつせみの世よも似たるか花とくら咲と見とまにかつ
散よけり

○櫻花ハサハイタワト思フタウチニハヤカク一方カラ散テシマウタイ
人間ノ一生ノアヒダハナンノマモノイモノヤヤガツレニモマアヨウ似

ヌイカナ

僧正遍昭よよみておくりける

これたかのみこ

櫻花散のちりなんちらすとして故郷人の來ても見をくよ

○遍昭師が大方コノ花チ見ニ來テシレラル、デアラウト思フテ。毎日
くマテドモ見エヌ。ケフマデ見ヘヌカラハ。モウ大方見エヌノデアラ
ウ。スレヤヨイソ櫻花ヨ。ナルナラ勝手ニ散テシマウサ。ナラズニアツ
ネトテ在所ノ人ガ來テ見モセヌニ。カヤウニヨミ候ニエ御目ニカケ候
目上

雲林院よてさくらの花のちりけるを見てよめる

そぎく法師 承均

櫻ちる花のところの春ががら雪ぞふりつゝ消かてよす
る

○櫻花ノナル所ヘキキテ見レバ。時節ハ春デアリナガラ。雪ガサナラく

てはかぢき世にとい
ひなしたり

この皇子雲林院に
まじくける頃よみ
給えるかしからば都
をふるさこよみ給
ひしならん又みやこ
にてむかしの友なれ
バ何かなくふるさこ
人よよみ給ふべきな
り

雲林院は今の京の
北むらさき野に在り

この歌はなほくみり

上にありてその中は
このおければと云き
すこしかへたるのみ
なり法師の歌なれば
命のうなはんこそを

けれと猶世にまじは
りていあらであゝ山
なごにのがればやま
云なるべし

ちらばちらなんのち
れさゆるすにのち
で今さるさし中なれ
ばせんすへなくとい
ふなり

この歌古本にハ深養

トフツテヤキニハキエニクイ。春ノ雪ハソノマ、消レモノヤヤニコレ
ハ正ノ雪アナイ櫻バナヤヤニヨツテ千秋云初二句あるをいふはさういふなるやま
の云ひのたき故にハ。なをさるるを上下にはい
ふるなり

櫻の花のちり侍りけると見てよみける

そせいほうと

花ちらを風のやさりの誰かたる我れをしへよ行てうら
みん

○キテモくモアツメラ花チ。此ヤウニチラス風メガ逗留レテ居ルトコ
ロハ。タレツハ知テ居レモノガアラウ。誰レガ知テ居レツオレニ教ヘ
テクレイソコへ行テアツンンニ恨ミチイハウ

うりんるんにて櫻の花をよめる

いささくら我もちりなんこさかりわりなほ人よりきめ
見るなん

○此ヤウニ櫻ノ早ウ散テシマウノハ。ア、ヨイ料簡ヤドレヤ櫻ヨオレモ

イツレヨニ散テドウナリ也。ナツテシマハウ人ト云フモノモ。一トサカ
リ。盛りナ時ガアツテ。ソレガ過ギテ。オトロヘタナラバ。老ボレテ
ラツレモノイヤウスチ。人ニ見ラルテ、アラウホドニ

あひまれりける人のまうで来てかへりにける後
よよみて花にさしてつかはしける

つらゆき

一め見し君もやくと櫻花けふのまちえて散ばちらさ
ん

○此間ヤチヨットキテ見テ。イナシヤツタ人ガ。又ゴザルカト。今日一日ハ
マア待テミテ。ソメテゴサラズハ。ナルナラチツタガヨイ。櫻花ヨ。大
カク今日ハゴザリサウナモノヤヤ

山のとくらを見てよめる

春霞おかくすらん櫻花ちるまどたよも見るべきもの

父をしのせり

この下に典待因秀、朝臣とみゆ典待は四位なれば姓を下に替なり萬葉と此集は四位の人必しもしるせりにしへハ女もかくしるせる例あり

を

○霞ハナセニ此ヤウニ櫻花ヲカクヌヤキ。ユルリトミルハナラズ也。ハメテハ枝カラナルアヒダナリトマア。見ヤウモノチ。ソノ間サヘ霞ヲ見ラレヌ

みちろこなひてわづらひける時に風にあたらしとしておろこめてのみ侍りけるあひたにされる櫻のちりがたよなれりけると見てよめる

藤原よるかの朝臣

たれこめて春の行へもまらぬまよ待と櫻もうつろひしけり

○ツヤハアンハイガワルウテ帳ノチ帷オロシテ。ヒツコモツテハカリ居テ。春モイクカヤラ日ノ過タイクモシラヌマニ。咲タラ見ヤウノト思フテ。セツカク待メ櫻モ。ハヤコノヤウニ。ウツロウテシマウヌワイノ

みなる水沫のごとくながるる花をいふなり

萬葉に殊離者等酒者などやうに替しすすみてよらへを隠たり

東宮の雅院にてさくらの花のみかハ水にちりてながれけるを見てよめる

すがの、尊世

枝よりもあだにちりにし花あれば落ても水の泡とことあれ

○水ノ上ヘチツテ流レル櫻花ガ。アレトツト沫ノヤウニ見エル枝カラモ。モロウ散メ花チヤニヨツテ。下ヘ落テモ。又同クアノヤウニモロイ。水ノ沫ニチナルザヤワ

櫻の花の散けるとよめる

つらゆき

と清ならばさかきやハあらぬ櫻花見る我さへにまづ心あし

○トテモ此、ヤウニ早ウナルクラ非ナラバ。一向ニシヨテカラサカヌガヨ

イニ。ナセニサカズニハ。キヌツ櫻花ハ。此、ヤウニ早ウ散テハ見テ居ル
コナマデガ。心ガサワ／＼トシテオチツカヌ

打聞。とならバの説。いと物どほし此詞のいづれも右の譯の意と以て見
るべきなり。例を考一合せて味ふべし。

櫻のごとくちるものいなこと人のいひければ。

よめる

櫻花とくちりぬとも思はへず人の心ぞ風も吹あへぬ

吹あへぬは吹合せぬ
香リ

○オレハ櫻ノ花ハ早ウナルモノチヤ思ハレヌ。ソレヨリハ。人ノ心ガ
アザナモノチヤ。ナゼト云ニ。櫻ハマダ風ガフカチハメツタコナリモセ
ヌガ。人ノ心ハ風ノフクマデモマダズニ早ウウル物チヤワサテ。

餘材。下句の注わるし。

さくらの花のちるとよめる

きの友のり

ひさかたさは天雨月
みやこなごいふ冠辭
を天のかたちはまろ

ひさかたのひかりのときき春の日になづ心なく花の散
らん

○日ノ光リノ。ノドヤナ。ニルリトシタ春ノ日チヤニ。ドウ云フテ花ハ此ヤ
ウニ。サワ／＼ト心ゼワシウナルイヤラ

東宮のたちはまきのちんよてさくらの花のちるを
よめる

藤原のよしかせ

春風ハ花のあたりをよきて。ふけ心づからやうつろふと
見ん

○春風ハ花ノ咲テアルアタリヲハヨケテフケ。モシ風ハフカイデモ。花ハ
ヤブシノ心カラヒトリデコモ。ナルモノカナ。タメシテミヤウニ

さくらのちるとよめる

凡河内のみつね

帯刀の陳とは帯刀舎
人さ云て宿直をし種
々の事に仕へまつる
武士の集るところな
りそれらが集るとこ
ろを陳といふなり禁

中にて瀧口といひ春
宮にては帯刀といひ
院にては北山を云み
な同下武士なり

雪とのみふるだにあるを櫻花いかにもちれとか風のふく
らん

○サクラ花ハ。ヒトリデニモ。ヒタスヲ。雪ノヤウニナルモノヲ。ソレサヘ
アルニ。マダコノ上ヘドノヤウニ。チレト云フチ風ハフクコヤラ

ひえにのほりてかへりまうできてよめる

つらゆき

山高み見つゝわがこゝ櫻花風ハ心にまかすべうなり

○アノ櫻ノアル所へ行テ。見テ折リカツタケレドモ。山ガ高サニエノボラ
イデ。残念ナガラオレハヨソニ見イ〜來タニ。風ハアノ櫻チ心マカ
セニ。スルデアラウト思ハル 餘材。山高みの説わろし

題しらす

一本
大友くろぬし

春雨のふるハ涙か櫻花ちるを〜しまぬ人となければ

○櫻ノナルチ惜マヌ人ハナケレバ。此ノヤウニ此ノセツ春雨ノフルノハ。

世間ノ人ノ櫻ヲラシメデ。泣クナミダカイ

亭子院歌合のうた

櫻花ちりぬる風のなごりにハ水なき空に浪ぞ立ける

○櫻ノナルキニ風ガ吹マテ。其ノ花ガシバラク。中デサワグケシキハ。テウ

ド浪ノタツテレキヤ。ソシテ海ベニナゴリト云フガアル其ナゴリハ

浪ガタツヂヤカ。花チチラシメ此ノ風ノアトノナゴリニハ。水ノアリヒ

セヌ空ニ浪ガタツタツイ

ならのみかどの御歌

ふるごと〜なりにしならの都にも色ハかはらぎ花ハ咲
けり

○フルイ昔ノ都ニナツテシマウタ此ノ奈良ノ京ニモ。ヤツパリ色ハ昔ニ
カハラズ。都デアツタ時ノトホリニ。花ハサイタツイ

なごりは浪邊に〜
かしこいさ〜かに浪
ののこりたるをみ、
さて何にも失去たる
物のなほのこりてあ
ることにいへり

桓武天皇の延暦中に
山城の長岡に都を遷
されしかば奈良はや
がて故郷となりにし
によりて物みずかハ
りぬるニ花のみ昔の

いろにほほりき
詞さしやうに心お
しきはこのぬしの歌
なりわかき時より口
かろく興ある人なり

花にいたく心をくみ
たるあまりに云がお
もしろし

春のうたとてよめる

よこみねのむねさだ

花の色ハ霞にこめて見せきともかきだにぬすめ春の山
風

○花ノ色ヲハ霞ノ中ニコメテ。オイテ見セズルセメテツノ香チナリトモ。
霞ノ中カラヌスミダシテキチ。コノハモ。ニホハセイ春ノアノ山ノ風ヨ

コレヤ

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた

素性法師

花の木もいまのほりかゑと春立ばうつろふ色よ人なら
ひけり

○花ノ咲ク木モ。モウ今カラハ。ホツテ来テウエマイ。春ニナレバ。花ガサ
イテ早ウ。ウツロウ色チ見ナラウテ。人ノ心モウツロヒヤスウナルワイ

題忘れき

よみ人しらき

春の色の至りいたらぬ里のあらじ咲る咲ざる花のみゆ
らん

○春ノ色ハドコモカモ。ヒラマイナレバ。イキワタツタ里トイキワタ
ラヌ里トノ。ワケヘダテハ。アルマイニ。ドウ云フデ。花ハ咲ダ所ト
サカヌ所トガアルコヤラ

春の歌とてよめる

つらゆき

三輪山をまかもかくすが春霞人よ忘れぬ花や咲らん

○サテノ三輪山ハキツウ霞ンダカナ。コノヤウニマアカスミノ隠ス
ノハ。此ノ山ニハ人ニョラサヌ。ナイシヨウノ花ガアルカシラヌ
うりんるんのみこのもとに花見にきた山のほ

上下の間にいつま
云詞こもりて下にら
んさうたがふきり

萬葉に三輪山をまか
もかくすうか雲にも
心あらなんかくさふ
べしやまといふ歌の一
二の句のそのまに
用ひて雲霞をとり
かへてよめるなり

ウリんゆんに皇子の
住せたまへばよもす
がらに御ものがたり
し奉らんのことるを
こめてよめるなり

りにまかなりける時よよめる

そせら

いざけふの春の山べよまじりなんくれないばいげの花の
陰かげかい

○ドレヤケフハ日ノクレルマデモ。此ノ春ノ山三べチ。カクアルイテアツ
ハウツ。日ガクレタトテモ。花ノ陰ガナサなほの。サウナガイかほ。イクラモ花ノカ
ゲガアレバ。モくモく暮くタナラ。サイハヒヂヤ。花ノカゲニトマラウツサ。な
げい。ない。無なよて。げい。何げとおほくいふ詞なり。打聞なげの説わろ
し。くれないばいといふよかなはず

春のうたとしてよめる

いつまでか野べに心こゝろのあくがれむ花しはなちらちららずずの千世も
へぬべし

○花ガナラズハ。イツマデコノ野邊ニ心ガウカレテ居ルデアラウ。モシ花

ガナラズニアツタラハ。千年デモ此ノ野デマテウヤウニ思ハレル

題しらす

よみ人あらす

春ごとはるごとに花のさかりはなのありなめと逢見あひまんんの命いのちなりけ
り

○花ハノ今年ナツテモ。又來年カラ後モ。春ゴトニ盛ハアラウケレハ。ソノ
盛リニ逢テ見ルあハハ。コチノ命次第ヤワイ。ナンボ花ザカリガ。毎年ア
ツテモ。命ガナケレヤ。又ト見ルあハハナラヌ。サウ思ヘハア、残りオ
ホい。花はなヤ

花のごと世よのつねつねなららば過あしてし昔むかしの又またももかかへへりりききな
ままつつ

○花ハナツテシマウテモ。又春ニナレバ。年々相替ラズ。定マツテ咲ク
物ヤガ。世ノ中ガ花ノトホリニ定マツテ。カハラヌ物ナラハ。過すシ

ありあなめはあらめ
な延へたる詞なり

過してしは過したり
しな約めていへるな
り

素性集六帖又は顯昭
住に一本を一枝と見
へたり

一本に枝を折てける
哉ともありいづれに
ても聞也

テキタ昔シモ。又フタ、ピカヘツテシルデアラウニサ。世ノ中ハ過マ
昔ガフタ、ピカヘルニ云フハナイ

吹風にあつらへつくるものあらば此一本のよ。きにと
いはまじ

○吹テクル風ニ。頼ンデ。イヒツケラル、物ナラ。此花一本ハ。ヨケテ
吹テクレトイハウニ。サウイフハナラヌモノナレヤ。ドウモ散テモ
セウフガナイ

待人もこぬものゆゑに鶯のみさつる花をりてける哉

○此花ヲ馳走ニ折テ生テオイテ。來タナラバ見セウト思ウテ。待ツ人モ來
モセヌニ。ア、鶯ノオモヨロウ鳴テ井タ。アツタラ花ノ枝チオレハ折
ヌワイ。サテモヲシイフチシタコトカナ。待ツ人が來ヌクラ井ナラ。折
ラネハヨカツタニ
こぬものゆゑよ。來もせざる意なり。

あだながら花はした
かしきものにいへり
諸木の花なるにより
てちぐさ云

たなびく山はかみの
霞よりへたていつ
くなり

新桃萬葉にこの左
に花の敷種一時開
新桃輕風遠千ヨ來
さあるをあらはせて意
あきらかなり

咲花ハ千種あがらよわたなれと誰かの春を恨ばてぬる

○ヨニ春サク花ハイロクアルガ何ノ花デモ皆アダナ物ナレド。ソレ
デモ誰レガ春ノ花ハアダナト云テ。トント見カギツ者ガアルゾ。ア
ダナモノヂヤノトハ誰モイヒツ、咲ケバ又ヤツハリ賞翫スルヂヤ
餘材。後の説はわるし。

春霞色の千種見よつるのたなびく山の花のかげかも

○霞ノ色ガイロク見エルノハ。ソノ霞ノタナビイテアル中ナ山ノ花
ノイロガ霞ヘウツ、タノカイノ

在原元方

かきみ立ッ春の山べの遠けれと吹來る風の花の香ぞをる

○霞ノ立ッテアル春ノコロノ山ハ遠ウミエルケレト。カクベツ遠ウモナイ
ガミテ。吹テクル風ハ花ノニホヒガサスル

この歌の意諸説ともよくはしからず。

花に心の入たるよし
なりそれきうつらふ
さはいふ

うつろへる花を見てまよめる
つね花
花見れば心にさへぞうつりける色にはいでし人もこそ
忘れ

○ウツロウタ花ヲ見レバ。ア、ヲシヤト思ウ心ガ花ニシミコンデ。コナ
ノ心マデガ花ノ色ニウツ、タツイ。此、ヤウニ花ノ色ニウツタ心ヲ。
トウツ顔イロニハダスマイ。人ガ知ラウモシレヌホドニ人ガ知テハ。
アマリアハウラシイフヂヤ

打聞よろし餘材わろし

題しらすき

よみ人しらすき

うぐひさの鳴野邊ごとに来て見れば移ふ花に風ぞ吹け
る

○鶯ノナツ野へ來テ見レバドコノ野モノウツロウタ花ヲ風ガ吹テナラ
スツイ。鶯ガ惜シガツタナクハダウリヂヤ
千秋云二の。句の。とくにさ。いふ
詞は。下の句へかけて心持べ。し

うぐひさを吹風の上
におきおへて心得へ
し

吹風をなきてうらみよ鶯のわれやハ花ヲ手たにふれた
る
來來て見ればへは
かみざるなり。

○鶯ガフレガチカクへ來テ恨メシサウニ鳴クガ。ソチハ花ノチルガ惜ウ
テウラミルナラアノ吹テシ風ヲ恨ンテナケサ。オレガアノ花ニチヨ
ウトナリト手ドモフレタナラコソ。オレヲ恨ミヤウケレ。オレハ手モ
フレハセヌツヨ。スレヤコチガ知タコトハナイワサテ

曲侍給子朝臣

散々な泣にいとまる物あらハわれ鶯よおとらましや

○散テユク花ガ。惜ンテ泣ノデ。チラズコトマルモノナラ。コチモ鶯ニオ
トロウガイ。鶯ニオトラヌホド泣ウケレド。ナンボ泣テモ花ハドウモ
トマラヌツイノ

今の本に後藤とある
いわるし下に藤原の
のちかげがから物の
つゆひにと假名にて
おけるは即この人な
るべし

六帖に初々の句意の
とあれどもと鶯の
にあらざるべし鶯
に花のちるころうぐ
ひすの鳴るるを歌と
相むかへて鶯の鳴を
よめるとかきて歌に
はちる花をよめる此
集の心づかひなりた
やすく見過すべから
ず

仁和の中將なみやまん所の家に歌合せむとて
けるときによみける

藤原後蔭

花のちるとやわびしき春霞たつたの山のうぐひすの聲

○霞ノタツチアルアノ立田山ニ鶯ノナク聲ガスルガ。花ノナルコトガツ
ラウ思ハレテ。アノヤウニ鳴クカイ

うぐひすのなくをよめる

そせら

こづたへべおのが羽風は散る花をたれにおほせてこ
な鳴らん

○鶯ガアノヤウニ花ノ枝チアアラヘコナラヘ。コツタヘハ。自分ノ羽ノア
ヲチノ風デ花ハナルモノヲ。ソレチ誰レガ答ニシテ。アノヤウニ恨メシ
サウニ。キシリニ鳴クコトヤラ。外ノ物ガチラスカナンツノヤウニマ
千秋云〇〇〇〇〇〇物の数の多きことなれば、シキリニといふ聲はあたらざるべし、
も〇俗語にていふとき、いふ必しきりになくといふ聲なることなり〇ナニこの類多し〇

やらへてし
るべし

鶯の花の木よてなくとよめる

みつね

しるしなきいかいな
きの意ありならなく
にのぢらぬを延たる
言にてよひそへたる
のみ

さて雪とのみこそと
いへるけしき本未の
句さもよまこの巧
なくあるがまゝによ
みて何となくおもし
るを歌を奈良の京の
末の人なるべし

ふるしなき音とも鳴。かな鶯のとこのみちる花ならなく
よ

○鶯ノナンノセンモナイ鳴ゴトカナ。今年ハカリナル花デハナイイツノ
年トテモツヒニ鶯ノナクノ花ガチラズニアツタト云フハナイニ

題しらす

よみ人あらず

こまをへていざ見に行んふるごとひ雪とのみころ花の
散らめ

○タレカレサソヒアハセテ。馬チノリナラベテ。打ツレテ。ドレヤ見ニ
ユカウツ。此セツフル京ハサツヤ。雪ノフルヤウニサ。ヒタノト花
ハナルデアラウワイ

ちる花をなにか恨みん世の中に我身もともよわらむ物
とひ

○花ノチツテユクヲ。何ノ恨メシウ。コナガ身トテモ。イツマデモ。
此ノ世ニカウシテアラウモノカイ。花ト同シヤウニオツ、ケ死ンデユク
モノヂヤ。花バカリヲ早ウチルトテ。恨ミヤウヤウハナイ

小野小町

花の色ハうつりにけりないたづらよ我身世にふるなが
めせしまよ

○エエ、。花ノ色ハアレモウ。ウツロウテ。ジマウメワイナウ。度モ見
スニサ。ワシハツレツフテ。居ル男ニツイテ。心苦ナガアツテ。何
ノトシヤクモナカツタ。アヒダニ長雨がフツメリナドシテ。ツイ花
ハアノヤウニマア

世よふるとい男女のかたらしするをいふ男女の中らしいことを。世と

ながめとい春の長雨
せしまに花のたつか
ひぬと云てそれを思
ひありて長目するに
かけた

この歌小町のよめる
中にていすぐれたる
にあらむ百人一首に
いでたるゆゑにしき
りにさ思へるハ古歌
の心をしらで人のし
りに立ていへるなり

も世の中ともいへる多し此集戀の歌もこれかれあり。いせ物語よ。
世とふる。つける。源氏物語よ。また世をまらぬ。などあるたぐひもこ
れなり。

仁和の中將のみやまんどころ家に歌合せんとて
とけるよよめる

うせい

とこと思ふ心いといよよられなん散花ごとぬまてと
づめん

○散テユク花ヲ。ヲシイト思フ心ハドウツ。糸ニヨラル。物ナラヨイコ
ソシタラ。ソノナル花ヲ一ツ。ソノ糸デツナイデ。ナラヌヤウロ
トメテオカウニ

志がの山こえよ女のおほくわへりけるよよみて
つかはとける
つらゆき

しがの山越の今の京
の東なる北しら河の
瀬の方よりのぼりて
如意がたけをこへ近
江の志賀へいする道
をいへり

梓弓ははるといはん
冠辭なり已にいへり

落花に道まじふさい
ふせもしるき體なり
わか菜つまんさいふ
を正月七日の事のみ
さおもふは後のかた
くななりすて年の
内の雜菜をわか菜と
云なりこの歌花の
あるころによめるに
ても心得べし

端に山寺とてきて歌
には寺をいはず花多

き山寺にやどりたる
けしき見へたり後の
歌ならバ猶山寺さも
にみ入る故にと多く
てこまやかにいやし
くなれるなり

暹羅花山寺に住れし
時なり

わづら弓はるの山をこえくれバ道もさりあへき花ぞ
散ける

○口春ノコロ山ヲ越テクレバ。ドウモ道モヨケラレヌホド。花ガチツテ
クルワイ。アノ女等ガサ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

春の野よ若菜つまんとこし物を散かふばなよ道はまと
ひぬ

○此春ノ野デ若菜チツラウト思フテ。來タモノヲ。アチヲヘコチヲヘナ
リ。マガウ花デ。ワカナチツム所ヘエク道ハマギレテ。フエマヨウテ。
シデモナイ所ヘキタワイヨレヤ

山寺にまでたりけるよよめる

ある人のいはく。此詞書ことばがきなら下のよのよを寫しあやなるなるべし。
やどりあて春の山べよねたる夜ハ夢のうちよも花ぞち

りける

○春花ノナル時分ニ山ヤトマツテ。寐タ夜ハソノ花ヲ惜をしイクト思フユ
エカ。夢ノウチニモサ。花ノナルトハツカリヲヨルワイ

寛平御時きさいの宮の歌合の歌

吹風と谷の水ととあかりせばみ山がくれの花を見みえし
や

○フキチラス風ト。流レテユク谷川ノ水トガ。ナイモノナラバ。ミ山ノ
オクニカクレテ咲テアル花ヲ見ヤウモノカイ。見ラレハスマイニ
スレヤ風ヤ川ノ水モ。花ノタメニメツタニワルイトマカリデモナイモ
ノチヤ

志賀よりかへりける女どもの花山よいりて藤の
花の下よ立よりてかへりけるによめておくりけ
る

僧正遍昭

六帖に下句をばひま
つれよどりんまを
たにとあるか此僧正
の口ぶりなり

よそに見てかへらん人にふぢの花はひまつりねよ枝の
をるとも

○チヨット立ヨツタバカリテ足モ留メズニ。ヨソニ見タイヌル人コハヒ
マツウタイナスナ藤ノ花ヨ。タトヒ枝ハ折レルトモ。ドウグハヒマツ
ウテトメヨ

家に藤の花さけりけるを人の立とまりて見ける
とよめる
みつね

我やとに咲るふぢなみ立かへり過つてはのみ人のみる
らん

○ユチノ庭ニ咲テアル藤ノ花チ。アノヤウニ人ガヒツカヘンクシテド
ウモ見ステ、イナレヌヤウニ。ヒタスタ見ルガ。ドウ云フヤラ。エイ
庭デモナイニ

ふぢなみさは花のな
びくをいふそれを涙
にそりなすは歌の常
なりなびくをなみさ
いふしのをおし
のる爲なり

題くらき

よみ人志らき

たちバナの小島が崎
は大和のあすかのた
ちばなの島と云とこ
るなり萬葉にあまた
みへたり。

いまもかも咲はふらむたちバナの小島のさきの山吹
の花

○タチバナノ小島ノ崎ノ山吹ノ花ハ。ケフコノエロカナ。見事ニサイタ
デアラウ

初句もいふ二つともよやすめ辭めて。今かなり。今もといふよのわらき
春雨よにはへる色もわかなくに香さへまつかしく山吹の
ばな

○此山吹ノ花ワイ。春雨ニヌレテ一入マサツタ。色モドウモイヘヌニ。
色バカリデナシニ。香マデガ。雨ニヌレテ別ヤテ。シホテシウニホウ

春雨、香の方へもかゝれり。物のよはひり。まめれば増る物なり。
山吹ハわやかく咲そ花見んとうるけん君がこよひこな
くに

萬葉に山吹はあまつ
ゆににほへる花を見
ることにとよめり山
吹はいろにのみほ
ひて愛るほぢの香は
あらねど女郎花にも
香をよめることく
の頃はかくしひたる
ことよはやく出こし
なりむかしはしが賢

奇きこといふまじり
しなり

あやなくさきそい女
無勿咲てふ詞あり

萬葉に橋のうた君が
いへの花たちばな
なりにけり花のまか
りにあひまじ

○山吹ハワケノタ、ヌ物ヂヤ。コンナナラサカヌガヨイ。花ガサイ
タラ見ニ來ウト。思フテ植テオカシヤツタデアラウニ。其御方ガ。コ
ヨヒミエモセヌニ。咲テモ何ンノセンモナイヲヂヤ。咲。クラ非ナラ。
其御方が見ニミエルヤウニヤテ。シレレヤ。ソレデアハ。咲タカヒガアツ
テ。ワケノタツト云モノヂヤニ。戀の哥あり

よしの川のはとりに山吹の咲りけるをよめる

つらゆき

吉野川さしの山吹ふく風に庭のかけさへうつろひまけ
り

○吉野川ノ岸ナ山吹ヲ見レバ。風ガ吹テナルガ。ソノ風デア川ノ水ガ。ウ
ゴクニヨツテ。底ヘウツ、タ影マデガチツタワイ

題しらす
よみ人しらす

蛙なく井手の山吹ちりまけり花の盛にあひまじ。物を

ものを「この歌を山
吹にとり奪へしのみ
されど古哥なればし
らへはうるはしく聞
ゆは下めの二句かは
づなく神なび川のこ
とくそのところの物
を冠らせて母のほ
ひさせるいしへの
風流なり

○三コノ井手ノ山吹ガ。ハヤモウ散テシマウタワイ。ア、残念ナヲミタ
マツツト早ウ。花ノサカリノ時分ニ逢フヤウニ來テ見ヤウデ。アツタ
モノ

この歌のある人のいはくたちはなのさよともが歌なり
春のうたとしてよめる
そせい

思ふとち春の山へ打むれてそこともいはぬ旅ねしてと

○ソソデフソコヘイシト云テ定マツタ旅デアハ。ヨソニトマルノハ。ウイ
物チヤガ。サウイフ定マツタ旅デアハナシニ。心ノアフタドウシ。春ノ
山ヘツレダツタイテ。一日日ノシレルマデアソソデ。イキガリニトマ
ツテエタイモノヂヤ。ソレデアハオモシロイ旅旅デアアラウ

打聞。下句の意くはしからず。

春のどく過るをよめる
みつね

月の入ると弓を射る
をかねてはやき思
なふくめてよめるが
この集のころもはら
の巧みなり

物うくは何となく心
憂をもいへど是は物
にうみ果たるをいふ
あり

梓弓あすりのやはる立しより年月のいるがとくもおもほゆるかな

○古歌ニ梓弓春トツマケテヨシアルガ。マコトニ月日ガ早ウタツテ。
矢やチイルヤウニ思ハル。春コナツテカラマズナンノマモナイニ。サ
テモ早ウタツタカナかせ
とし月どよめる。まとの年の暮くれの歌なればなるべし。春の暮の歌よ
ては。此詞このことばにかゝるよきゆ。

やよひに鶯うぐいすのとる久しう聞えざりけるをよめる

つらゆき

鳴とむる花しなけれハ鶯うぐいすもはてハ物うくありぬべうな
り

○ナンボ惜ンテ鳴テモく。花ハミナ散テシマウテ。鳴なテトマル花ハ
ナケレバ。コレデハセンノナイトヤト思フテ。鶯うぐいすモシマヒコハ鳴ト
モナウナツタデ。アラウサウアリソナトニ思ハレム。ソレデ久ひさシウナカ

ヌギヤマデ。餘材あまのこわろし

やよひのつごもりかたに山をこえけるよ山川よ

り花のあがれけるをよめる ぶかやぶ濁

此人のこゝよ始めて出たれば。姓をのぐべき例なるよ。姓なき
いかゞ。又打聞よ。此名のぶを。みなばとせるいひがとなり。

花ちれる水のまにくとめくれバ山よハ春もなくなり
にけり

○花ノ散テ流レル川スギニツウテ。段々ミナカミノ方へ尋テテキテミレ
バ。山ニハモウ花ハミナチツテシマウテ。ハヤ春モナイヤウニナツタ
ツイ

春をいしみてよめる もとかた

をしめどもとよまらなくよ春霞かへる道にしたちぬと
思へバ

春ヲ惜ムクレドモ。モウセヨセントマリハセヌ。春ハモウタツタイヌ
ル道へ旅ダチヤレバ。トマラヌハズデヤ

霞の。たつ縁よりへるなり。結句のたつたちぬれをいふ意にて。思ふ
よの意なし。すべて思又いふ詞を。そへていへる例つね多し。思ふ
を。春の思ふと見たる説のわるし。

寛平の御時きとりの宮の歌合のうた

おき風

聲たえず啼や鶯ひとせにふたゝびとだよくべきはる
かひ

春ハ一年ノ内ニ。イッ度モ来レバ。重疊ノ一チヤガ。サウハナラズ
也。ヒメテ二度トナリ来レバヨクレドモ二度トモクル春カイ。メツ
メ一度ナラデハ。ナイ春サヤニ。クレテユクハサテノコリ多イ
チヤ。鶯ハズオブン絶ズ鳴テ恨ミヨヤイ。イカニモ鳴キドロロチヤ

六帖かこへたていな
げやうくひすとあり

花つみといひ二三日の
ころ野山よもきて花
なつみて先祖の墓を
まつるこさなり今の
京の人は四月に日元
んの山にのぼりて花
のみきて草花なごを
つみもてかへるなり

端に雨のふりけるを
云て哥にぬれつゝと
りよみ藤の花をさほ
しにかきて哥に折つ
るとのみよめる此ふ
たつを哥のかた大ニ
にはぶきたり
この葉はし密と母を
相てらして心得るや

やよひのつもをりの日花つみよりかへりける女
ともと見てよめる

みつね

とどむべき物とをさしよはかなくもちる花ごとよたぐ
ふ心か

ヲノ花ガアマリ惜サニ。一本ノチツテニク花ゴトニ。コチノ心ガツ
イテイクラ。アノ女ニ。サテモママ。アホラシイナ。ツイテイダトテ
。オメヨレウモノデハナイニ。打聞みなわるし

やよひのつもをりの日雨のふりけるよふぢの花
をりて人よつかはしける

かりひらの朝臣

ぬれつゝぞまひて折つる年の内に春のいくかもあらじ
と思へば

此藤の花の。ドウソソコモトへ。御目ニカケウト存マテ。今日ノコ

うにふく心してきき
たりはしの詞種くて
よく味ひなせり

後撰六帖にこの番を
おもひてよめる哥多
し

ノ雨ニヌレノヨリニ折リマシタ。春ハマダイシカモアルデアアル
マイ。モウ當年ノ内ニハ。タツタケフ一日ナラデハ春ハナイト存ズル
ニエニキ。諸説。下句の意を得ず。

亭子院歌合に春のはての歌 みつね

けふのみと春を思はぬときたにもたつとやすき花のか
けかり

春チ。モウ今日バカリヤヤトハ思ハヌ時デサへ。花ノ下ハ。立ッテイヌル
ノカ何ントモナイガサア。ソレデサへ花ノ下ハ。立ッサリトモナイコ。
マシケフテギリノ春チヤモノ

頭書 古今和歌集遠鏡卷之二終

頭書 古今和歌集遠鏡卷第三

夏歌

題知らず

よと人しらき

我やどの池の藤なと咲よけり山時鳥いつかきなかむ

○コナノ庭ノ池ノ邊ナ藤ノ花ガ咲メツイ。郭公ハイツ來テナクデアラウ

此歌ある人のいはくかきのもとの人まろがなり

うづきにさける櫻を見てよめる

紀とことた

あはれてふととあまたよやらじとや春よおくれてひと
り咲らん

○今月ニナツテ。櫻花ノアルハメツラシイコヤ。コレハナンデモ見ル

や、卯月の来て時鳥
のいつか鳴んども
へる歌のすがた高く
心ひろまなり

このあはれなめ
るは

時鳥はもはら五月に
なげば五月まつと云
てこれの卯月によめ
るなり

人ガア、ハレ見ゴトナ。ア、ハレ見事ナト云フ其詞ヲ。方々ノ櫻ヘ分テ
ヤルマイ。己われヒトリガサウイハレウト思フテ。ワザト春ヨリ後ニオソ
ウヒトリ。咲はなヂアラウガ。 千秋云結句にさくらを
かくしてよみたるなり

題しらす

よと人しらす

さ月まつ山時鳥うちいふさ今も鳴なむとぞのふるこゑ
○郭公ハ五月ヲ待テ鳴クチヤガ。マダ五月ニハナラチドモ。去年ノ残り
ノフル聲ヲ出シテ。ドウア今モナケカシ。 千秋云フうちはぶきハ。萬葉打羽
振と云テ。羽なふるを云この聲なき
いなまがよろしきなるべ

伊勢

五月こい鳴なもふりなん郭公まだしきはどのこゑをさが
ばや

○時鳥ハ五月ニナツタナラバ。モウ澤山ニナツテ。メヅラシウナイデモア

ラウ。ドウツマダソノ時節ニナラヌウチノ聲ヲ聞タイモノチヤ

よと人しらす

さつき待花橘の香をかけば昔の人の袖のかぞする

○五月ニサク橘ノ花ノニホヒチカゲハ。マヘカタノナツミノ人ノ袖ノ香
ガサスル

いづのまに五月なつめきぬらん足引の山ほととぎす今ぞ鳴を
る

○イツノマニ五月ニナツタヤラ。ヒゴロマチニ待ツタ時鳥ガ。今始メテ
ナツワアレ

けささなきいまだ旅たびなる時鳥花たちはさはな宿しゆくハからか
ん

○ケサ始メテ來テ。マダエ住すまツカズニ旅ガケテ居テ鳴ク時鳥ヨ。定メテ宿
ヲトルチアラウガ。コチノ庭ナ橘ニ宿ラバカレカシ。ソシタラ存分ニ

たちバなも五月に咲
もの香れば五月待ッ
さいへりこいたが袖
ふれしやどの梅でも
なごみとさく橘の
香をかきてわがこひ
しく願ふいにしへの
人のそでの香おほゆ
るよめるのみ田道
間守が故夢漢の事ま
で引いていへるハ
みち古歌をしらぬ人
の心なり

聞ウニ

おとを山とこえける時よほととぎすのなくと聞て
よめる 紀友則

音羽山けさこえくれバ時鳥梢はるかに今ぞなくある

○音羽山チケサ越テッレバ時鳥ガアノハルカナ。梢デ。アレ今始メテナ
クワ

音羽山といへるよほととぎすの聲の意なし

ほととぎすのはじめて鳴けるをきいてよめる

そせい

時鳥はつ聲きけバあちまなくぬし定まらぬ戀せらるは
た

○時鳥ノ始メテ鳴聲チキケバ。オモシロウハアレドモ又サ何トナウカン
シヤウガオコツテ無益ナ。其人ト定マツテコトモナイ戀コトナガスル。す

紫性集に鳴こまきけ
はとあれば右のはし
詞にあらせてはつこ
るなることを聞せた
るものなるべし此集
はし書もて歌の意を
扶くる例なり

べてはたけ又なり。此の哥なるなり。三の句の頭ようつして聞べし。おも
しろけれども又の意なり

からのいそのかき寺にて郭公のなくとよめる

いそのかきにふるき都の時鳥こゑばかりこそむかしな
りけれ

○此ノ石ノ上ノアメリハ昔ノ奈良ノ都キヤガ。今ハモウ何モカモ昔ノトハ

變ツテシマウタニ。郭公ノ聲バカリガサ。カハラズニ昔ノトホリキヤワ
イ。同書なる石ノ上寺。山邊ノ郡石上よあるを。奈良といへる事。今
の京よてり。石上のあたりを迄もひろく奈良といひならへるなり。た
とへば今の世よ。丹波の國なる愛宕山をも。他國よてり。京の愛宕と
いふ類なり。打聞の説ひがとなり

題しらき

よと人しらき

夏山に鳴ほととぎす心あらバ物思ふわれに聲なきかせ

石上と云ふころに布
留の社あるな本にて
古きことにも雨のふ
るにもいそのかみ
るを云かくるなり

菴菴時記に社鵬初
鳴先開主別離とい
ひて客中に多くよめ
り

香かなくハ汝が鳴な
り、なほいにしへ
ハ未だふ惹なる言な
り後のいよくに用
ひたるいにしへに
かつてなし

そ

○アノ山デナク時鳥ヨ心ガアルナラ。此ヤウニ物思ヒテシテ井ルワシニ
キカシテクレナイ

ほととぎす鳴聲きけべ別れに故郷さへぞ戀しかりける

○ホト、ギスノナク聲ヲキケバ。感情ガオコツテ。ハナレテキタマヘカ
タノ在所ノコマデガサナツカジウ思ハレルワイ

時鳥あびなく里のあまたわればなほうとまれぬ思ふものから

○ホト、ギスヨ。ソチハ。ナク里ガアソコニモコ、ニモアマタアツテ
コ、ハカリテ鳴カヌニヨツテ。賞翫ニ思ヒハスレドモ。ソレデモウ
くシウ思ハレル

思ひいづるときりの山の時鳥からくれなるのふり出
ぞ啼

○戀シイ人ヲ思ヒダシタ時ニハの山の三三聲ヲアゲテサ。ワシヤナクワ
イ。四の句の。たゞふり出の亭のみよて戀よの。紅のふり出つゝなくと
あるの。異なれり。さてこの哥の。もいら戀の哥なるを。こゝよ。入れる
のいかよぞや。

聲にして涙の見えぬ時鳥わが衣手のひづをからなむ

○時鳥ハナク聲ハシテ。涙ハ見エヌガ。涙ガナクハ。オレガ袖ガヒツ
タリトスレテアルヲ。借シテヤラウホドニ。コレヲソチガ泣涙ニカッ
タガモイ

あし引の山ほととぎすとりはへて誰かまよるとねをの
とぞなく

○オレハイツシエク泣テハツカリ居ルガ。アノ時鳥モオンナシヤウニ。
間タモナシニ鳴テオレト。誰レガ勝ツ。サアナキ。シラバヲセウテ。
ヒタスラナクワイ

人のなく時ひなみだ
のいづるをもて鷹う
ぐひをなごにもなみ
だといひ又泪のみえ
せよといへり

何事になくかくよめ
るハ一寸ちにその物
に思ひたる心なり古
歌ハこの意を思ひ入
て見るべし

これを死出の山へ言
づてせんといふ説ハ
うたのおもてにも見
えぬあたし言なり

さみだれてふこまば
を亂るゝに思ひよせ
たりとみゆるは六帖
にさみだれにみだれ
そめにしわれぢれハ
さよめるがあれど
ハの歌はしからぞ

たち花を時鳥の宿と
ほめるは萬葉より見
ゆ梅か露の宿と見
秋を鹿の姿といふ類
にて時の物もていひ
なすのみ

をりはへり。時延ときはにて。時長くつゞくとをいふ詞なり。をりはへて鳴
クハ。時長く。あひだもなほよなくとなり。

今さらよ山へかへるを時鳥とゑのかざりハわが宿とどよな
け

○山カラ出テ來テ。モウリナレタ。フヂヤニ。今サラ山へハカヘルナヨ
時鳥聲ノアリタケハ。シマイマデ。コチノ庭デナケ

とくよのまぢ

やよやまて山時鳥とづてんわれ世の中よすとわびぬと
よ

○山ハカヘル時鳥。ヤイノウ。チヨツト待テタモ。ユトツテヲセウツシ
ハモウ世ノ中ニ住ミアゲンダツイノ。ソレデ追付ツシモ山へコモラウ
ト思フホドニ。サウ云フテタモ

寛平御時とらゐの宮の歌合のうた

紀友則

さとたれハ物思ひをればほとゝぎす夜ふかく鳴ていづ
ち行らん

○五月雨がフリツマイト。イヨク夜モ。モヤクヤト物思ハラシ居レハ
時鳥ガ鳴テイクガ。夜モフケタニ。ドチラヘイクヤラ。オレモ此ハ
ヤウデハ。ドチヘナリトモイキタイ

夜やくらき道やまどへる時鳥。我やととしも過がてよか
く

○夜ルデクライニヨツテ。ドチヘモイカヌノカ。又ハ道ニマヨウタノカ
ホト、ギスガ。所モ多イニ。コチノ庭デハツカリ。ドウモ過テイナレ
ヌヤウニギツト鳴テ井ル

大江千里

やどりせと花橋もかれかくなどほとゝぎすこゑたえ

かれが聲のうちにも
夜の明るやうに夏の
よの短きほどを甚し
くいひなすなりすべ
て大きなるもさしや
かなるも過ていひな
すは古歌のあやなり

あかすにあかすを
ねたり源氏さゆきの

巻にかんの君の曉か
たの歌に心がらかた
く袖をぬらすかな
あくるとをなしふる聲
につけても此外にも
さる意なる歌多し

新撰萬葉にこの歌の
右に二夏山中驚レ
耳ノ根郭公高響入ニ
禪門一とあり

ぬらん

○宿カツテ居ヌ橋モマダカレモセヌニ。時鳥ハナゼニユツヘインデ聲モ
セヌヤウニナツタヤラ

きのつらゆき

夏の夜いふすかどすればほどいぎす鳴一こあよあくる
志のいり

○チルカト思ヘバ。時鳥ノナク聲ヲ。ハヤモウ明方ニナツタ。サテく
短い夜カナ。下句又ハホト、ギスノナイヌ一聲ヲ目ガサメヌガハヤモ
ウ夜ガアケル

志のいりを打聞の如く。朝の日とする時の後の辭なり。餘材志のいり
の説わろし。千秋云初句の、のもつひがの意に
て結句のあくるへつづく詞なり

とふのたぐみね

くるゝかと思れば明ぬる夏の夜をわかきとやなく山時

鳥

○日ガクレルカト思ヘバ。アヤアケタ此度ノ夜ヲ。アマリ短サニノヨリ
多ウ思フテ。郭公ハアノヤウニナクカヤ

紀秋峯

夏山に戀しき人や入しけんこあふり立てなくほどいぎ
す

○コノ山へ時鳥ノ戀シウ思フ人ガゴモツタカシラス。ソチヤヤラ。聲ヲ
アゲテナク。餘材わろし。打聞よろし

よと人しらす

こぞの夏鳴ふるしてし時鳥それかわらぬか聲のかはら
ぬ

○去年ノ夏メクサンニヌエズナイテ。ヨウ聞知テ。居ル。時鳥ガ今又ナ
ク。アレハ去年ナイタツノ時鳥歟。サウデハナイカ。聲ガオナツ

チヤガ

時鳥のなくと聞てよめる

つらゆき

五月雨の空もこころよ時鳥をいどうしとかよたゞ鳴ら
ん

○時鳥ガ五月雨ノ空モドンド。ヨヒトヨヒタスラ鳴クガ。何ヲウイ
ト思フテアノヤウニナクコヤラ

さふらひよてをのこ共のさけたうべけるはめして

時鳥まつ歌よめとありければよめる

みつね

時鳥こゑも聞えず山びこいはかよ鳴音をこたへやいせ
ぬ

○時鳥ガナクカトマテドモ聲モ聞エヌガ。ヨシデ鳴ク聲ナリコ、

ヘヒミイテ。聞エレパヨイニ。山彦ハナセニコ、ヘヒミカサヌツイ

山にほととぎすの鳴けるをきくよめる

つらゆき

時鳥人まつ山になくあれば我うちつけし戀まごりけり
○人が来モセウガト待テ居ル此松山ニ。アノヤウニ時鳥ガナケバ。今

マデサホドニモ思ハナンダカ。ニハカニコナモ人ヲ待ツ心ガマサツタ
ツイ

はやくすとけるところにてほととぎすのをきける
を聞てよめる

たゞとね

むかしのや今も戀しき時鳥ふるごとくとも鳴てきつら
ん

○時鳥ヨ。ソチモオレト同シヤウニ。昔カ今デモ戀シイカ。所多イニ此
本在所へ鳴テ来タノハ昔ガ戀シイヤラ。千秋云今はなれもこ
あたまほしくおぼ也。

とゝるは今もとゝる
くど鳴といふに同
じくそれを清めてい
ふは古言なり
夜たは夜直にて夜
をひたすらといふな
りよもすがらといふ
に同下ゆなり

人まつ山を名所と云
はわるしたと松の生
る山に人まつと云ひ
かけたるなり

むかしは方さいふ
意にていにしへ行へ
なきに同じ且此へは
濁りていひがたき所
は元のごとくさなぶ
るなり

時鳥の鳴けるをきくよめる

とつね

ほととぎす我といなしに卯の花のうきよの中よ鳴渡るらん

○世ノ中ヲウイ物ニ思フテ泣テクラスモノハオレギヤガ。時鳥ハ其オレヲハナシニ。ドウイフコト。世ノ中ガウイト云テ。卯ノ花ノアタリヘキテ。アノヤウニオレト同シヤウコ。鳴テクラスコヤラ

蓮の露と見てよめる

僧正遍照

はちま葉の濁りよまぬ心もてなにかの露を玉とあそむく

○蓮ハ世ノ中ノ濁リニシマヌ。譬ヘニ御經ニトイテアルガ。サウ云フ清淨ナ心デ。ナセニアノヤウニ葉ノ露ヲ玉ト見セテ。人ヲバダマヌコトツイ

月のおもむろかりけるよわかづきがたによめる

ふかやぶ

夏の夜はまだ宵ながら明ぬるを雲のいづくに月やとるらん

○ア、ヨイ月デアツタコ。夏ノ夜ノ短イコトハ。マダヨヒノマ、デ。フケル間モナシニハヤ明クモノ。コノ夜ノ短サデハ月ハ。西ノ方ノ山マデイキツク間ハアルマイガ。ア、曉ノ雲ノ。ドコラニトマツタコヤラ

隣より床夏の花をこひおこせたりけれハ惜て此歌をよみてつかひしける とつね

塵とだよすゑしとぞ思ふ咲より妹とわがぬる床まつの花

○手前ノトコナツハ。カ、トワシガテ寐マス床ナツテ。大事ノデゴサル花ガサイテカラ。塵サヘカケマイト。存ズルホド大事ノデゴサル折テ

我まはなしにをわれもまはなしに云はわるしわれならでまいふこま、心得へしうの花はうき世さいはん冠辭に時のもれを用て歌のほひきするなり

法花經の涌出品の文に不樂世間法如蓮花在水これをもてよめり
白氏文集に荷露雖圓豈是珠

床ははらねいぢりはつもるを友藤するにはいさかのちりなもおか下の心ないへりおくこまをすゑるさいふなり

行かふはゆきかへり
なり萬葉に往反さか
けり

ハユマンシマスマイ。千秋云、此ノ歌上句、三一
ニミ句を次第して見るべし
とよ月の都ごもりの日よめる

夏と秋と行かふ空の通ひぢのかたへ涼しき風やふくら
ん

○今晚クレテ。ユク夏ト來ル秋ト。イキチガウ空ノ通り道ハソノ夏ノ通
ツテユク片一方ハマダ暑ウテ。秋トホツテクル片一方ハ。スダヤイ
風ガフクデアテウカイ

書頭 古今和歌集遠鏡卷第三終

書頭 古今和歌集遠鏡卷之四

秋歌上

秋たつ日よめる

藤原敏行朝臣

あきぬと目よのさやかに見へねども風の音よぞ驚か
れぬる

○秋ガキタトイフテ。ソレトハツキリト目ニハ見イヌケレド。ケフハ風
ノ音ガ。ニハカニカハツマテコレハ秋ガキタワトピツクリシタ

秋立日うへのをのこともかもの川原に川せうえう
しけるともにまかりてよめる づらゆき

河風のすゞしくもあるか打よする浪とともはや秋の立
らん

○川風ガサテモマア。涼イナカナ。浪モ立ツト云フナリ秋ノ來ルノモ立ツ

歌の意調よくとこの
ひてあきらかぢりか
くことひろく打しづ
まりてよむことのか
たきなり
さやかは日本紀に亮
の字をよみて見るも
のにもまぐものかも
清くあぢやのなるを
い入り

このめづらしき秋の
はつ風をいふたて上
は序によめるなり

さなへはむさなへの
五界さいふ競さもは
ぐりかさだき萬葉に
早田さかけりさわら
び香も和を略きた
る同類なり

いにしへは織女の心
になりてよむなり後
世は思ひやりてよむ
故心おとれり

いにしのかぢいふの
今の櫛のこまなりそ
のかぢといふものは
なかりしとみゆ

たなはたつめは萬葉
に織女の二字をよみ
てたなはたは櫛の事

トイハバ。此岸へウチヨセル浪トイツシヨニ。秋ガタツカカシラヌ
題しらす
よと人しらす

わがせこが衣のすすそを吹かへしうらめづらとまき秋の初
風

○田コレハくメツラシイ秋風チヤ。サテモ涼シイ。ヨ、ロヨイ。餘材
よ。わがせこり。女をさせりといへる。いみじきひがとなり。これ
の女の哥あるべし。又哥林良材集に引れたるより。わさもてがとあり。
新古今集有家郷「さらで。だゝ恨みんと思ふわ。さもてが衣のすすそよ
秋風不吹く。これらよよれべ。わさもことある本も有しあるべし
きのふまでさなへとりしかいつのまゝ稲葉とよぎて秋
風の吹。
○マダ昨日コソハ田ヲウエタレ。ソレニマア。イツノマニ此ヤウニ稻
ノ葉ガソヨくトシテ。秋風ノ吹ヤウ。ニハナツタマフ

秋風の吹よと日より久かたの天の川原にたぬ日ひな
と

○ワシハ秋風ノ吹キソメタ日カラ。毎日く此ヤウニ。コノ天ノ川ノ
川原へ出テ立テ。君チマタヌ日ハ一日モナイ。千秋云。この歌なごは。たな
七夕の歌の類多し。バたつめになりてよめるなり

久かたの天の川原の渡と守君わたりあはかぢかくして
よ

○天ノ川ノ渡シ守ヨ。君ガコチラへ御渡リナサツタナラ。チキニソノ
船ノ棹チンレヌヤウニ。カクシテオイテクレイ。ソシタラ川ヲ渡ツ
テ御カヘリナサルヲガナルマイニヨツテ。イツデモコチニ御逗留デア
ラウエ

天の川もとちと橋よ渡せばやたかたつめの秋をこも
まよ

なりつは助字

○天ノ川ノ橋ニ紅葉ヲ渡スユエカシテ。時節モ多イニ。棚機サマガ。秋
ヲ御待ナサル

こひくして逢夜のことよひ天の川霧立わたり明すもあら
かん

○一年ノアヒメ長ノ月日ヲ戀ニテ。タツタ一度彦星ト棚機ト御逢ナサル
夜ハヨヨヒヂヤ。ドウツ天ノ川へ霞ガ一ナメンニ立ッテ開ウナツテ。イ
ツマデモ。夜ガアケチハヨイ

寛平の御時をぬかのようへよとふらふをのこど
も歌奉れど仰せられける時人にかはりてよめる
とものり

あまの川浅瀬をら浪たどりつゝ、渡りばてねは明ぞ忘
ける

○此天ノ川ノ浅瀬ノ所ヲシラヌ故ニオボツカナウテ。ホノチカチアチヤ

あま瀬しら波は浅
瀬をしらぞさかけ
たり渡り果ねは浮
世にわたりはて
ぬに云に似たり
こはわたりはて

さればともわたりは
てぬにぞも心得へし

ヨチヤトシテヒマドツチマタ渡ツチヤマイモセヌウナニ。ハヤ夜ガ
アケタツイ。千秋云。四の句。ね。
の。ぬにの暮なり

同御時まことの宮の歌合の歌

ふちのらのおきかせ

契りけん心ぞつらき棚機の年にひとたびあふりあふか
り

○一年ニタツタ一度ヅト。約束シテオイト棚機ノ心ガキコエヌ一年ニ
タツタ一度ツチホアウノガアウノカソレヤ逢ト云フモノデハナイ

七日の日の夜よめる 凡河内ノ躬恒

年をどにあふといすれど棚機のぬる夜の數ぞすくなか
りける

○棚機ハ毎年逢ツシヤリハスレドモ。一年ニタツタ一度ヅノナレハ。逢ッ
シヤル夜ノ數ハスクナイコトヂヤツイ

今夜手向るものを
すといふはいつより
のこころか真実の人

に衣をかしの人も
かりたる事多きをそ
れらよりうつゝいふ
にや織女祭のそ新筵
歳時記に見えたり唐
詩にも家々此夜持
轉針ニ云々是により
てこゝにもこよひの
糸など手向る香り年
のなながくこゝに
よめるはまたよくも
意を得ず玉の緒息の
結などの緒にひとし
く常に命のきづなき
するさしふ如く年も
絶す續く意ニて緒を
云詞をそふるにや猶
考へし

棚機よかしのつる糸の打はへて年のを長くこひやわたるらん

○タナバタ祭ニユヨヒ手向テオ借申マタ糸ノヤウニ長ウ引ノビテコレカモラ年久シウ此ノヤウニ戀シウ思フテ月日ヲマテコルトデアラウカ。是ハ七夕よよめるおのが戀の哥なり

題しらき

そせい

こよひこむ人あひあひとたかべたの久しき程よ待もこそすれ

○今夜クル人ニハアウマイ。今夜ハ七夕ヂヤニヨツテ。棚機ノ久シイ一年ノ間ヲ待ツノニアヤカツテ。コナモ久シウ待ツヤウナ中ニナルコモアラウホドニ

七日の夜の曉によめる 源むねゆきの朝臣

今のとてわかるゝ時ハ天の川渡らぬさきに袖ぞひぢぬ

る

○サアモウト云テ別レルトキコハ。マダ天ノ川ヲ渡リモセヌサキニ此ノヤウニ袖ガヒツタリト涙デサヌレヌ

やうかの日よめる

よみのたぐみね

けふよりの今こんとこの昨日をぞいつゝかどのと待渡るべき

○タナバタ様ハサツ。今日カラシテハ。又今カラ來年ノ七月七日昨日ヲサ。イツカノトヒタスタ待テ月日チ。メテサツシヤルデアラウト。思ハレル

題しらき

よみ人しらす

このまよりもりくる月の影見れば心つくこの秋の來にけり

○木ノ枝ノ間カラモツテクル月ノ影ヲミレバ。廣ウ見ルトハナガウテス

大かたの凡すべてな
ぎ云に同じくひろく
云詞なるをこそまき
物一つをさり出てせ
ばき詞に合せたるに
てこの哥の意をあき
らむべし

時に秋風を朝來人ニ
庭側一孤客最先聞

コシヅ、ホカ見えチバサテノシンキナ物チヤ。是ヲミレバ。今カラ
總體モノゴトシンキナ秋ガキタワイ

大かたの秋くるからにわが身こそかなしきものと思ひ
しりぬれ

○世間一同ノ秋ガキタカラシテ。人ハコノヤウニハナイサウナニオレヒ
トリガ秋ハカナシイ物チヤト思ヒシツタ。秋ハオレ獨ノ秋チハナイ

世間一同ノ秋チヤニ

我ためにくる秋にともあらずに虫の音きけばまづぞ
かかこま

○オレニ悲シウ思ハサウタメニ來ル秋チモナイニ。虫ノ聲ヲキケバ人ヨ
リサキヘ。マツニ番ガケニ。オレハカナシイ

物ごとに秋ぞかかこまきもとちつらうつろひゆくを限り
とおもへり

○草木ノダンノガカハツテ散テイクノハ草木ノシマイニナルノギヤガ
オツケサウ物ノシマイルナニ時節ノバチメチヤト思ヘバ。總體ノ物
ナニツケテモ秋ハ悲シイ。打開よろし餘材わろし

ひとりぬるところの草葉にあらねども秋くるよひの露け
かりけり

○草ノ葉コソ秋ハ歌デスレルモノナレ。ウシガヒトリチル床ハクサノ葉
デハナケレドモ。秋ニナレハ夜ルハ此ヤウニ涙デ露ノヤウニヌレルワイ
これさだのみこの家の歌合のうた

いつの時の時わかねと秋のよそ物思ふのかぎりか
りける

○イツハ物思ハヌトキチヤト云フ時節ノ差別ナシニイツチモ物思ヒハ
アルケレドソノウチニモ秋ノ夜ガ。イツチ物思ヒスル頂上チヤワイ
かむなりのつばし人あつまりて秋の夜とむ

よひとは初更をい
ひ又一夜の間のこと
なも云この哥もひろ
く秋來る夜と心得へ
し

この哥宗千の集に入
たりこは思のおち
たるにや

かむなりのつばうせ
宮中五舎の中子襲芳
舎とて有それを神鳴
の壺といふ

をしと思ふは惜むと
のみにはあらで愛る
をもしにしへはをし
といへり即萬葉集に
愛の字をもせしとよ
めりこの意も夜の
あけ行によめるとも
きこへず惜の字に心
得てはかなはぬなり
顯昭本に類さへみゆ
るさあり新撰萬葉に
も類さへさありて左

歌よみけるついでよめる

とつね

つばり。御坪の内よて。梅壺藤壺をいふり。その御坪の内よある木
草をもてそこの舎の異名よしたる物あり。かむなりのつばも雷の落
たるとありしより。異名よなれるなり。壺字の。宮中、衛謂之壺とあ
るこれなり。器の壺どの別なり。まがふことなかれ

かくべかりをしと思ふ夜をいたづらよねてあかすらん
人さへぞうき

○コレホドニ面白イ。アツタラ秋ノ月夜ヲ。寐テシマウテ。ムサムザト明
ス人モ。アラウカサウシタ人マデガサ。キコエヌ。チヤト思ハレル。餘材
いたづらの説わるし。いたづらよねて。ねていたづらよと心得べし

題しらす

よみ人あらず

白雲にはね打かひしと雁の數さへ見ゆる秋のよの月

○サテモサヤカナ月カナ。雲へトビッホド高イソラヲ。ツレダツテトンド

の詩に秋天飛翔雁影
見とあり

さよ中と夜のふけぬらじ雁がねの聞ゆる空に月わたる
らむ

○夜ハイカウフケヌ。モウトント夜半ニナツタサウナ。見レバ雁ノ鳴聲ノ
聞エル。ズットソラノ方へ。モウ月ガマハツヌ

是貞この家の歌合よめる 大江千里

月見ればちゞ物こそ悲とけれ我身ひとつの秋よわ
らねど

月ヲ見レバオレハイロクト物ガ。悲シイワイ。オレヒトリノ秋デ
ハナクレド

久かたの月のかつらも秋のなほ紅葉すればや照もさる
らん

○月ノ中ナ桂ハコノ國土ノ木ノヤウニ秋チヤト云テモ。紅葉スルナド云

今の本に秋のなほ
あれど古本の忠孝集
に秋くれはさあるを

用ういかたにきなれば
いにしへ猶てふ詞の
まださ云意にのみ用
ゐていよ其なごに
用おしはなしこのの
猶は後の詞つかひな
り

くぶ山さいへんき二と
にくらきこはなき
な詞につきてなまな
くよめるかめでなき
なり

この歌の意は、この
さなりこのころには
やくきりくすきひ
とつものにあやまり
てよめり

トハアリソモナイモノヂヤニ。ソレモヤツハリ。秋ハモミヂルカマテ
○イツモヨリハ光リガテリマサツタ。紅葉シタニヨツテ此ヤウニ照リマ
サルデアラウ。打聞わろし

月をよめる

在原元方

秋の夜の月の光りあかければくらぶの山も越ぬべう
なり

○此ヤウニ月ノ光ヲノアカイ。秋ノ夜ハ。ナンボ聞イッラフ。山デモ越ラ
レウト思ハレ

人のもとよまかりける夜きりくすのまきける
をききてよめる ぶぢさらのたふふ

きりくすいたくを鳴そ秋のよの長さ思ひの我ぞよめ
れる

○コレ御亭主貴様ハ。心苦ガオホウテ。イロくノコヲ思フテ夜ノ長イ

このきりくすのこ
うろさなり

是貞、この家の歌合のうた

としゆきの朝臣

秋のよのあくるもしらす鳴虫のわがごと物やかなしか
るらん

○此長イ秋ノ夜ノアケルモシラズニアノヤウニナク虫ハオレガヤウニア
レモ。物が悲シイカシラヌ

題しらき

よと人志らす

秋萩の色つきぬればきりくす我ぬとやよるのかな
とせ

○萩ノ葉モ色ツイテソロく枯カケテソル時節ニナツタレハ物がナシウ

わぶらと心ふるこ
云に同じく物おもひ
にうみはてたるとな
り
しのぶはしたふの古
言なり

テ夜ルモ。チラレヌニアノ蟬モ同シヤウニ夜ル鳴クハ。ソチモオレガヤ
ウニ物ガカナシイカ

秋のよハ露こそとに寒からし草むらとよ虫のわぶれハ

○クサムラゴトニアノヤウニ虫ガ難儀ガツテ鳴クノチキケバ。秋ノ夜ハ

歌ガサカクベデニ塞イサウナ

君志のふ艸よやつるふふるごとハまつ虫の音ぞかなし

かりける

○人ガ見ステ、ヨクツカイデドコモカモキツウアレテ。軒ナドヘハシノ

ブガハエテ見苦シウナツテ。其人ヲ戀シタフテ居家テハ庭ヲナク松虫

ノ聲ガ。人ヲ待ト云ユエカ。一入カナシウ聞エルツイ。打聞やつるハ

の注わろし

秋の野ノ道もまどひぬまつ虫の聲する方よやどやから

まじ

訪はんわさはんなり

○此秋ノ野デ。モウ日モクレニ及ブ道モフミマヨウツホドニ。アノ人ヲ

待ト云名ノ松虫ノ聲ノスル方ヘイテ。宿ヲカツタモノデアラウカイ

あさの野ノ人まつ虫のこゑすあり我がと行ていざとふ

トはん

○此秋ノ野ニアレ人チマツト云名ノ松虫ノコユガスルワ。ソチヤオレ

ヲマツノカト云テ。ドレヤ行テオミマヒ申サウ

もとぢ葉の散て積れる我宿誰とまつ虫こト鳴らん

○モミヤガ散テツモツテ。誰モフミ分テ來タ人モナイコチノ庭デ。タレ

ヲ待トテアノヤウニ松虫ハ鳴コトヤラ。タレモ來ル人ハアルマイニ。

打聞よろし餘材いろし

ひぐらしの鳴つるなべ日ハくれぬと思ふハ山の陰よ

ぞ有ける

○ヒグラシガ鳴イタニツレテ日ハクレタト思フタハ。サウデハナカツエ

日ぐらしハ秋のはト
めより鳴小蟬なり日
をさふる木陰になく
故に日ぐらしは名
つけつらん

山ノカケデサ。閨イノデアツタワノ。千秋云なべには雁に依てこれと云ふならぶときにいふ云なりつねに云々並ニ云々といふちかしに

日ぐらゐの鳴山里の夕ぐれハ風より外よとふ人もなし
○ヒグラシノナク此山里ハユフグレニハ風ヨリ外ニハ一向ニ尋ネテクル
人モナイア、サビシイコトチヤ

在原元方

まつ人よあらぬ物からはつ雁のけさ鳴聲のめづらさ
かな

○待人ガキタカナヅノヤウニ。ケサ始メテ雁ノ鳴ク聲ガサテモメヅラ
シウ思ハレルコトカナコナガ待テ居ル人。デハナイチヤケレド

是貞のこの家の歌合のうた とものり

秋風よはつ雁がねぞ聞ゆなる誰玉づさをかけてきつら
ん

初ら國に鷲武といへ
る人胡國に年久しく
とらはれわて雁に文
なつてて京人もこせ
しとよりこゝにも雁
を遠つ人のつりひさ
いへり
これも右の古事ニよ
りて誰カ玉をさか
いへり

○秋風ノ吹ク空ニアレ始メテ雁ノ聲ガサスル。雁ハ遠方カラノ狀ヲクビ
ヘ持テ來ルト云フチヤガアノ鳴雁ハドコカラタガ狀ヲカケテキタ
チヤヤラ

題しらき よみ人おらず

わがかどよ稻負鳥の鳴なべよけさ吹風よ雁のきよけり
○コナノカドデ稻負鳥ガナクニツレテ。ケサノ風ニ雁ガキタツイ
いとばやも鳴ぬる雁かゑら露の色とる木もももちあ
くなくよ

○キツウ早ウマア雁ハナイタイカナ。露ノ色ドル木ドモモマダロクニモ
ミチモセヌウチニ

春霞がすそていよしかりがねハ今ぞ鳴なる秋霧のうへ
に

○春霞ノ中ヘカスミニ見エテイソヌ雁ガ。ソノ時ノ霞ト同シヤウニ秋ノ

稻負鳥のいたく知
がたきとにてさま
まき論ぜしを見るに
或鶴なり田夫なりな
ごいふはこの歌をよ
くも心得ずなべてふ
詞をもしらぬひがと
さもにてみな云に足
を庭たゝきのと云
ハあたれり

歌の意ハ夜寒に雁の
鳴く事の云なり

古注に柿木の人まろ
のなりと云は例のこ
ら也

雁のわたるを舟と見
なすことくも聞ゆれ
ど文辭ニテ柿來もこ
いへれば聲を樽をお
す音と聞なして聲を
帆ニ揚てくる舟はこ
いへるなり

霞ノウヘノ方デ。アレ今又サナクワ

夜を寒と衣雁かねなくあべは萩の下葉もうつろひよけ
り

○夜ガ寒サニ衣ヲカルト云名ノ雁ノ鳴ニツレテ。萩ノ下葉モウツロウ
タワイ

此歌のある人のいはくかきのもとの人まろがなりと

寛平御時きさとの宮の歌合のうた

藤原菅根朝臣

秋風ノ聲とほにわけてくる船のあまのど渡る雁よぞ有
ける

○アレノ青イ。梅ノヤウナツラチ。秋風ニ聲ヲ高ウ帆ノヤウニア
ゲテ。船ノヤウニ見エテ來ルモノハ。鳴テワタル雁チヤワイ

かりの鳴けると聞てよめる とつね

萬葉に山ちかく家や
なるべきさを鹿の音
なきついでねめて
ぬかも

うきことを思つらねて雁がねのなきこそ渡れ秋のよなく

○雁ノイクツモツラナツテ鳴テワタルヤウニオレハ秋ノ夜ノウイノ數
々ヲオモヒツマケテ。毎夜ノ泣テアカスワイ

是真みこの家の歌合のうた 忠岑

山里の秋こそとよわびとけれあかの鳴音よ目をこまよこ
つゝ

○山里ハイツデモト云フウチニ。秋ガサ。別シテツラウナンギニ思ハレル
ワイ。ヨルノ鹿ノナク聲ヲ目ヲサマシツ。夜ハ長シ何ヤラカヤラ
ト難儀ナラフヲ思ヒツマケラレテサ

よみ人志らぎ

おく山よもとじふとわけ鳴鹿の聲聞時ぞ秋のあかしき

○秋ハ惣體カナシイ時節チヤガ。其秋ノ内デハ又ドウイフ時カイツチ悲シ
イツトイヘバ。紅葉モモウ散テシマウタ奥山デ。ソノナツタモミザラ。

鹿ガフミワケテアルイテ鳴ッ聲ヲキク時分ガキ。秋ノウチデアハイツチ
悲シイ時節デヤ
ふみわけの。鹿のふみ分るなり

題しらす

奥蔭抄に普通の本に
は秋風にさなへるど
いなりさあらし意あ
まらかなり
しがらみの河をせき
岸のくつるゝをさ
ゝむらして紫竹なご
机にからみ付るをて
こゝへ萩原に入て鹿
のふみからみるぐす
るをそのしがらみに
よせていふなり

秋萩ようらびれをれば足引の山志たどよく鹿の鳴らん
○萩ノ葉モ段々枯テイクヲ見テ。時節ノ物カナシサニ。此ヤウニ。ウナシ
ヲナゲテ居ルノニ。ドウ云フデアノヤウニ山ノ下マデヒクホド鹿ガ
鳴コトヤナフアノ鹿ノ聲ヲキケバイヨク悲シウテドウモタヘラレヌ
ニ。をれば。をるよの意なり。
秋萩を志からみふせてなく鹿のめよ見らずて音のよ
やけさ
○野ノ萩ノ中ヲフミアラシテオセフセテガラミニシテ鳴テアルク鹿ノ
目ニハ見エイデ。アノマア聲ノサヤカニヨウ聞ユルコトイ。千秋云。古
へは鹿なご

の鳴るをよおとせいなり。
萬葉に聲のおとなさよあり。

是貞、この家の歌合によめる

ふぢのらのとゆきの朝臣

あきいぎの花咲にけり高砂のをへの鹿ハ今やなくト
ん
○アレ萩ノ花ガサイヌツイ。山ノ鹿ガモウナクデアラウガ
むかこあひまりて侍ける人の秋の野よてあひて
物がたりとけるついでによめる とうね
秋萩のふるえよまざる花見ればもとの心のわすれざり
けり

○萩ノ去年ノ古枝ヘアレアノトホリ又花ノサイタヲ見レバ草木デモマヘ
カタノ事ヲバ忘レハシマセヌツイ。スレヤソコモトモ。中絶ハ致シタ
クレド。先年御コシイニ致シタコトハオ忘レハナサルマイ

萩を鹿の妻もたは
ふにれいへハその心
もあるへんし

冬ハ並もみな枯て春
あらたに生るあり又
並立がれすしてその
くきより春ハ枝をつ
すありそれを木萩と
いふなり

題とトキ

よも人にとす

秋はぎの下葉色づく今よりやひとりある人のいねかてにする

○萩ノ下葉ガソロ／＼枯カケテキタ。ア、段々ト夜ハ長ウナラウシモウ
ユレカラ又。オレガヤウナ。獨ズミノ者ハチラレヌデ。アラウカイ。

千秋云。此歌。二の句にてきたり。

鳴渡るかりの涙や落つとん物思ふ宿の萩のうへの露

○アレハテ、悲シイコナノ庭ノアノ萩ノウヘ、露ガキツウ。シゲウオ
イヌガ。ソラヲワ。タル雁モ。オレガヤウコカナシイ。ガアルカ
テ。泣テイク。スレヤアノ雁ノナク涙ガオチヌノカシラヌ。アノ萩ノ

歌ハ

萩の露玉にぬかんととればけぬよと見ん人の枝なかと見よ

○萩ノ露ガキラ／＼トシテアマリ見トキニ玉ニシテツナガウト思フテト
ツメレハチキニ消ヌ。エイワ。ソシナラ見ヤウト思フ人ハトラズニヤ
ハリ枝ニアルマハテ見ヨサ

ある人のいはく此歌のならのみかどの御うたなりと
をりて見おちぞとぬべき秋萩の枝もたわとにおける

白露

○萩ノ花ノエダモヒワ／＼トタツムホドオイタアノ露カキツウ見事ナガ。
アレヲ。折テ見ヤウトシメナラ。サダメテ落テシマウデアアラウ

萩が花ちるとん小野の露霜にぬれてを行んさよふく
ども

○今夜妹ガトコロイヘカウト思フ野道ハ萩ノ花ガ散テ。サツ露モフカイ
デアアラウガ。ヨイワヌレテイカウツ。夜ガフケテ。露ハシゲシトモ。
露霜といふいたゞ露のとなり。萬葉多し皆まかり。
千秋云。ぬれてなのをハ助辞ながら。其事を

ひさりある人とは天
をうしなひ雲に別を
ごしてひさりのみあ
るなりさらすとも云
べけれと上にもとの
心はわすれすと云に
次で下には物おもふ
やまのさ云あいたに
入るとしてしらるゝ
なり

たわらたわしとた
わめるゆりさきと云
も同言なり

露霜の所によりて露
と霜と二つなるもあ
れどこののさまにい
へるの秋更で露なが
ら霜をかねていふと

萬葉にみゆその時は
つゆ下もさ積をにと
りてよむ例

成案に熟字を一義に
用ふることを和漢とも
にその例いさみし左
傳ニ賜諸候使臣委之
唯布さあるハ臣と妾
さふたつにあらず源
氏物がたりの雨夜の
品定めの際になつた
しきつまごころ頼んど
いへるも妾のことに
て子の義にあらずま
た令義解隨國隨華に
も脱あり猶委しくハ
金杉日記にいへり今
ハ概畧を云フのみ

つよくいへ
る詞なり

是貞のみこの家の歌合よよめる

文屋のあさやす

秋の野よおくま露ハ玉なれや貫きかくるくもの糸す
ち

○萩ノ野ノ露ハ玉チヤカシテ。蛛ノ糸スギヘツナイデカケタ

題しらせ

僧正遍昭

名よめでゝおれるばかりぞ女郎花われおちにきと人に
かたるを

○女郎花ト云。名ガヨサニ。ナヨツト馬カラオリテ見タハカリ。チヤヅ
カナラズ。オレガ。女ニオチタト人ニ云テハナイヅコ。千秋云。そのかみ
しなり。ものよほくみえたり。然るべきほどの法
へしを折れるよのあらず。打開わろし。

僧正遍昭がもとならへまかりける時よととこ
山よてをとなべと見てよめる

ふるのいまとち

きとをへしうと見つゞぞ行過る男山にたてりとお
もへ

○アノ女郎花ヲバア、イタツラナ女チヤト思フテオレニヨツニ見テ、通
リ、過テイクコ、ハ男山ナレバ。男ノ中ニマツツテ。居ル女チヤト思フ
ニヨツテ、

是貞みこの家の歌合うた としゆきの朝臣

秋の野よ宿りのすべと女郎花名をむつましみ旅なとな
くよ

○トマルナラ秋ノ野ニトマルガヨイ。女郎花ガアツテ女ト云名ガムツマ
シサニヨツテ。寐ルヤウデハナイワサ。二の句のばもじ。心をつく

こゝにうしと云いぬ
ためるあまりに憂し
さなりいせ物たり
にきのふけふ雲の立
まひかくさよは花の
林をうしとさなるべし
と云に同ト

萬葉に赤人の野をな
つかしむひこ夜ねに
けりさいふたぐひな
り

上の歌と贈答のやうに次でたり

へし。餘材打聞どもよとさきぬまわろし。
千秋云。必違き所にはあらでも。常の家にはなれて。他所にて寝るを旅寐と云ふこと格なり

題とらす

どのよしき

女郎花多かる野べにやどりせばあやかくわたの名をや
立かん

○女郎花ノ多クアル野ニトマツタナラ。ワケノナイトコアタナ名ガタ、ウカヤラヌ。女郎ト云ハ名バカリデコソアレホンノ女デモナイニ

朱雀院のをみあへし合あはせによみて奉りける

左のおほいまうぢぎと

をみなへし秋の野風に打なびき心ひとつをたれよす
らん

○オミナメシガ。秋ノ野ノ風ニナビクカ。タレニ心ヲヨセテ。アノヤウニナビクヤラ。心ひとつといふいたい心といふとなり

藤原定方朝臣

秋ならで逢とかたき女郎花あまの川原よおひぬものゆ
る

○天ノ川コソタナハタノ秋デナウテハアハヌ所ナレ。アノ女郎花ハアマノ川ノカハラコハエテアルデモナイニ。秋デナウテハマフイガナリガタイ女ヤヤ

つらゆま

誰秋にあらぬ物ゆゑ女郎花なぞ色に出てまたきうつろ
ふ

○誰ガ飽あひタトイフ秋デモナイニ。女郎花ハドウシタイツ。アノヤウニ色ユデテ恨ンデ。マダ早イニウツロウノハ

みつね

妻こふる鹿ぞ鳴なるとみなへしおのがすむ野の花とし

このゆまといふ詞は
あがら云に同ト一
本に天の河原にた
ぬ物からさあるなも
てもものながらなる
をしるべし

六帖にこの歌たが秋
にあらぬものからさ
あり物ゆゑは物なが
らの略なりとは誰も
しれりさらは物ゆゑ
はものながらとおな
じ言とすべきなりま
たきはいまだきてふ
百の畧なりその時よ
りまへのことを云

らぎや

○アレ妻ヲユヒシメウ鹿ガアレナクワ。鈍ナヤツヂヤ。女郎花ヲ巳ガ
カヨウ野ノ花チヤトハ知ラヌカイ。女郎花トイヘバ女ヂヤニ。ナセア
ハヌツイ

女郎花吹過てくる秋風めけに見へねと香こそまるけ
れ

○女郎花ヲ吹テトホツテクル風ハ目ニハツレト見エタケレド。テウド女
ニ逢テキタ男ノ。ウツリガノスルヤウデ。女郎花ヲ吹テキタト云フガ。
香テサヲウツレルウイ

たぐみね

人の見るとやくるときとみなへと秋霧にのみ立かくる
らむ

○女郎花ハ。女ノ人ヲハツカシガツテ。カクレルヤウニ霧ニカクレテハ

六帖には霧のまが
きにあり此歌か
まりのまがきとあ
りしなをこそせはく
詞もうるはしから
ねバこの集にハ此
霧にのみとなをさ
れしならん

ながむるはもの思
ふ時のさびしくて
あるさまなりたは
見ることにあらず

うしろめたくはわ
がうしろの見たけ
れと見えぬ歌なる
もておじふかなき
がよあさにて何と
とにても心もどな

ツカリアルガドウ云フデアノヤウニ霧ニカクレルヤラ。アレモ人ノ見
ルノガメイワクナカイ

ひとりのみまがむるよりの女郎花わが住宿ようゑて見
ましと

○女郎花ヨ。此野原ニコノヤウニ霞ニシテレテ。ヒトリ。シボクト
シテハツカリ居ヤウヨリハオレガウツシテ植テ見ハヤシテヤラウモノ
チ。餘材よまたがふべし。打聞ハろし。千秋云ひとかとは一もさにてあるよし
にはあらず女の男にそいつしてひきり
あるよし
にいへり

もの人まかりけるに人の家よとみまへしうゑた
りけると見てよめる 兼覽王

女郎花うしろめたくも見ゆる哉われたる宿よひとりた
てれば

○アノ女郎花ハ。此アレメヤドニ。見レバ人モツカズニ。タツタ一人居

まこといへり

寝んをのべてねな
まこといへり

例によりて歌合の
歌さすべし

待てふ言によりて
野に脱かけおきて
と意得へしなり

レハサチモマアキツカイナ物カナ

寛平御時藏人所のこのことゆさが野に花見むと
てまかりたりける時かへるとてみなうたよとて
けるついでおよめる
平さたふむ
花はわかで何かへるらんととあへとおはかる野べにね
かまし物を

○見ナ色々ノ花ヲハライツハイニ。見ズニナゼニ此ヤウニカヘルナ
ヤラ。女郎花ノ多クアル野デ。コヨヒハチヤウデアツヌモノヲ。女ト
云ッ名ナレバヨイトマリ所デヤニ

是貞みこの家の歌合によめる

としゆきの朝臣

かよ人がきてぬぎかけし藤はかまくる秋ごとの野べを
よほばす

のにはほすい香なり
且この花ハ女郎花に
似て濁紫ふなり實に
香ハいたりて深きと
のなり

歌にてやせりせし人
の事いしちるれば端
にハ右のごとくかけ
るが此集の例なり

○此フデハカマハマヘカヌ何人ノ著テヌキカケテオイヌ袴ヅ。毎年ノ
秋ニナレバ此野ヘンチニホハス。今ニ此ヤウニニホウハ。ナンデモコ
レハナミタイテイノ人ノ袴デハアルマイ。ヨクノレキノ人ノ袴
デ香ガヨウシメテアルニエデアラウ

藤袴をよみて人よつかはしける

つらゆき

やどりせし人のかたとか藤袴わすられがたき香によほ
ひつゝ

○此藤袴ハイツツヤ此方デオトマリナサレヌ其様ノ形見ニオイト御歸リ
ナサツタ袴デコナルガ。今ニワスレガタイ香ガニホフデサ貴様ノイチ
オナツカシウ存ズル

ふぢはかまをよめる
ぬしちらぬかこそ匂へれ秋の野に誰ぬぎかけし藤袴ぞ

いかなるよしのあり
てかくいよみけんす
へて題しらすとある
にかやうに事あり
げなるがあり

これは袖と袂をもて
あやなせし歌なりき

○此フチハカマハ。此秋ノ野ヘタレガヌイテ掛テオイタ袴ツマア主ノシ
レヌ香ガサ。ニホテアル

題しらす

平貞文

今よりいうゑてだに見じ花すゝきはに出る秋のわびし
かりけり

○ス、キハドコニモタツサンニアル物チヤガ。ソレヤドウモセウツカナ
イチヤガ。今カラセメテハコチノ庭ニナリトモ植テハ見マヤウニセウ
ツ。アノヤウニ薄ノ穂ガデ、。秋ノケシキが見エレハキツウ物がナシ
ウテナンギナワイ。だよいなりとももの意なり

餘材だよの意なほとき得せ

寛平、御時きさらの宮の歌合の歌

在原むねやな

て袖の衣手にてたも
その袖の幸にて
臂の方をいふ

やまをさしてこの野
にある紅梅色の花な
り是のこの詞にい
しへより生れいふ
今生し立る色々の花
咲は唐なでしてなり
それにむかへてやま
と云これも古言に
はあらず

秋の野の草のたもと花すゝきはにせゝまねく袖と見
ゆらん

○ス、キノホノ風デナピクノハ。テウド人ガ色ニデ、。戀シイ人ヲマネク
袖ノヤウニ見エルガ。ス、キノ穂ハ。秋ノ野ノ穂體ノ草ノ袖カシラヌ
○此歌よて袂と袖といたい詞をかへたるのみよて同じ意なり千秋云かやうに
に留りたるら
んの旅この
にて心得べし

素性法師

われのとやあはれと思はんきりぐす鳴夕かけのやま
となでしと

○キリトースガ鳴テオモシロイユフカゲニ見事ニ咲テアルアノ撫子ト云
兒ヲ。母親ヤ乳母ナドモ打ソロウテトモトニテウアイスルヤウニタ
レニモカレニモ見セテ賞翫サセタイモノチヤニタツタ一人ノ手デソダ
テル兒ノヤウニ。オレバツカリガ。ア、ヨイ兒ヤト云テ獨リ。見ハヤサ

ウツカヤ。アツタラ此花ヲ

餘材後の説ちかし打聞わろし

題くらき

よと人しらき

とどりあるひとつ草とぞ春の見し秋の色くの花にぞありける

○春見々時ニハ。タゞ皆同ヲ青イ一ツノ草チヤトハツカリ思フタカサウデハナイ。秋ニナツテ今見レハ。コレ此ヤウニイロくノサ見ゴトナ花チヤツイ

もくこの花のひもとく秋の野に思ひたはれん人などがめそ

○ソウタイ花ノ開クラ紐トクト云チヤガ。此ヤウニイロくサマドノ草ノ花ノ帯紐トイテミダレテアル面白イ秋ノ野デ。ドレヤコチモアノ花ヲ賞断シテトモくニミダレテ。アハウチツクサウ。人ガ見タナラ。

このたはれんはなほ
めきたはふるこ
いみゆしれれども日
本紀に結婚の二字を
たぐどもよみしに
合てこの歌にてハ花
たのひもみな女の下

五
アレハマア何事チヤトフシンニ思フテアラウガ。ユルセユルセ
月草にころもいそらん朝露にぬれてのちゆうつろひ
ぬとも

○キルモノヲハ月草ノ花デスラウ。エイ色ナ物チヤ。シタカ外へ色ノウツリヤスイ物チヤニヨツテ。朝ノツユニヌレタラ。色が外ノモノヘウツ、テシマハウモ。シレヌガ。エイワサ。後ニハ。ウツ、マト云テモ

仁和のかきみこにわいしましける時ふるのた
き御覽せんとしてわいしましける道遍昭が母の
家によどり給へりける時に庭を秋のつくり
ておはん物がたりのついでによとて奉りける

僧正遍昭

里のあれて人のふりよし宿かれや庭もまがきも秋の野
うなる

せ紐さ一方にいな
せるやさもおぼゆ
月くさは今露ゆい
ふものにて古は衣に
すりたるなり

ふるの灘は大和の石
上の上るといふ所の
灘なり

野らのらひそへたる
のみにてあらのら
もよみ今もむなしか人

は野をのらといへり

○此ヤドノ義ハ。里ハアレマシタ里ナリ。住デナリマヌル者ハ老人ナリ。致シマヌレハ諸事不都合ナ宿ニエカ致シマシテ。庭モ籠モ御覽下サレマストホリ。トントハヤ秋ノ野原デゴザリマス。上句の二ツのはもじ心をかくべし

書頭 古今和歌集遠鏡卷第四終

書頭 古今和歌集遠鏡卷之五

秋歌下

是、貞みこの家の歌合の歌

文屋、康秀

吹からに秋の草木のこをるればうべ山風とあらじといふらむ

フクトソノマ、。秋ノ草ヤ木ガアノヤウニシラレ、ハ、尤ナコトギヤ。ソレデ山風ヲアラシトハ云デアラフ。千秋云。あらしといふ。名ハ此歌のこと。さく物をあらを意にて。令荒か。又あらし風といふことが。風をじといふなり。

草も木も色かひれどもわたつ海の浪の花よぞ秋あかりける

草デモ木デモ。此ノ秋ト云フ時節ガアツテ。ミナ色ガカハツテ枯テ

古今六帖にハあさや
すどあり
うバハ諸應の字にあ
てしかかるとうけか
へる言なり

浪を花と見たるかた
いにしへよりあ
る。いさまなした
づみつをにむりて
よむべしわたつみと
よむべしすまたわ

だどにさるべからせ
この歌も六帖による
におなじく朝原なり

常盤の山てふ所山城
にあるといへてこの
歌のそなたらで常盤
木のみたてる山の上
しなるべし

此ノ體によめるが萬
葉にいさ多し
霧も立バそのしめり
にて木葉の色かゝる
ゆゑに霧立てといへ
り

マウケレドモ。アノ海ノ浪ノ花ハツカリガ。イツデモ同ヲヤウニ咲テ
秋ト云フガナイツイ

秋の歌合とける時よよめる きのよこもち

もみぢせぬときいの山へふく風のおとにや秋とさくわ
たるらむ

秋デモ木ノ葉ノ色ノカハルト云フ。モナウテ常ニ住同シヤウチヤト云。
常盤山デハ。時節ガイツデヤカレレマイガ。秋デヤト云フハ。風ノ吹
ク音バカリデヨソニ聞デタデルラアノウカ

題しらす よみ人しらき

霧たちて雁ぞ鳴あるかた岡のあしたの原にもみぢらぬ
らん

霧ガ立テ。アレ雁ガサ。ナツヲ。コレデハモウ。片岡ノ朝原ハ。紅葉
アラシクデアラウ

神無月とぐれもつまだふらなくにかねてうつろふ神な
ひのもり

木葉ヲソメテ十月ノ時雨モマダフラヌニ。神ナヒノ杜ハ。ハヤカチテ
ナヤント色ガ染マツタ
ちのやぶる神なひ山のもみち葉の思ひのかけじうつろ
ふ物を

心ノカハリヤスイ人ニ思ヒヲカケルハアハウナチヤガ。此ノ神ミナ
山ノ紅葉モンソナモノヂヤ。思ヒハカケマイツ。ホドナウチツテシマ
ウモノヲ

貞観御時綾綺殿のまへに梅の木ありけり此の
方よせりける枝のもみぢをむめたりけるをう
へよこらふとのことものよみけるついでよ
める 藤原かちおむ

今も二上山のひがし
の方をいと長き岡あ
りてそこをうた聞と
いへりあらたの原も
その邊ならぬ今ハ
島にひらけてわかち
なし

貞観ノ御時清和天皇
なりこの殿におほし
ますこのままた三代
實録にみゆ

和物がたりにもお
な枝をわきて霜を
く秋なればとよめり

後撰にまつ虫の初
ふさそふ秋風わ音羽
山より吹そめにけり
といふも音羽の音を
もの音に云つなした
り

同じえとわきてこのはのうつろふ西こそ秋のはじめ
なりけれ

同ヲ一本ノ木ノ枝チヤニ。西ノ方ヘサシタ枝ガトリ分テアノヤウニ色
ノカハツタヲ見レバ。ナルホド西ガサ。秋ノハヨメキヤウイ

いし山よまうでけるとさおと山紅葉を見て
よめる

秋風の吹よと日よりおと山とねのこきるも色づきよ
けり

秋ノマナツメタ日カラシテ風ノ音モカハツチキヌガ。今日見レバ此ノ
山ノ木ドモ、ツロく色ガツイテキヌワイ。千秋云〇この際にて〇上句を心得
かひりたる意を思は
せたることなり

是貞みこの家の歌合のよめる

ととゆきの朝臣

あト露の色ハひとつをいかよとて秋のこのはをちぢに
そむとん

露ノ色ハミナ同ヲ一ツノ白イ色チヤニ。トウシテ秋ノ木ノ葉チアノヤ
ウニイロくノ色ニツメルイヤラ。千秋云〇ひさつたのまのものをの意
にて。ひさつたのものをいへるなり。

壬生忠岑

秋の夜の露とつゆとときながら雁の涙や野べをそむ
らん

秋ノ夜ノ露チハ。白イ露デソノマ、デオイテ。別ニ雁ノナツ涙チアノ
野ノ草木ヲハ。ツメルカシラヌ

題くらき

よみ人くらき

秋のつゆいろくよおけばこそ山のこのはの千種を
るらめ

秋ノ露ハタツ白イ物チヤトハカリ思フテ居ルガサウデハナイサウデ。

上にも鳴わたる雁の
なみだや落つらんと
いふにおなじ

今も近江の草津の驛
より美濃路へ行きこ
る小守山を登りてもり
山といふところあり
そこが貫之集には竹
生鳥へまうづるとき
生る山といふところ
にてあり

かきとり山ハ山科に
ありといハリ

色ナカウテオクサウナ。ソレデコソ。葉ツタ山ノ木ノ葉ガアノヤウ
ニサマノノ色デアラウ

もる山のほとりよてよめる づらゆき

あト露もこぐれもいたくもる山ハ下葉のこトき色づき
よけり

露モ時雨モキツウモルコノ。守山ノ木ドモハ下葉マデノコラズ色ツ
イタライ

秋のうたどてよめる ありいらのもとかた

雨ふれと露もくらじをかさとの山ハいかぞか紅葉を
めけん

カサトリ山ハ傘ヲモット云フ名ナレバ。雨がフツテモ。露ホトモモリ
ハ。スマイニドウシテアノヤウニ。紅葉ハソメタコトヤラ

神のやしろのあたりをまかりける時よいづきの

うちの紅葉を見てよめる づらゆき

ちはやふる神のいがまよはふ葛も秋にあへずうつろひ
よけり

コレハマア神社ノイガキニハウチアル葛ナレバ神ノ御守リデ。色ハカ
ハロソモナイモノナレド。ソレデモ。秋コハエユタヘズコ色ガカハツ
タライ

是貞とこの家の歌合よよめる いたゞみね

雨ふれわかさ取山のもとが葉ハ行かふ人のそでをこへぞ
てる

○笠取山ノ紅葉ハコトノ外ヨウ染テ往來ノ人ノ袖マデナ色ガカマヤイ
ナラリマヌ

寛平、御時きとらの宮の歌合の歌

よと人くらす

あハサの塔はてぬな
り歌によりてあつせ
す云きあハサとい
ふもありハハハハ
らす

雨ふればさし笠取
いはんとておひるの
み

あざりの色をいぢし
ほに染つくしたるな
り

さほ山は春日山の西
北にあり

立かくすのたつを錦
な截とによせていへ
り云の過たらんか
只さるよせの詞なく
て見よいと高しかし

ちらねどもかねてぞとしきもこぢ葉の今のかざりの色
と見づれば

○此、紅葉ヲ見レバ。マダチリハセチドモ。ナラヌサキカラ。惜イモウ
十分ニソメタレバ。オツ、ケチルデアラウト思ヘバサ

やまとの國にまかりける時さほ山ふ霧のたてり
けるを見てよめる

きのともものり

誰ための錦なればか秋霧のさほの山へと立かくすらん

○此、サホ山ノ紅葉ハ。タガタメニドノヤウニ大切ニスル錦デ。アノヤ
ウニ霧ガカタシテ。人ニモ見セヌコヤラ。セツカク紅葉ヲ見ヤウト思
フテキタニ

是真、みこの家の歌合の歌　よみ人しらき

秋霧のけさのを立ぞ佐保山のそ、その紅葉よそにても
みん

霧ハトウツクサハ立テクレルナイ。アノサホ山ノ柞ハ紅葉チヨソカラ
ナリに見ヤウニ

秋の歌とてよめる　坂上これのり

さほ山のは、その色の薄けれど秋の深くもなりける
かな

○ソウタイ柞ノ木ト云モノハ。ナンホ染テモ色ノアマリ濃ウハナラヌ物
ナレバ今、此サホ山ノ柞モ色ハウマウテ。深ウハナイケレドモ。アノ
ケシキチ見レバ。サテ、マア秋ハイカウ深ウナツタコナ

人のせんきいに菊にむすびつけてうるける歌

ありいらのなりひらの朝臣

うるしうるし秋なき時や咲さらん花こそ散め根さへ枯
めや

○カウシテウエテサへオイタナラバ。コレカラ後秋ト云時ガナイコト

うすきさいふにふか
かきをむかへてよる
るのみかなと云にて
秋を惜む心みゆこの
かなハ歎くことバな
り

前栽の草木たるさ
ころな云歌の端詞に
字音して云フハこの
ころよりの香らし
なり

カアツタラバヨソサカスフモアラウカシラヌガ。秋ト云時節サヘアラ
ハ咲スト云フハアルマイ。此今年ノ花コソチツチシマハウケレ根マデ
ガ枯レウカ根ハカレハセチバ。イツマデモ毎年秋ハ咲クデアラウハサ
テ

寛平御時きくの花をよませ給うける

とし行朝臣

久かたの雲の上よて見る菊ハ天あまの星とぞあやまたれけ
る

○カヤウニ禁中で見マヌル菊ノ花ハ。雲ノ上テゴザリマスニヨツテ天ノ
星チヤトサ。トリチガラレマスルワイ

この歌はまだ殿上ゆるされざりける時よめとわ
けられてつかうまつるとぞなん

是貞、この家の歌合のうた 紀友利

この注の例の後今の
しわざなり

是レハから國に慈童
さいふ人菊を愛して
命長なりし事又菊の
水のみて可成あま
りながらへたる人多
しといへるなごを本
さして折てかざらん
じりしても老せざる
へしといへり菊はか
ら國のものなればか
ら國の事をもてよむ
もよろし

露なづらをりてかざらん菊の花老せぬ秋の久しかるべ
く

○菊ノ露ハ壽命ヲ長ウスルモノチヤ。キケバ。イツマデモ年ノヨラズ秋
ノ久シウ重チテ長生ながいきヲスルヤウニ。此菊ノ花ヲ露モツノマ、デ折テ頭
ヘサ、ウ

寛平御時きくの宮の歌合の歌 大江千里

うゑし時花待どほよありし菊うつろう秋にわんとや
見し

○春ウエヌ時ニハ。早ウ花ノサシ秋ニシタイト。マナドホニ思フヌ菊ガ
マア。盛リガ過テモウ色ノカハツテシマウ時節ニナツテコノヤウニ
ナツタノチ見ヤウトハ。思フヌカイ。千秋云。結句やもしハ。やはの意にて。つろふ秋にあんぞわ思ひざりしものを
といへるなり

おまじ御時せられける菊合にすのまをつくりて

秋風の吹上とふいよ
り波のよするはつで
たり

から國に干質と云フ
人山に入て人の暮を
打ッを見る間に斧の
柄の朽たるをおどろ
きけん事を思ひてよ
めるなるべし

から國に瀟明と云人
九月九日にまがきの
菊をめぐるに酒なか
りけるに大守王弘酒
をもたせておこせし
其使白夜もを着たり
しうは詩に白衣來
と作れりその意にて
白たへの袖とよめり

菊の花うゑたりけるよくのへたりける歌ふきあ
けの濱はまのかたよ菊植たりけるをよめる

すがはらの朝臣

秋風の吹上よたてるあらぎくの花かあらぬか浪のよす
るか

○秋風ノフク吹キ上ノ濱ニアルアノ白イ菊ノ花ハ。花カサウデハナイカ
浪ノヨセルノカ。風カフクナレバ浪ノヨセルヤウニモ見ユルガ

仙宮と菊をのけて人のいたれるかたをよめる

素性法師

ぬれてほき山路のきくの露のまにいつか千年と我のへ
よけん

○在所ヘカヘツテ見タレバモハヤ千年モ過タヤウスヂヤガオレハ仙人ノ
ナミカヘイクトラ。山道ノ菊ノ花ノ中ヲ分テイテ其ノ菊ノ哥ニキル物

ノヌレタヲ干ス間ホドノチツトノマデアツタニイツノマニマア千年
モタツタヤラ

きくの花のもとよて人の人まてるかたをよめる

とものり

花見つゝ人まつ時ゝあろたへの袖かどのみゝあやまた
れける

○庭ノ菊ノ花ヲ見イ〜クル人ヲ待テ居ルトキニハツノ白イ花ガソノク
ル人ノ白イ衣ノ神ノヤウニ見エテヒタモノ。ソヂヤカトトリチガヘテ
ル、ツイ

大澤の池のかたに菊うゑたるをよめる

一もとも思ひときくをおほさの池の底よもたれかう
あけん

○タツタ一本ヂヤト思フタ菊ノ花ヂヤニ。アレ此ノ池ノ底ニモアルツア

レハ誰ガ池ノ底ハモウエヌコトヤラ。イヤ〜ヨウ見レハ影ノウツ、
タノヤヤ。千秋云〇これまで四谷の題は。みなかのすはまのかたなり。

世の中のハかききよを思ひけるをりよきくの花
と見てよめる
つらゆき

秋のきくよはふかぎりハかきしてん花よりよきとくら
ぬわが身き

〇菊ノ花チカウ咲テアルウチハ散ルマデハ。カザセテアツハウツアノ花
ヨリサキヘ死ナウモヨレヌ我身キヤモノヲ。アツハイデハ

白菊の花とよめる
凡河内、とつね

心わてにとらばやをらん初霜のおきまどひせるしら菊
の花

〇アノヤウニ初霜ガオイテ。花ヤラ霜ヤラシレヌヤウニマカウテ見エル。
白イ菊ノ花ハタイガイスイリヤウデ。チラバ。折モセウガナカ

きくのさかりに秋の
霜ふりきあしたのさ
まをよめり
心あては置きたる物
なやみの秋に行て
るがごとし

く見分ラハ、コトハナイ

是貞、この家の歌合のうた よみ人しらす

いろかひる秋のきくをバ一とせよふた〜びにはふ花と
こそ見れ

〇ハマメノホド、ハトント格別ニ色ノカハツタアノ菊ノ花ハ。同マ本ノ

花トハ見エヌ一年ニ二度サイタ花チヤト、思ハル、餘材下句意に違
り。打聞よろし

仁和寺にきくの花めしける時に歌をへてまれと
おほせられければよみて奉りける

平、さたふん

秋とおきて時こそありけれきくの花うつろふからに色
のまされ

〇キクノ花ハ。ウツロイマヤテカラ。又カヤウニ始メヨリハ色がマサリ

仁和寺ハ光孝天皇の
仁和四年に京の西山
に作られしより仁和
寺ニシヨ